
IRREGULARS (旧2008年試作版)

陸一 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IRREGULARS（旧2008年試作版）

【Zコード】

Z8700F

【作者名】

陸一潤

【あらすじ】

リメイク版のため、こちらをプロトタイプとしました。リメイク版では印象がやや変わりますが話は特に変わりません。名前の通り『物語』を『管理』し、その世界の筋書きを守る『物語管理局』に所属する毒舌美少女・エリカと猪突猛進・晴光、生真面目なビスの三人ととその相棒『本』達。新設の部隊員に抜擢された三人が選ばれた理由は？共通点とは？そして対する『筋書き』に存在しないモノ、『異端者 イレギュラー』の存在は？

総て（前書き）

同じ景色は違う人間だから見られないけれど、出来るなら君の隣で
少し違う景色を見させて
共に戦うときは背中を任せるから

永遠に、は無理だけれど、せめて今だけは君と在りたいのです

総て

世界を壊すのは思つてこる以上に簡単だ。

それは強固な殻に守られ、一見砕けることの無いダイヤモンドの塊である。

しかしそれの中心にある核を少し突けばどうしたもののが溢れ出し、とたんにその殻がはじけるほどにそれを満たしていくのである。計算して突けば、ダイヤモンドでさえも簡単に砕けるのだ。

さて、その核は世界のビーム、ビのよひみの姿で存在しているのだろうか。

それは思いがけない形で知ることが出来る。
それは君のすぐ近くにあるのだ。

あるいは君の枕元。

あるいは四角い箱の中。

あるいは君の頭の中。

世界を壊すのは思つてこる以上に簡単なのだ。

強固な殻も、たつた一つの異分子でたやすく砕けてしまつのだ。
しかしそれを守つゝとする者も確かに存在するのも事実。

君はどちらを選ぶのだろうか。

僕はそれが気になつてならない。

(「この作品についての注意）

この作品ページを開いてください、有難う」ございます。

俺は作品内に作者が登場するのは邪道派なので、『雰囲気を壊したくない！』という方は飛ばしてくださいって結構です。でも後で一読お願いします。

よろしいですか？

まず、お分かりの方（主にブログから来た方）、または「ここまで感じている方もいると思いますが、この作品は『夢小説』というジャンルの一次創作が下地になっています。

『それはちょっと』と思った方！ちょっと待ってください……（土下座）

コンセプトとして、『二次創作（または夢小説）にしたい世界觀を！』と思つて出来上がつた話で、これは完全オリジナル、一次創作です。でも特殊用語として、『トリップ』『クロスオーバー』等の特殊用語を使用します。

ちょっとアレな「じつけ（設定）もあります。（逆ハーとかの）

『夢小説』というジャンルはとてもデリケートなジャンルなので、贊否両論あるだろうと思いますが、先入観無しに読んで欲しいと思っています。

もちろん作者は一次創作・夢小説・同人的要素含で 推奨派です。

『やつたるゼー』という方はいけいけどどんどんやつちやつて下さい。パクリは駄目ですが、作品の台詞等の引用もおつけ一です。（地の文は駄目ですよ！）

ブログで公開しているイラスト等も、そのままは駄目ですが、ネタとしてのトレス（投稿映像サイトでのアレとかコレとか）、等好きに書いて（描いて）頂いて結構です。まんまパクリで投稿などやられた場合は更新停止もあります。

『この作品借りたいです』という方は、報告していただければいつでもオーケーです。

長々と失礼いたしました。
ではお楽しみください。

（筆）

（09年4月14日・加

総て（後書き）

なお、序章があまりにも長いため、
『閑話と白銀の童子編』だけでも本
編に進めるようになつております。

序章 漆黒の魔女（前書き）

裏話・設定・ちょっとアレな話等はブログ、【幻空帖】（<http://ameblo.jp/ume-6/>）にて公開中。

序章 漆黒の魔女

【異端者・一】

無知は時に罪になる
知も時に罪になる

背負つ罪は江北も同じ

私は知ることを選んだ

知らないことでもう後悔したくは無いからだ

無知を選ぶのを恥じるとは無い
知を選んだことに胸を張るな

これは選択

お前の道を選んで進め

道は違えど、必ず後悔はするのだから
より深く誓いを立てられる方に進め
搖ぎ無いほつに進め

前を見なけばいけない、なんてことはないのだから

(『田和口記』知の神アラン)

秋の収穫も終わり。

今年は豊作だ、とコックの父が漏らしているのをヨーリは朝食の席で聞いたばかりだった。

ぐるりと森に囲まれた小さな村で、たつた一つの定食屋の一人息子であるヨーリは今年の春10になつた男の子だ。

今日は常連の宿屋の女主人アリエまでの配達のお遣いとついでに、宿屋でお客に出す料理の注文を頼まれていて昼あたりからバタバタしていた。

そう、確か17で宿屋を切り盛りする村のアイドル的な存在の美少女に頬を赤らめて、少しご機嫌で帰宅したのだ。

そして気づけばベットの上だった。

どうやら寝入つてしまつたらしく、唐突な外の騒ぎに眼を覚ました。うつ伏せになつた腹の辺りに読んでいた本がよれよれになつて下敷きになつてしまつていて少し痛い。

頭の寝癖を撫で付けてから外に出る。父は自分と同じように外に見に行つたのか。家にはいなかつた。

扉を開けると冬も近いにもかかわらず、ボウツと暖かい強風がヨリを襲う。

まるで春のようだ。

ちょっとだけ眼を見開いてあたりを見渡し、右往左往する顔見知りの「ご近所さんたちが目に入つた。

「森まで火が回るぞ！」「切り倒せ！」「ルーウィンの家まで移つたぞ」「水を！」「川からもつてこい！」「男はバケツを持つて川に走れ！」「消火消火！」「女子供老人は水車小屋に！」あ、火事か。

無感情にそう思つた。脳が凍つてしまつたかのように動かない。

「エエ、アセアセ、アカアカー。」

「宿屋だよーー。」

ジユックと音を立てて氷が熱氣で溶かされた。

走る。

足を左右に動かすだけのことがこんなにも億劫だとは。

熱のこもった風とあいまつて砂埃が舞つた。心なしか空気が埃っぽく感じた。

火に包まれているであらひ宿屋はまだ見えなかつたが、どんどんあがる気温に汗が流れる。

五メートルくらい先の角からちらちら赤い光が見えた。

「つうわあ・・・・」

あかいせかい。

本で見た、地獄にある火の世界。赤い光は強すぎて、その前で右往左往する人型は黒い影に見えた。火の中で許しを請う咎人だろうか。煙はもうもうと上へと上つている。

綺麗過ぎて怖い。慌ててその考えを打ち消した。

よくよく見れば踊る黒い影は火を消そうと奮闘する顔見知りばかりだった。見たことも無いほど顔を歪めて動き回っている。

「ねえ！？」

ぱつと近くにいた一人の年上の少年が振り返った。だがこちらを向かると顔が真っ暗でよく見えない。

「大丈夫なの！？」

少年は「大丈夫」を自分への心配か火事への心配か怪我人の心配か量りかねたようだった。

「・・・・えーと、」

少年は首をかしげて少し汗をぬぐつた。

「あー・・・・うん。大丈夫だよ。火はもう消えるし。絶対大丈夫」

男とも女ともつかない、少し高めの声が赤い世界に不釣合いな明るい声で朗らかに言った。

「君の村は大丈夫」

まるで自分がこの村の人間じゃないみたいな言い方だ、と思つた。

「あなたは旅人さん？」

「うん。仕事。連れと一人でね」

ああやつぱり。雰囲気で、笑つたんだろうなとこいつことが分かつた。

「連れを待つてるんだ」

「置いていかれたの？」

「まさか。彼女は僕のパートナーだし。仕事つて言つたでしょ？」
ちらりと少年は火を見やつた。赤い光に照らされて少年の横顔が少し見える。前に見た、東から来た行商の人によし似ていた。

「僕らはこの火を消しにきたんだ」

ぽつり
雨が降つてきた。

ラースは苛立つていた。

火が消えないのだ。先ほどから雨が降り出したといつに一向に衰えを見せない。

選挙で村長になつて今年で8年。もうそろそろ代替わりの頃合だ。こんなことはまだ若いころに一度見たつきりで、まさか自分が村長の間に起こるとは思わなかつた。当時は復興に2年かかつた。時代は大分便利になつたが、今回はどれだけかかるだらうか。

頭をかきむしりたいのを我慢しながら指示を出すために走り回る。
ああ、走つたのなんて何年ぶりだ！？
空はとつくに暗い。

爆発があつてから何時間たつただらうか。田の出はまだか。否、意外と一時間ほどしかたつていののかもしれない。

そうだ爆発だ。

何でこんなちつぽけな村で爆発なんか。

しかも出たのはあの宿屋だ。17の女の子が一人で切り盛りする宿屋。幸い出でていて助かった彼女が言つには、今日は一人も客はないなかつたといつ。

何故？

「魔法の匂いだ」

喧騒の中、するりと低音が耳に入った。

驚いて見ると、二つの間にそこにはいたのか、真つ黒な塊がぼつぼつと立つていて。

「ペルーか」

「あラースさんこんばんは」

村はずれにすむ魔術使いの青年に、ラースは渋い顔をした。

「お前なんで村まで下りてきたんだ？どうこつことだ」

「なんとなく？特に理由なんてありませんよ。

「どうこつこととも何も、この火は魔法でしょ。ちがうんですか」

じろりと見るラースに、ペルーは鼻先まで伸びた黒髪の間から睨む。

「おれじゃないですからね。めんべくさいしやりませんよ、こういいうことは」

つーか出来ませんし。さつぱり言い切り、ペルーは腕を組んで紅蓮の炎を見やる。

「ラースさんもたいへんですよねえ」

空言のよつなその言い方に青筋が浮かんだ。

「ボケツと突つ立つてないで消せ！…並以下でもそれくらい出来るだろう！…？」

「嫌だそんなめ 無理無理おれには無理ですよ」

苛立ち、なんてものじやない。

「無理でもやれエエエエエエ…！」

「何やつてんですか村長！…油売つてないで手伝つてください！…」
村の若者的一人ががしりとラースの腕をつかみ、ペルーに身を乗り出していたそれを引き離した。そのままざるざると弓をさる様に羽交い絞めにして引っ張る。

「ちょ、ちょっと待て、ペルーが…・ペルーが今、この火は魔法の火だと！…」

慌てていつたラースに若者は眉を寄せた。

「ペルー？あの頭パーンしちやつてるペルーフスか？アイツは森の小屋に引きこもりでしょ。出て来やしませんつて」

ほらほら今大変なんスから。ずるずる更に引っ張る彼に、ラースは声を荒げ半ば叫ぶよつて言つた。

「馬鹿かお前は！…もし魔法の火ならただの水！」とさに消せるわけないだろ？が！…」

漆黒の魔女

雨脚は強まるばかりだった。しかし火は未だ消えない。

「君は一度帰つたほうがいいよ。ここにいても邪魔になる」有無を言わせない口調だ。

不本意だったが少年が言つとももつともで、コーリは後ろ髪引かれる思いでそこを離れた。

（もしかしたら父さん帰つてきて探してくるかな・・・）

コーリの家のレストランは幸い風上の方角で、ほとんど火の心配はしなくて良かった。しかしそれも村を囲む森に燃え移つたらわからぬ。枝が重なるように木が立っているあの森は、さぞよく燃えるだろう。

いつもは暗くてオバケが出そつで怖い森もあの地獄の火に焼き尽くされるかと思うと、このときばかりは少し愛しいものに思えた。

「ただいま」

「ああコーリ！...どこ行つてたんだいこんな時に！」

普段は温和な父が声を荒げる。

そのことに申し訳なさと滯りを感じながら声を低くして謝つた。

「父さん、村は大丈夫なのかな？」

「心配ないさ。でも、もし何かあっても川岸の水車小屋にいればいい。あそこは避難場所になつていてるから誰かしら助けてくれる」話しながらも彼は慌しく荷物をかばんに詰めていく。店が焼けても何か元手があればまたやり直すことが出来るかららしい。小さなかばんには、コーリが小さなじろに亡くなつた母の写真や大事にしていた宝石類も入つていた。

「これだけは無くすわけにはいかないからね
そう言つてそれをユーリに持たせる。

「私は手伝いに行かないといけないから、ユーリは避難場所に行つ
ておいてくれ。最近若い奴は町に行つてしまつて男手が足りないん
だ」

ユーリは避難する大人たちのグループに従つて歩いていた。大人と
いつても女性や老人達で、火をよけてぐるりと迂回して少し森を歩
かなければならぬ。村に子供はあまりいないのでユーリはこのグ
ループではただ一人の子供で、男だつた。

「もう災難だよねエ」

「ハハ、本当だよ。お先真つ暗だ。この道もこれからも」

「お婆ちゃん、暗いからそこ気をつけてね。」

宿屋のアリエも出かけていて助かつたんでしょう？今のところ火で
誰か死んだつていうのは聞いていないし村が燃えても大丈夫よ。む
しろ復旧したら前より良くなるかもね」

「ユーリ、アンタもしつかりしておくれよ」

意外と皆楽天的だ。話を聞いてほとんどあきらめていたアリエが助
かつたということを聞いて安堵しながらも、ユーリはそのことに少
し驚いていた。

さつき見かけた村長さんは真つ青になつて声を必要以上にはりあげ
ていたのに。

「水車小屋が燃えなければ大丈夫だよ」

川は村の真ん中を通るものと分かれてはずれにもう一本ある。森と

の境目にあつた。その川岸の水車小屋がヨーリ達が目指す水車小屋だつた。村にある川よりもこちらのはずれの川のほうが太くゆるやかで、水車小屋も『小屋』というには数口金のない旅人が利用するくらいはある。

この小さな村にしては設備が整つていて、村長が別荘にしたがつてゐるという噂もあつた。

(そういえば)

あの旅人の少年はもしかしてあの水車小屋に泊まつたのだろうか。彼は荷物を持つていなかつたし、宿先においてきたのかもしれない。

パキン

何かが割れる音がした。続くように、メキメキといつ音と共にゆつくりと影が濃くなる。

ヒュン、とカマイタチのような鋭い風が吹いた。

「逃げなさい！…」

「本当に大丈夫かあ？」

誰かのいぶかしげな咳きを耳が拾つた。

先ほどアース率いる村の男衆に捕縛されたペルーは一番火が大きいだろう所で魔術の詠唱を始めている。会話する言葉とは違うそれは、自分達には到底聞き取れないものだ。

「えー・・・あそだ じゃない間違えた。

えーと、」

聞き取れないもののはずなのだ。なのにたまにそれとは違う言葉が混ざっているのはどういうことか。

腕のいい魔術使いは詠唱無しに魔術を使えるそうだが、ペルーにそれを期待するのは馬鹿のすることだ。所詮は小さな村の魔術を少しがじつただけの子供だから。

「・・・・自分の村一つ守れやしねエのか」

村人は悪態をつきながらとっくに消火作業に戻っていた。

「おい見ろーー！」

何だ、振り向くと火がみるみる小さくなっていくのがわかつた。

皆、言葉も出さずにそれを見つめている。どうこうことだ。ペルーが、

『あの』ペルーが本当にやつたのか？そんな馬鹿な。

人々、村の恩人に対するには失礼なことを考えながら立ち尽くしている。

いつのまにか、あの真っ黒い影のような青年はいなくなっていた。

「大丈夫？」

ゆるゆると眼を開けると、黒い何かが眼に入った。

それが真っ暗な中の人の影だと気づくのに数秒かかる。少女のようだった。

「ごめんね、巻き込んだじゃって。

木が倒れたのに掠つたのよ貴方。それでよっぽど驚いたのね」

大丈夫？ 怪我はない？ ゆっくり彼女はコーリの頭を瘤が無いか確かめるように撫でた。

「大丈夫だけど……そうだ、皆は」

「先に行つたわ。十分くらい前ね。私が送るから、立てる？」

体を起こすとしっかりと足が地面を踏んだ。

横を見れば彼女の背は自分より頭半分くらい高いことがわかる。自分の背はこの年頃にしては少し大きいことを知っていたので、14歳かと思った。

手に何か持っている。右手に長い棒のやうなものと左手に四角い箱のやうなもの。

「大丈夫。ねえ、君は？」

真っ黒い影のままの彼女に問いかけると、さつと振り返つてこいつらを見たのを感じた。

一瞬の沈黙に、先に名乗りもしないのに名前を聞くのは無礼だと気付いた。

「えっと、ぼくはコーリつていうんだ」

「私はエリカ。エリカ＝クロックフォードよ」

キラリ

僅かな月明かりに照らされて、ゴーリは彼女の右手にあるものが緩やかに湾曲した剣だと見止めた。

漆黒の魔女

「足元に気をつけて。私手が空いてないの」

いつのまにか雨は上がっていた。

彼女、エリカは道なき道をずんずん進む。茂みをぐぐると冷たい雨が肌に当たつて身震いした。

「あ、あの・・・」

剥き出しの剣に恐怖を感じるのは確かだつた。

でも彼女は右側のコーリに当たらないように刃を左手に持ち替えて除けてくれている。その替わりに右手に持ち替えた四角い箱のようなものが、辞書のようにたいそつ分厚い本だと気付いた。表紙が皮張りだ。

剣は危ない夜の森を歩くための護身用だと一人で納得した。

森の中を進んでしばらぐ。

すでに暗い夜道でここが森のどこかもわからなくなつたころだつた。広場のような、月明かりが当たる小屋のあるところに出た。

満月に照らされたそこに出で、やつとエリカの姿を見止めた。

ぴつちりとした、短い黒のシャツワンピースを着ている。真ん中を走る白いラインの所にファスナーがあつた。長い黒髪を纏めて銀色のバレッタで止めている。

本と剣を持つ両手にも黒い手袋がはめてあるしで全身真っ黒な服装だつた。

「いじよ

彼女に眼で促された。

「え？！」

見たことの無い所だ。

避難場所まで案内してくれるのはなかつたのか。

思わず出た声に、エリカは当たり前のよつて『入れ』といつぶつて顎をしゃくつた。

『知らない人について行つたらいけない』なんてこと、すつと小さいこりから父さんに言われている。

そういえば彼女は剣を持っていた。

護身用のあれでばつさりやられるかもしれない。

逃げるのは？

無理だ。足は速くない。

心臓の音が大きく体を響かせた。

軽く背を押されて小屋に入った。

小屋の中は板張りの床と壁にぎりぎりと棚や箪笥が綺麗に整頓されていて並んでいる。

ベットやテーブルがあるといろから、誰かが生活してゐるとは容易に想像できた。

「遅い」

低めの声がした。

肩を跳ねて見れば、ドアの影に黒いローブ姿の男が腕を組んで立つている。

「じめんなさい。

こつちは逃げられたわ。貴方は？」

「ちやんとやつたよ。君に言われたようにね」

「部屋が冷える。閉めて」男に言われて、エリカは扉の前にいたコリーを押しのけて扉を閉めた。蝶番の錆付いた音が耳に残る。

男は酷くゆつくりとした動作でストーブの火種を大きくした。

「貴方も座りなさい」

エリカは勝手に椅子を引っ張つてくると足を組んで背もたれに首を乗せ、くつろぐ体制になっていた。ヨーリも戸惑いながら手作りらしい不恰好な一番小さな椅子に座る。

火を大きくした男も席に着くと、エリカが体を起こして口を開いた。

「まずはご協力感謝いたします、魔術使いペルー様。そして始めまして、ユリア』スタン様。

私は物語管理局夢人課、調整部第五部隊員エリカ』A』クロックフォード。

お二人にはこの物語世界の登場人物代表として私達にご協力願いたいのです」

「僕の名前・・・・

ユリア』スタンはヨーリの本当の名前だつた。『ユリア』というのが女の子みたいであまり好きじゃなかつたが、母がつけてくれた名前なので大切にしている。

しかし皆ヨーリと呼ぶので、『ユリア』の名前を知っている人は父と母、特に仲のいい知り合い等だけである。

ペルーが楽しそうな顔を隠し切れないままわざとらしく不機嫌な声で言った。

「ユメビト？ モノガタリカンリキヨク？

初耳だな。オレの時は話してくれなかつたじゃないか。国の秘密工作員つてことだつただろう？」

「同じ事は一回言いたくないの。役者は揃つたもの」

そういうて二人をちらりと見やる。彼女はゆつたりと、しかし憮然

として言い放つた。

「質問はいくらでも受け付けるわよ」「

ペルーのカリ力を見る眼光は鋭かつた。射抜くような視線を向けて、しかし柔らかい口調で言葉をつむぐ。

「君の素性をすべて明かしてくれ。これ以上俺が、いや、俺達が君に協力できるかどうか見極める」

「それならその大混乱してるコーリ君にも貴方から自己紹介したほうがいいんじゃないの。貴方自身、この子とは初対面でしょうに確かにその通りだった。

しかしいきなり注目され、コーリは体を強張らせる。何がなんだかわからなくて、恐怖やらなんやらが一緒にすべて凍り固まってしまったようだった。

「君は村の子?」

「え、あっはい!」

「そ

それだけか。

言つたきり口を噤んでしまつたペルーにコーリは困惑の色を示す。ペルーはそれをチラリと見やるともう一度口を開いた。

「俺は一応村の魔術使いだ。育つたのもこの村で、たぶん君の学校の先輩にあたる。もともと俺を育ててくれてた魔術使いの婆ちゃんが死んだ後を継いだ。人付き合いつてモンが苦手なもんでこんな辺鄙などに住んでる。この女とは昨日会つたばかりで、面白そうだから協力した。年は17。わかつたか

「は、はい」

「はい終わり。次アンタの番」

これは自己紹介といえるのか。彼女もいろいろ思つところがあるようで、僅かに眉を顰めた。

「貴方ねえ、・・・・・いいわ。

時間が惜しいもの。さつと話すから判らないといふは言って頂戴。

私は『物語管理局』名のとおり、『物語』の『世界』を『管理・保護』する組織で働いてる、世界を渡る力を持つ『夢人』と呼ばれる職業の者よ。

私はパートナーと共に世界を渡り、その物語世界の『筋書き』には出てこないモノ、『異端者』^{イレギュラー}をこの世界から駆除、もしくは排除するためにはこの世界に来たの。

私達夢人は、物語の『筋書き』を侵す『異端』^{イレギュラー}、この世界に存在してはいけない異分子を他世界に排除し、世界の均衡^{バランス}を守ること。

『異端者』^{イレギュラー}の姿は多種多様、この世界の住人にしかわからない違いだつてあるわ。それを見つけてほしいのよ

「それが君の言う協力か」

ペルーはテーブルに身を乗り出して頬杖をついた。黒髪の間から見える同色の瞳は『』なりにゆがけられている。

「いいぜ。手伝つてやる」

ユーリははつ、と蒼い顔で叫んだ。

「ちよつと待つてよー！」

漆黒の魔女

「ちよつと待つてよー。」

コーリはたまらず声を上げた。一斉に一組の双眸がコーリに向かつ。怯みながらも、コーリは声を振り絞つて言つた。

「だつて・・・・それつて、僕らの世界が物語の、紙の上の世界つてことじょうー? そんなの、何がなんだかわからなくてつ・・・・」

「いざ言葉をつむぎだすと止らなかつた。

「それに・・・そんなの・・・・」

しかし何を、どう言えぱいいのか。頭の中は今までに無いほどぐらやぐらで、ただはつきりわかったのは、『大変だ』とことじとと何故かどつしおりもなく悔しごーとだけだつた。

「・・・せうだよ・・・僕らは紙の上の人間じゃないーー。」

『そうだ』

『これだ』

コーリは言つ終わつたとたん、ぶわりと涙が出た。

「せうだよ、だつて、父さんは、だつて、え、」

嗚咽交じりで言葉にならない。それだけじゃない、言いたいことまだあつたはずなのだ。なんて情けない。

「貴方、頭いいのね」

否定するでもなく、エリカはコーリの前にしゃがんで田線を合わせた。

「結構難しかつたでしょうに。普通、あれだけでこんなに現状把握してくれないのでよ。いつも苦労するのよね私達」

涙を拭くので必死で、彼女の顔は見えなかつた。

「この世界は紙の上なんかじゃないわ。

確かにこの世界は『物語』の世界として読まれているけど、確かにここに現実として在るのよ。私の故郷だつて、違う世界で『物語』として読まれてる。文字の羅列じゃない

「大丈夫よ」そう言って、手のひらがポン、と頭に乗つたのを感じた。それなのに涙は一向にとまらない。

「男前だな、アンタ」

ペルーが溜息と共に吐き出すように咳いたのが聞こえた。「ウチの婆ちゃんそつくりだ」

「僕、何をしたらしい？」
彼女は涙が止るまで待つてくれていた。
彼女もこのペルーという青年も胡散臭い。でも、なんとなくいい人だ。
はつきりと文章にすることはできない勘のよつな感覚だったが、確かにそういう思つ。

「簡単よ。私を貴方達と一緒に行動させてほしいの。そうすれば私は『筋書き』に組み込まれるわ

「それだけ？」

「そう。貴方達はこの世界の人で、いわば登場人物。

物語は登場人物に沿つて進むものでしょ？私は部外者だもの」

「お前も『異端』つてことか」

「理解が早くて助かるわ。

『異端』とは、この世界にあるはずのないもの、違う世界のものよ。それは人だつたり、動物だつたり、物だつたりね。私ももちろん、この世界に無いもの、『異端者』よ

「1・この世界は、少なくとも君の所では、物語の世界として読まれている。

2・そして君は違う世界、異世界から、『筋書き』通りに物語を進めるために『物語管理局』から『異端』を排除するため派遣された『夢人』と呼ばれる職業の人。

で、3・俺らが協力するのは『君と一緒に行動する』こと。4・それによつて君は『筋書き』に組み込まれる。

5・『異端』の姿は君にも分からぬ。でも君が見ればすぐにソレとわかる

「上出来よ。でも貴方、何回確認しないと駄目なのよ

「俺は頭が悪いんでね」

にやり、皮肉を含ませ、ペルーはエリカの本を見ているゴーリを見やる。

黒だと思っていた皮の表紙は明るいことこのほどよくよく見れば血のように深く真つ赤な色で、黒い花のような模様が一つ大きく真ん中に

描かれていた。ページはたいそう分厚く、数百ページはある。持つてみればずつしり重く、どうすればエリカの細い片腕で持つていらされたのか不思議な程だつた。

「あんまり触らない方がいいわよ。後で『セクハラだ』って文句言われるから」

「え、何それ。魔本なのかよ、ソレ」

「魔本！？」

魔術をかけられた本を魔本という。意思があり、勝手に話すものもあるが、そういうのは多くが呪文を呴く呪いのかけられたものなのだ。思わずユーリは落としそうになってしまった。

「いつちょまえにセクハラ訴えるのかよ。本の癖に」

「本にだつて色々あるのよ。本権訴えたくなる時とか」

エリカはユーリから本を取り上げ、見せ付けるように背表紙をなでて憮然とペルーに言い放つ。よほど大事なものらしかつた。

「ペルーはどこだー！？」

「アースさん」

大きな音を立てて開いた扉に中の者全員が振り返つた。

避難場所である川岸の水車小屋は避難者で溢れ返り、退屈を持て余した子供が駆け回つて怒られていたり、神妙な顔をした男達が隅で眉を寄せ合つていたりでなかなかに混然としている。

「火が消えた」

この嬉しいニュースはすぐにここにも届いたが、被害は甚大。しかし立て直せないほどでもない。複雑な大人達に対して、先ほどまで同じように神妙な顔をしていた子供達も今や、この通り笑顔を取り戻していた。

その中で、どの大人よりも神妙な顔のアース村長が声を張り上げる。

「ペルーはどこだ！」

「森の自分の小屋へ帰つたんでしょう。あそこまでは火は届かなかつたですし」

「馬鹿を言つたな！ あそこまで行く道は今デカイ炭で通れん。森を突つ切るのも危険だ、あの面倒くさがりがそんなことするはずないだろ？ 私がよく知つている」

「ああ、教え子でしたね確か」

うんざりとした様に、中年に片足をつけた男が言つ。

「なんですかもう。今は他の事を考えましょつや。アイツへの礼は今度でもいいでしょう」

「違う違う！ そうじやない！」

様子がおかしい。

雰囲気を感じ取り、男と話を聞いていた大人達が表情を変えた。

「・・・・何か、あつたんですか」

おそるおそる、確かめるように口を開く。

「嗚呼、何かも何もあつたもんじゃない！ 定食屋のコーリ坊が行方不明だ！」

息を呑んだのは恐らくその場の全員であろう。面倒見がよく、真面目な少年だ。小さな村で在るがゆえに皆、少なからず知つている。

「それは、」「それだけじゃない！！」

一寸の時間も惜しいのか、声を上げた者を遮り、アースは続けた。

「「」の炎で魔獣が集まつてきている……」

普通、火とは獸を退けるものだ。

火、炎とは人間だけが扱えるともいえる文化の象徴であり、逆に人間以外のものには燃え尽くすだけの破壊以外の何物でもない。ゆえに、人間だけが持てる武器ともいえる。

だがしかしソレは

数少ない【例外】だった。

「えッ、エリカさん……」

「なによ！？」

暴れる髪をそのままに、森の中を木を避けながら進む一つの真っ黒い影。

徐々に上がつていく息に苛立ちを感じながら、エリカは叫ぶように声を返した。

「煩いわよー叫ばないで」

「で、でもつつ！」

「姫抱き位で耳元でガタガタガタガタ言つてんじゃないわよ重いのよー」

「わー言わないでー重いなら降りるよー」

「だつてユーリ君遅いじゃないー文句言わないで男でしょーー？」

「男だから文句言つてるんだよーー」

何で女子にお姫様抱っこされなきやいけないのー？当然の抗議は受け付けられず、エリカは無言で足を動かすことに専念することに

したようだった。

同年代より背が高いといつても、小柄なユーリは森を突つ切るのに向かない。

確かにこれなら負ふさるよりも本はしつかりと抱えられる。大事な本は何があつても傷一つ付けられないらしかつた。

「ちよちよ、モソ、く、」

アンタは体力無さすぎだね

「…おれは…ヤンエスなんだよ!!」

御手の刀一ノル お咲ハ

あ、~~~~~もーいい俺限界！ちょっと止まれーー！」

倒れている木を飛び越えようとしたエリカの足が止まる。それだけ叫べるんなら大丈夫じゃ、とちよつと思つたが口には出せない。否、出せなかつた。

へたり込んだベ川にはほとんど過呼吸のよくな状態で、金魚のよくに口をパクパクさせている。こんな状況じゃなければ笑つてしまいそうな姿だった。

(僕) 何でこの人怖がってたんだ? (・・・)

「ちょっと大丈夫? まだ百メートルも進んでないんだけど」

あ、
あり、
えない、
お前どんな足してんたよ・・・・・」

エリカの方はすでに落ち着いていた。

ヨーリはエリカに下ろしてもらい、ペルーの背中をさする。

「走るのは無理？」

「いや、いいや。走るのは無理だが、俺が責任とつて何とかするふう、と息を吐いて汗をぬぐつ。

「ちょっと移動していいか。時間はかからない

漆黒の魔女

「被害は？」

「消火できているかどうか確認してまわっていた所をジョーンが腕をやられた。火を噴いた。火傷は酷いが、命に別状は無い」

「ジョーンは・・・」

「動かせないんで、私の家だ。何人かが診ている。」

目撃者はジョーンと兄貴のジョージの二人。でかい蜥蜴の^{ヤツ}ような姿に赤い鱗を付けたような「見たことの無い魔獸だそうだ」

アースが説明し終わると数人の男達が飛び出していく。アースは一度大きく呼吸するとそろそろと部屋の隅に座った。

「はあ・・・なんてことだ」

「大丈夫ですか？」

「おお、アリエか」

栗色の髪の少女にアースは少し笑いかけてからすぐに表情を険しく戻す。それを見て宿屋の店主である少女は眉を下げたまま、背を伸ばした。

「原因は分からないのか？」

この数時間で何度もこの質問をされただろう。「わかりません」

「私は昼過ぎに薪が切れているのに気付いて出てましたから、店は誰も。今日はお客もいなかつたので火もほとんど使ってません。朝は残り物で済ませて ああ、そういうえばお昼はユーリ君が届けてくれて」

「村長」

「ああ、もういいわかったから」

咎める様にあがつた声にアリエを黙らせる。憔悴しきつたアリエはふつつりと何も言わなくなつた。

「誰か、手伝つてくれ。アイツの十八番は『失せモノさがし』の魔術だ。魔獸もどこにいるかわかるだろ？ あいつの事だ、きっと安全な場所に潜んでいる」

「あの馬鹿め、こんなことばかり腕をあげおつて……」咳き、重い腰を上げた。

「畜生……」

なんだつて俺が！

悪態をつきながら鞭のようになつて見える炎を避けた。

この時ほど、農作業で疲れた体に鞭打つてでも弟達と遊んでいて良かったと思つたことは無い。鬼ごっこやらは意外とトレーニングになるらしい。本気で遊んでいて良かつたと心底思つ。

今年で27になる彼は少しボケたことを考えながらも、その傍ら対抗策も練つていた。

（俺が倒すなんて論外だ。逃げるだけでも精一杯だし、体力的にもキツくなってきた。ああもう、この状況、まるで昔読んだ小説みたいじゃねエかよ……ってアレ？ てことは俺最初の被害者？

はは・・・笑えねー。火炙りって一番惨い死に方じゃん。死ぬまで拷問つて言うし・・・火炙り？・・・火？）

「あ」

思いつき、少し悩んでから背を向け走る。あの魔獸が足が速くないことを祈つた。後ろはもう怖くて振り返られない。

足元が小石に変わる。躊躇なんてゴメンだ。大きい石の無いところを走つた。やがてざばざばと水に足元が浸かり、その靴の中を犯す冷たい水にも負けずに進む。

（火なら水だろ！）

その安直な考えは功を奏し、赤い魔獸は川の手前でたたらを踏んでいる。ほくそ笑むと、足を止めた。川の流れと水の抵抗に逆らつて足を動かすのはなかなかに辛い。

「ふう・・・・・」

アレが諦めてどこかへ行くか、誰か来るのを待とう。早くもかじかんできた指先を揉みながら、川岸でなにやらもぞもぞしている蜥蜴のような体躯を見やる。

そのときだった。

蜥蜴の平べつたいた巨体がしなり口を大きく開けた。（あ、そうか火はここまで　　！）

射程範囲内だ、そう気付いて横に避けようと体を動かすが、水の中では巧く体が動かない。ではしゃがむか、とすれば、（冷たいんだろうな・・・・）馬鹿か！こんな時に！

一瞬だ。しかしその一瞬の脳内会話の間に、赤いモノは眼と鼻の先に迫つていた。

「 ッッ！ 」

飛沫と白い靄が立ち上る。熱で、空気が膨張したかのような突風がそこにだけ巻き起こった。息を殺し水の中で縮こまっていた彼はややあつて、そろそろと瞼を開ける。

彼は一時、我が目を疑つた。

「ベストタイミングにも程があるな・・・」

「はあ？ペルー！？なんで！」

ボサボサの黒髪に、同じく黒い眼、そして黒いローブ姿の見知った少年。

何年も見ていなかつた『役立たず』と言われる彼が自分を庇つようにして背を向けていた。

「手を離すわ捕まつてなさい！！」

言われ、ユーリはエリカの背にしがみついた。空中に投げ出された体は何ともいえない浮遊感を頭に伝える。エリカは片手で本を開き剣を突く様に構えた。

「 ッ 」

シソード

派手な着地にヨーリの体が投げ出される。けして軟らかいとは言えない小石の上に転がった。

するだけだ。

「離れてて！！」自身も着地に失敗したエリカが起き上がりながら叫んだ。眼は前を見つめている。そこには赤い、竜というにはお粗末な大きいだけの蜥蜴といった感じの生き物がヨタヨタとこちらを向こうとしていた。

・・・・鈍いわね

エリカの足が地を蹴る。蜥蜴もそれを感じてか、方向転換を諦めこちらを向いている尻尾を振り上げた。剣をなぎ払うかのよつに振る。赤黒いものが舞つた。

尻尾をくじた蜥蜴が咆哮をあげる様に喘ぐが、蜥蜴に声など出ない。構わず暴れ、火を噴こうとする前の一瞬の隙を突き、急所である喉笛を裂いた。

火も吹けなくなりぐつと動きの鈍くなつた相手を認めると、エリカは再び本を開く。

「トーナメント」

蜥蜴はその声にびっくりと僅かに身じろぎし、やがてぴくっとも動かなくなつた。エリカ達が見てみると、ゆっくりとそれは空氣に溶けるように薄くなる。やがて消えたのを確認すると、エリカは肩の力を抜き、深く溜息をついた。

そこにはあの赤い蜥蜴の血の一滴すら残つていなかつた。

漆黒の魔女

「ど、どうしたの？」

「どうしたってそりやあ……簡単に言えば他の世界に送ったのよ」

言つて、ヒリカは腕をぐるぐる回す。しかし、いかんせん剣を持っているがために、川から上がつてきたペルーが慌ててその場を飛びのいた。

「アツブね！ お前斬る気かよ」

「あーアンタいたの。ま、それもいいかもねヒ

ふふん明らかな嘲笑を浮かべ、剣をくるりと肩にかづぐ。

「そういえば、あの川に居たお兄さんはどうしたのよ」

「帰らせたよ！ なんだお前そのムカつく笑顔……」

「あら。移動魔法なんてモノ、出し惜しみしてたアンタに言われたくないわ」

「それは……」

「アンタ、移動魔法なんて高等魔術で三人も移動させられるんなら自分で火も消せたでしょ？」

眼を瞬ぐゴーリに構わず、口論は続く。

「…………え？」

「さつきの蜥蜴モドキの『火イ火も相殺したじやない。なんでやらないのよ』

「…………やらないんじやない。俺は『やれない』んだ」ペルーは奥歯を噛み、ヒリカを睨んだ。なぜここでお前がそれを言う！

「じゃあなんで『やれない』のよ」

(・・・・・ああ、苛々する)

ペルーは空を仰いだ。泣きそうな空だった。

自分らしくもない、こんなな流せばよかつたのに、と今更ながら後悔した。何故初対面の女にここまで言われなければならぬ。

しかしもつ止まらなかつた。

「・・・・・俺は『平穏』が欲しいんだよ。力があるつて分かつたら街にでもなんでも連れて行かれるだろ」

ユーリがきょとんと目を丸くして呟いた。

「名譽な事じや」

（違う、違う！）

そりぢやない、違う。欲しいのはそんなものぢやない。違う。

「貴方はその『行動しない行動』で後悔したことは無いの？」
馬鹿にしたよつてエリカは笑つて言つた。

（ああ）

コイツは分かつてゐ、そう思つた。

黒は染まる事のない闇の黒
其れは力を以つて色を飲み込む
夜の常闇は総てを包み
命の炎をも色に染め
無垢なる雪白を背にたつもので
光に従い光を従う

空は隣人

愛の炎は静かに燃やす

灯した光は星の色
延びる軌跡は情の色
高貴の色はその身に宿す

「どうだつた？」

「どうも何も・・・」エリカは小さく溜息をついて下を見下ろした。「言い逃げはズルかったかしら」

「でも好きなんでしょう？」

「まあ、ファンだもの。今回は運がよかつたわ。仕事でこの世界にこれで、ホンモノの彼らに会えて、伝えたかった事を言えて」

「忘れちやうのは残念だけど」冷たい風が木の葉と髪の間を吹きぬけた。

「なら言い逃げもチャラだよ。全部巻き戻るんだから」エリカの隣に腰掛け、彼も同じように下を見下ろす。

「ポジティブね、二郎。受け顔のくせに」

「受け顔関係ないでしょ。僕もコーリ少年に会えてちょっとうれしかつたし」

「アンタ私のパートナーでしょ。離れて勝手にそんな事してたの?本当マイナー処好きね」

呆れた声で笑う。隣の少年も乾いた笑いを漏らした。「僕、重いつて文句言われてたよね・・・」

「女の子みたいな事言わないで。重量があつたほうが得よ。投げたときに遠心力と重力で威力倍増」

「それもどうかと思うけど・・・」

世界が遠くなつていいく。空は重く、近く雪が降るだらうことが予想できた。

「寒いし今日は鍋にしようかな。白菜あつたよね?」

「先に報告書でしょ!」

『後悔するなり

』

彼が別の誰かにそう言われるのまだ先のこと。

漆黒の魔女（後書き）

序章・エリカ編完結です。

毎日更新頑張りました。意外となんとかなるものです。次の『晴光編』では少しのんびりやります。

以下は、エリカが行つた物語世界の解説です。（ブログ参照）

（病気の治し方／マース＝ジャクソン著）

両親を戦火で亡くした少年・ココルは叔父・叔母に育てられ16歳になつた春、街の警官隊に入隊する。

魔術に秀でている彼は平和な街にやきもきした毎日を過ごすが、ある日、紅い服の剣術使いに攫われるようになつて行かれてしまう。「お前を助けに来た」彼・ディーは、自分をココルの兄と名乗り、その証を見せ、故郷へ帰ろうと誘つ。

叔父・叔母はココルを見張る研究者だった。真実を知り、事実を確かめるため行く事を決めるココル。

しかし旅の途中に王権争いの事件に巻き込まれ

典型的なファンタジー児童小説です。ペルー・ヨーリは主人公じゃありません。

この後彼らはパーティーを組み、旅を続けます。

ペルーはこのパーティーのオールマイティな中衛担当の魔術使いです。村を離れてぶらついてた所を結構早くに仲間になります。

主人公ココルは前衛。同じ魔術でも彼は剣術に魔術を付属して戦う

タイプ。お兄ちゃん・ディは意外と猪突猛進・前衛剣術使い。（ほつそいくせに筋肉馬鹿）

第一章からは後方支援・戦術担当で立派になったヨーリも加わります。（彼は軍に志願し、その実力で出世街道を歩み始める寸前でペルーにつれてこられます）

しっかり物のヨーリ君は最終的にみんなのオカソーンです。コックの息子で父子家庭なので家事担当で重宝されます。

作者、マース＝ジャクソンについて

この人はイギリスの62歳のおっちゃんです。元は主に社会風刺系小説を書いてる人。

『病気の治し方』は12歳になる息子のために書いたそうですが、本人の方があまり読んでくれないので続編は期待できません。

閑話 桜葉色の眼の少年

僕はニール。エリカの『本』だ。

本、といつても僕は人間である。ただ本になるだけ。それ以外は（僕の今までの経験から見では）普通の人間だ。それに僕にとつて、『本』というものは珍しくない。『本』というのは大きな一族なのだ。

年はエリカより二つ年上。誰も信じてくれないのだが、いわゆるアジア系、の容姿（本はだいたいアジア系の顔立ちだ）である僕は歐米のハーフの女の子よりは幼く見えるのは当然だと主張する。女の子の方が発育がいいのは当然だらう。ただでさえエリカは同年代より大人びているのに。

少し前、エリカは見事、『夢人』となつた。

物語管理局の『夢人課』には異端イレギュラーを狩る『調整部』と、合法的に認められた物語世界旅行を取り仕切る『案内部』がある。二つとも約三年間の研修を受ける。

エリカは『調整部』、戦闘と現地調査の肉体派部署だ。ちなみに僕ら『本』は『本配属課』から派遣される。

『調整部』にも女性は意外と多い。なぜなら戦闘には向かないが、調査はしやすいから。

男だと押しても引いてもできない事でも、女だと口論コロッと上手くいつてしまふことは結構多い。弱者には警戒心を弱めるのはすべての生き物共通だと思つ。

そのため、『異世界』を渡る上で最も理想的なのは男女コンビなのだとか。

僕とエリカは六年間コンビを組んでいる。

『理想』と言われる男女コンビ。僕らの場合、男と女の役割が逆転している気もしないでもないが（僕はエリカいわく『真っ先に噛み殺される』らしい。なんだそれ）それなりに実力派と認められているんだと先輩に聞いた。

だかしかし、ここまでには長い道があった。

夢人は約三年間の研修があることは先ほど書いただろう。しかし僕らはその倍、六年間 研修を続けていた。つい一ヶ月前のことだ。成績は悪くない。原因はエリカの能力にあった。

エリカの力が強すぎる。

『夢人』というのは誰もがなれるわけじゃない。『世界を渡る力』、有る意味神様に選ばれたとしか言いよつが無い能力が無いとなる事が出来ない。

エリカはたびたび暴走し、異世界に飛ばされる。もう何度だろう。最近は落ち着いてきたが、一時は酷かった。その度に凄く申し訳なさそうにされていたのだが。

しかし彼女は『妥協』『諦め』というのを知らない人だ。倒されればダルマのように跳ね上がり、倒した相手に頭突きを食らわせる。右の頬を殴られれば倍の力で殴り返し、あまつさえ言葉でハートをメッタ刺す。そんな強かな彼女だからこそ僕もやりやすい。

六年間。生まれてからも入れれば十数年。

これからどうなるのか。

これから物語が始まるとすれば、なんて長い序章なのだろう。それともこれまでが物語で、今、これが終章なのだろうか。

どちらでも僕らは変わらないと思う。変わらないことを願う。

序章 紺炎の拳闘士

【異端者・二】

どこまでも優しい先輩
明るくおしゃべりな友人
笑う彼女

何処までも理想のはずだった

何処までも幸せな光景だった

しかし何処までも不愉快になつた

・・・・・ 变えなければ

横暴な先輩

変えなれば、

気の弱いいつも曖昧に笑う友人

変えなれば！

目を伏せる彼女

変えなれば！！

否、帰るのだ。

だって僕が存在するのはあの世界のはずなのだからー！

(少年Cの目撃証言)

それはじわりと白に滲んだ

かつん

かつん

底の厚い靴は石畳を踏むたびに音を響かせる。

高い建物の間から見える空は雲ひとつ無い快晴で、白い染みのない空は高く、とても綺麗だった。

でも絵としては白も少しはあつとほつがいいかもしれない。
ふと、グラスは斜め前を見つめて立ち止まつた。

それに明るいスカイブルーはなんとなく、この場所には似合わない。
【空の境界線】とはよく言つものだが、それならその境界線はあの薄汚れたコンクリートの隙間だろう。
描くなら、こんな所にはきっと夜の濃紺の方が。

「でも夜は無理だし」

（門限は五時半。こんなに早い門限がある16歳はぼくらにとって
ことは知つてゐる）

ぼくはそういう星の元に生まれた人間で、それは死ぬまで変えられない事実で。
逃げる、という選択肢はぼくには無くて。

そう、どうせなら

「 しゅ ぢょ 一 一 一 ビ 二 リ で す か あ 一 一 一 」

「馬鹿っ！呼んだら逃げるだろーー！」

「あそこがすんません」

卷之三

とびっきり、楽しんでやねーって思うんだ。

「Gカンパーーのグラス＝グリーン様ですね？」

そよぎと

「船みたいな綺麗なおねーさんな感じ今まででや」
その細く白い手をとる。

「エスコートは任せるよ」

グラスは晴天のような青い瞳を細めて晴れやかに笑つた。

嗚呼快晴ナリ。

×月 日

Gカンパニー社長・グラス＝グリーン氏（16）誘拐される

身代金は2億！？

それは次の朝、朝刊の一面に躍った。

「いやあ迷惑をかけたね」

「ホントっすよ」

赤い髪の短髪の少年が眉を下げる。苦味が混じつた笑顔は痛々しいほど。

（苦労かけるなあ・・・・）

自分より背の高い年下の東洋人の頭を、グラスは謝罪と劳わりの意味を込めて撫でた。

「ファン、今どこに居る？」

『え、えっと・・・・・今、向かいの本屋・・・・。ねえ、セイコウ晴光く

ん、大丈夫？』

「え、何が」

『声、疲れてるよ』

「むしろ楽しいし。大丈夫」

通信機のスイッチを切る。うん、ぜんぜん大丈夫だ。寝れば直るくらい。

今回の仕事は長期。しかもお上の命令で単独である。疲労もそりや

溜まっていた。

でも、情報収集を続いている相棒、ファンの方がたぶん疲れてるだろ？。

こちらは『主人公』であるグラスと一緒に居られてむしろ楽しい。

彼のキャラは濃いが。

俺は学校の制服を着込み、自室を出る。

(あれ?でも何で突然単独任務になつたんだっけ)

携帯がなつた。

「あ、アースさんっすか?今から登校します。グラスさんは?
え?いやいやいやいや!!!ちょっ、え、マジー? あ、ス
イマセン。マジっすか」

内容を「反芻。」「肯」の返事。

間。

(『護衛』である俺無しでどうか行つちゃつたつてありえないあの
社長!誘拐されたばつかじやん分かつてんのあの人!!!)
絶対次一発なぐっちゃる。上司だと知らねー心に決めて飛び出
た。

もちろん些細な疑問は露と消える。そりやあもう、さっぱりと。

「・・・・・・・Hへ?」

「Hへじゃないつスよおおおおおおーそんなんやつても可愛くな、
いや可愛いんだけどさアー分かつてるー?分かつてるの貴方ー!ーま
た誘拐されたらどーすんのー!ー?」

「しー、晴光君しー!誘拐トカ、言つちやダメ。誰が聞いてるかも
しないでしょ。

分かつてないねえソコント!」?

「分かつてないのはアンタだよオオオオオオ」

俺とは違ひ、ズボンの丈が明らかに短い改造を施した制服で、社長は両手の指を絡ませ、ハートマークやら音符マークやら星マークやらを（雰囲気的に）飛び交わせながら微笑んだ。

うわ何この生物。もう同じ生物だなんて思えない。見た目は確かに可愛いけど。天使だけど。男と思わなければの話だけど。

「もう嫌！俺もう嫌ッすよ！！俺今まで『お前はボケだ』と言われウン十年続けて育ってきたのに、此処に来てから慣れないツツコミのし通しつす！」

「えー倦怠期？ボクはなかなか君の事好きだよ？もっと愛を囁こうか？」

「そういう趣味は俺にはねえ！、です！！」

危ない危ない、動搖に煽られて敬語を忘れるところだつた。

ちなみに此処は学校の会議室のような教室だ。俗に言うと『生徒指導室』とか『生徒相談室』とか呼ばれている、生徒が先生と相談事をする場所。俺も誰かに相談したい。

グラスはキヨロリと室内をものめずらしげに見つめていた。俺としては、職員室・校長室に続き、できれば一生世話になりたくない場所だけれど。

彼、グラス＝グリーンは『Gカンパニー』という大手製薬会社の若社長だ。

父の遺言で若干16歳でこの地位に就き、現在に至る。この微妙に俺の知る『地球』とは違い世界的に『飛び級制度』とかが認められているらしいこの世界で、14までに大学まで卒業してしまった神童だ。

現在は仕事の合間を縫つて偽名で普通の学生ライフを楽しんでいる。この辺でもう普通じやない。

さらに言えば、今回の俺は彼の護衛といつも田で雇つてもらつていつの『設定』だ。（設定とは夢人用語で、登場人物に影響を与

えないよつぢう行動するか、の予定のことだ。これがまた細かくて
考えるのも大変)

『夢人』は天職だと思っているので楽しい。楽しいけど・・・・つ

のほーんとしているこの若社長の顔が憎くてたまらないのだ。

(早く終われ
!—)

緋炎の拳闘士（前書き）

大変下品な表現があります。

『まだこいつらは動いてないけど、でも少しづつ準備は始めているみたい。場所も特定できたし』

「マジで? どこ」

『会社のビルからあんまり遠くないよ。えっと・・・・B、ベ、ベリービル、かな? 美容関係の会社が沢山はいつてる。あ、全部レボリューション=ローズ社系列だ』

「れぼりゅーしょん・・・・」

『直訳で、ば、薔薇革命・・・・かな。主人公の友達の会社。化粧品とか、色々。』

友達の名前はベティ=フォスター、この会社の御曹司。グラスより一つ上の18歳。兄貴肌でグラスに振り回される・・・・』

「ヤラレ役?」

『・・・・・あ、キャラクター紹介にもそう書いてあるよ』

ボーン ボーン・・・・

大きな柱時計が重低音を響かせ、時を告げる。僅かな明かりの中で、その音だけが嫌に響いた。

ぬばたまの髪を怠慢な動きでゆつくりと梳ぐ。癖の無い髪は指の間から逃げ、するりと落ちる。

「レノアースさんに怒られるぜ?』

「大丈夫。もう少しこうしてみたいから……」

愛おしげに擦り寄ると、仕方ないというよつこたやすくそれを受け入れた。

「おい。帰った方がいい。グラスも仕事あるんだろう?」

「ヤダ。たまにはいいでしょ……?」

いつももまして甘えてくる恋人に内心嬉しく思いながらも、ベティは苦い表情で言つた。

「でもレノアースさんが……」

「ベティ、アースさんの話なんかしないでよ。」

睫が触れ合つほどの距離。ベティは仕方ないと溜息をつきながらグラスの腰に手を回し、絶えられないといつよつに……

ブツン。

「ああー音声が!!」

「おいテメホいつこんな映像作つてやがった!!」

肩を上下させ、ベティは三白眼でグラスを睨みつけた。

室内は薄暗く、スクリーンに映し出される映像の光で青白くぼんやり姿が浮かび上がって見える。「ていうかこの映像の奴誰だ!!」

少年が濃厚に口付ける映像を必死に見ないよう背を向け、震える指先でスクリーンを親指で指した。あの映像に指を向ける事さえ嫌悪感が湧き上がる。どんどん冷たくなっていく指先に叱咤し、殴ろうとする右手を押さえ、あわよくば指している左手をそのまま下に向けてやろうと、心に決めた。

「ヤダなーダーニエル君とペーテル君だよ」知らないの?鼻で笑い、両手を広げてお手上げのポーズをするブルーの瞳を^ムなりにしならせた少年に、ベティは遂に引っ^ム抜いたコードを投げつけ、拳を固め。

「…………いつ、俺が、こんな台詞を、言った！！」

「ベティの声のアテレコしたのは友達でね、七色の声の持ち主なんだ」

「消せ！今すぐ！！」叫びながら少し眼に入つてしまつたハンガリ一産ビデオでは、すでに服を脱がしにかかっている。自身の鳥肌を見ないようにしながら、右手の先が白くなるほど握り締めた。

「レノアースさんにチクられたく無かつたらこつち来なさい！ お説教です！」

わんぱくな友を持つ年上の親友は珍しくも大声を上げた。

ベティは心が広い。

これは彼を知る総ての人間が感じる事で、ぼく自身も、ここまで寛大な人間を見たことが無い。だから結構何やつても、最後は笑ってくれるモンなんだけど。

まあいい。今回はぼくが悪かつたと、潔く認めよう。

だつて未だかつて、こんなに怒った親友をぼくは見たことが無いんだから。でも、ぼくは後悔などしていない。目つきが悪い癖に顔だけはいい彼を慕うラトメ達は結構いるんだ。とつくに恋心は腐つてるけど、その趣味は理解できないでもない。（なにせ、妄想する相手がぼくだから）

ミッションはいかにしてベティの怒りを静めるか。

いざ出陣！！（今この時から、一步も引けない戦場に繰り出すんだー）

「今回ばかりは堪忍袋の緒が切れたからな。これまで餓鬼の悪戯だと思つて掲揚してきたが、こんな意味の分からぬ悪質なブツに手を出すなんて、俺はハツキリ言つてお前に失望した」

「別にベティ本人に見せようと思つて作ったんじゃないよ」

「本人に気付かれなければ良いのか!? 違うだろ!?」

「『知らぬが仏』って言葉が」「違うだろ!?!?」

グラスの言葉をさえぎり、声を荒げるベティに、グラスは拗ねた様に頬を膨らませた。

「それでもぼくは後悔してない!」「それが問題だつて言つてんだ

ドアホ!」

言い切る彼の頭に平手が飛ぶ。ぺしん、と軽く鳴った音に、今度は唇も尖らせてそっぽを向く。さほど痛くは無い。

「この前やつた【ドキッ! 男も女も入り乱れ『気になるアノコが美少年!?!』 性別逆転・ポロリもあるよー】パーティーと どう違つてあるの!?!?」

「ぜんぜん違うだろうが馬鹿!」

今度は拳骨が振つてくる。

「あの時は ベティ無理やり参加させてお金一杯使わせしちゃつたけど怒んなかつたじゃん! あとツツコミが痛い!」

「あれはいい息抜きになると思ったからだ! あとお前、そのパーティーの! 全部覚えてるのか?」

「当たり前でしょ! そうだ、覚えてると言えばベティこの前誕生日に頼んだアレゼんぜん違うじゃん!」

「いつの話だ! お前も今の今まで忘れてただろ!?!?」

「食べ物の恨みは恐ろしいんだよ！？」

話はアテレコ・ハンガリー産ビデオの話からどんどん逸れていく。誕生日プレゼントの話からベティに振られたグラスの家のメイドの話、グラスの過去の悪戯についてから、果ては甘納豆の美味しいか否かに関する討論会になつていた。「バッカ、お前『納豆』なんて名前がつくるんだから。名前からして嫌だ」「食べた事も無いくせによく言うよ！ さつちゃんも甘納豆投げてたら、もつと何かしらの道が開けたと思つね！…」

「すみません、ベティさん」

扉を開けて混沌とする室内に入ってきたのは、ハウスキー・バーの女性だった。ハウスキー・バーとは名ばかりで、実際はベティの秘書のような事をしているひとだ。一人の事もよく知つてゐるためか、何のためらいも無く淡々とベティに用件を告げる。「お客様です」

「客？」

「ええ。『エル』と名乗っている修道女達ですが」
エル？ そんな人間いただろうか。ベティは首をかしげた。
取引先などでは取り次がなければいけないが、ベティは会社のこと
に関しては勉強中の身で、あまり触らせてもらえない。故に、ベテ
ィに仕事関係の者が来ることはまったくないと言つていい。来ると
したら、直接社長にモノが言えない悪賢い輩だ。しかし今回は修道
女だといつし。

「あ、それぼくの友達だよ！」

「は、」

「呼んだのか、お前が。

「学校の友達なんだ」

「ちょっと待て。てことはお前がGカンパニーの社長だつて知つて
るのか」

「うん」

何のための偽名だとか、そういうことはグラスの笑顔を見て飲み込
んだ。

「いい子だよ。そういう身分とか称号とか、全く気にしないし。ほ
ら、例のビデオでベティの声を担当した七色の声の持ち主」

「ソイツか！？」

「美人だしね！？」

「『美人』ということは女なのか！？」

「正真正銘の乙女だよ」

そういうのに協力するということは。

その『乙女』が気になるのは勘違いだろうか。『おとめ』の『お

はナニカの『お』ではないのだろうか。といふか『お』じゃなくて『ヲ』だつたりしないのか。

「エルちゃんはノーマルだから…ついでにお姉さんな清楚系…！」
「よし通せ！」

「こちら通称・エルちゃん、本名エルバード君。こっちがリュー君
「乙女つてそういうことか…・・・・・…？」
「二人とも男の子デス」
「グラス、僕は女の子だよ、今はね。今は「
「ああごめんね、エルティアちゃんだった」

うふふあはは

微笑む少女、否少年は、セミロングのくすんだ灰色の髪に白い肌、
アッシュブルーの瞳で確かにモノトーンの黒い修道服が似合う『清楚』な『美人』だった。傍らにいる、連れの同じく少年は無表情だが、深い黒の髪に黒い大きな猫のようなアーモンド形の瞳で、日本的人形のようで、（彼は普通に男物の修道士服だ）確かにまた系統の違う『清楚』な『美人』。背はベティと同じくらい高いが、対してグラス。

服は、ギリギリ男物、むしろユニセックスの白いブラウスにズボン、改造を施した制服姿で、容姿はいうでもなく。

そんな三人が並んでいると、全員男というのを忘れてしまいそうになるほど華やかだ。むしろ怖い。エルバード、否エルディアが、グラスより背も高いのに、普通に華奢で鈴の鳴るような声の美少女といつのがさらに怖い。もつと怖いのは横のリューだ。彼は特にエルディアの様に化粧をしているでもなし、元が女顔なのか、背のわりに細いし、男物を着ていても『貧乳なんです』とか言われば信じてしまいそうだ。無表情だし、伸びっぱなしの髪で、いわくつきの人物のようだし。

16になつてグラスも女装が難しくなつてきたところの。(何この集団・・・・・)

純白の薔薇やら、百合やらを背後に咲かせたら、なんか似合つだらう。似合いすぎでゾッとする。

「ていうかその女声はどうから出してるんだ」「嫌だな、声帯からですよ」

「そういう意味じゃないと思うけど」

驚く事でもないのだろうが、こきなり口を開いたリューに一瞬嫌な汗が浮かんだ。

「僕、見ての通り女装が趣味なんですけど、中身は普通の男の子なんです。普通に女の子が好きだし あ、リューは別ですよ」ふふふ。それはどういう意味なのか。

「でも、その分、この容姿で男声ってリアルに気持ち悪いじゃないですか。僕自身はそんなに低くないんだけど、やつぱり違和感がつて。で、頑張つて練習して出してるんですけど・・・・あ、地声出しましょつか?」「い、いやいい!」

空はゆづくじ暮れていぐ。

「それで今日はどうして？」

ベティはカップに口をつけながら言つた言葉に、エルはにつこり笑みを返した。

「ちょっとお話がしたくて」

彼が異端者なのは間違いない。
イレギュラー

筋書きには彼は登場しないし、彼の存在で、登校途中に友人に遭う、
というイベントが消えたのは間違いないのだから。

問題は、彼が『事故』による異端者イレギュラーなのか、『故意』に紛れ込んだ異世界旅行者なのか。

前者だとすれば、話し合いでも強制送還でもすればいい。事故によつてその『体質』で『来てしまつた』人は大半帰りたいと言うのが普通だし、物語世界に味を占めてしまつた者の場合は、夢人に入力ウトするのもいい。『夢人』は年中人員不足の職業だ。食べ物に困る事はない。

しかし後者の場合。

これは違法異世界旅行者の場合があげられる。
いぼういせかいりょこうしゃ

違法異世界旅行者とはつまり、物語世界の『筋書き』への干渉、『登場人物と関係を持ちたい』という心理からのものだ。有名人に会う為に、有名人行きつけの店へ通うミーハーなファンと同じ。これも強制送還すればいい。

しかし問題は、その大半が物語の世界を『渡る能力のある』人間だ
ということだ。

異世界』物語の世界はそれなりに危険が多い。特にこんな『メディア』ちつな世界ほど、意外と危険が多いのだ。

ギャグで爆弾を爆発させたとする。しかし話の進行上、登場人物は死ぬ事はない。それは登場人物が『そういう風にできているから』。せいぜいチリチリアフロになつて煤ける程度。『登場人物特典』といつやつだ。しかし、他の世界から来た人間は違うだろう。爆発が起きれば爆死だし、空へ投げられれば本当に星に成つてしまつ。ということは、それに『耐えられる事の出来る』だけの力のある人間だということだ。

複数の世界をわたつている場合、その経験値もそれだけあるだろう。強制送還なんて、それなりに認められているといつても、下つ端の下つ端、まだまだこれから自分達には絶対に無理だ。

(どうしよう)

彼は、このタイミングで登場人物と接觸を図つてゐる。これでほとんど後者の場合が強まつた。(どうしよう)パートナーの彼は、今頃主人公のグラス=グリーンとつき合つて学校にいる頃だろう。ここは無理にでも合流するか。でもあちらも一人、リューという少年が残つてゐる。主人公を衝かれたら、ここは終わりだ。

主人公は世界の核、核が壊されたら

(どうしよう)

「ていうか驚いた。君は本当に男だつたんだな

「そうですよ?」

エルは楽しそうに笑顔を深めた。化粧は落とし、灰色のセミロングの髪は後ろで纏められていて、白い制服のシャツとスラックスで、大人っぽい昨日の姿からは異なり、一転、年上の女性受けしそうな

爽やかな美少年だ。（＝サボってる、ということなのだが、自分も昔はヤンチャしていたし、グラスもちょくちょくサボるので気にしない。）

（というかやつぱり ）

ああ怖いな、と改めてベティは思った。

（この変わりようは怖い）

角砂糖をもう三つ入れ、紅茶をする。

大して言葉遣いも変わらないようだし、共通して一人称も『僕』、本人の言つた通り、声もさして低くない。なのにこの変わりよう。空気が違う、と思った。

雰囲気が違う、と思つた。

失礼だがそれを指摘すると、目の前の人物は気分を害するでもなくさらに笑顔を浮かべる。

「僕は男だと女だと、そういうの嫌いなんです。だつて女はスカートとか着るのに、男は・・・って、何か不公平じゃないですか。女性は結構どんな服着ても許されるのに。似合えばいいじゃんって思つんです。

僕、昔、身分とかそういうのに厳しいところに居たんですけど、階級の違う人と友達になつたら、怒られちゃつて、で、偉い人に直談判しにいつたら、逆に切られそうになつちゃつて。

女の子はめんどうかいんで、女になりたいと心から本当に思つた事は無いんですけど、『なら完璧にやつてやるうじやないか』って思つて演じきつてる感じなので

そのせいですかね？

考え方は、ハッキリ言つて『なるほど』と思つた。それなら俺でも、少なからず思う事がある。でも

やたら眩しい笑顔が怖かつた。

(これは、違う)
(…違う?)
(…違うんだ)

嗚呼、この人は頭が悪いのか。
心から、そう思った。

寒い。冷たい。固い。

三拍子揃っている場所だ。

触れる場所はひんやりしていて 夏になればさぞ気持ちがいいだろうが、今この、右半分だけが嫌に冷たいという状況では不快以外の何者でもない。

男にしては長めの自身の髪が、灰色の地面に散らばっているのが、辛うじて視界の端に映る。ああ嫌だ。

これじゃあまるで、人攫いに遭った乙女みたいじゃ ないか。男っぽい格好が似合わない容姿に生まれてしまったがために、ぼくは『こう』なのだが。まあぼく趣向というのも少なからずあるという事実も否めない。

『人攫いに遭つた事実も否めないっスよ！』

嗚呼もう、赤いのの声が聞こえる。嫌だな、ぼくはまだ16だぞ。羈縛するのはずっと先だろ。しつかりしろ自分。この前はあんなに堂々と人質『してやつてた』じゃないか。

なんかもう、励ましで『男だろ！』とか言つのも間違つてる気がしてきた。

ああもう、嫌だ。不快だ。何が？ 今この状況總てが。

自問自答なんて不毛だつてことは分かつてゐるのに。

それもこれも、いつもと違うからだ。知らないからだ。分からぬからだ。

違う。いつもはこんなじやない。だつてぼくは大事な人質。大事な取引道具。大事なお人形。嫌だ嫌だ。何だこれは。気持ち悪い。よっぽど何も知らない小物の仕業なのだろうか。否、ぼくの誘拐がそんな小物にやれるわけがない。じやあ誰が？敵なんて作りまくつてる。誰？

考える。ぼくだつて、頭がわるいわけじやない。

誰？

「どうしよー・・・・・」

教室の隅でしゃがみ込み、顔色は蒼白。真つ赤な髪と暖色の目、いつも陽に焼けた血色のいい肌と相まって、余計にそれは目立つてゐる。

晴光はぶるぶると心なしか紫に見える唇を震わせ、くしゃりと髪を握りしめた。

「また見失つちゃつたー・・・・・」

あちゃー。頭を抱え、考える。もう何度目だろつ。この十数日、何度も彼を見失い何度会社と学校と自宅を往復したか。アースさんに怒られる。帰つた後で報告書を作つた時にも、部隊長に怒られるだろう。イヤイヤ、だつてしようがないつてあの人クラゲみたいにフワフワフワフワ神出鬼没であつちに行つたりこつちに行つたり・・・・・「バンザメの」とく、くつ付いてないとずっと居場所を把握しておくなんて無理だ。この苦労は同僚の夢人にはきっと分かつてもらえない。「たかが護衛だろう」お前は知らないんだ。オレはとつくにアースさんのマワシ者として警戒されてるんだから。相手はIQ

がメーカーぶつちぎるほどの神童、天才児。その行動は凡人には予測不可能である。

護衛対象が誘拐されているなんて露知らず、少年はいかに言い訳するか頭を抱えていた。

「やべーよマジでもうどーしよおファンー・・・」

情けない声色の通信に返ってきたのは沈黙と、息をのむ音だった。

「ファン?」

続いて、がたん、と動き回る音と衣擦れの音が僅かなノイズと混ざつて聞こえる。

『『ごめんね、で、えっと・・・・ああもう、もう一度言つて』』
「だからさあ、また見失っちゃつてさあ、疲労もピーク。もう笑いしか出でこない」

『・・・・笑えないよお』

「ファン?」

どうした?何があつた?途端に表情は硬くなる。深呼吸の後、蚊の鳴くような声で相棒は話し始めた。

「あ、上司さんには話さないほうが良いと思うの。筋書きに沿わないし、話したところでその行動がどうなるか分からないから。合流して、どうするか話し合おう?・・・・えっと、うん。大丈夫。わたしは大丈夫だから・・・・・うん」

震える指で通信を切る。大丈夫、だいじょうぶ、ダイジョウブ。彼は強い。わたしも、彼に言わせるなら強い、らしい。大丈夫、これが予想ができなかつただけだ。明らかにわたしたちの実力に伴つていない事態が起こつたんだもの。混乱するのは仕方ない。なら自分

がしつかりしなくては。彼は冷静になれば、誰よりも頼りになるんだから。

違法異世界旅行者、というのは少なくない。でも、多くもない。事故によるものが大半だし、近年は組織化して、どう物語管理局に見つからないよう不正を働くかに力をいれているらしい。

そして近年のその筆頭が、

NYX
ニヨクス

活動は他の異世界旅行者集団とは明らかに異なる。

ただ、純粋に『物語の世界』を楽しむのではない。主な活動は、一般人へのアトラクションと称した違法異世界旅行のあつせん、物語世界にあるアイテムの不正売買と『登場人物の人身売買』。

組織としてはむしろ小さい。が、弱小ではない。少人数の先鋭で固められ、アイテムの入手や登場人物の拉致などをしているのは、何知らない、『イベント』として楽しんでいる一般人達だ。一般人といつてもそれなりに戦闘が出来る者を集め、成功すれば報酬も出る上、失敗しても無事であれば何度も挑戦が認められる。数多くの世界の中、分かっているだけでも万は下らないほどの人が被害にあっている。分かつていらない被害はさらに数倍だろうという。リーダーの名前は分からず、ただ分かるのはその人物が【DORM^{マウス}OUSE】、眠りネズミと名乗っている、それだけだ。もし、そんな組織が絡んでいたとしたら。考えただけでぞつとする。

「リュー大丈夫？ 能力で僕以外を運ぶのは久しぶりでしょう？」
「・・・大丈夫。エルより軽い。さすがに三人は難しいけど」
「うん、もう少しだから、ね。がんばろつか」

「俺もまだ大丈夫だから」

「わかつてゐるわかつてゐる。でも」」」は僕に任せなさいー早く帰つて、

店長さんのお手伝いしないとねー」

「・・・・まあね」

「じゃ、後よろしく。つよー愛してゐる」

「・・・・・ん」

目を離したつもりはなかつた。

私の容姿は目立つから、屋内で監視を続けていたし、距離もあるからそういう能力者じやない限り、見つからぬいだらうと思つていた。それなのに、

「わーピンクの髪だなんて、本物初めて見たよ。意外と自然だ。世界は広くて多いな、生きててよかつた」

緋炎の拳闘士

消えろ消えろ消えろ。

俺はここにいる。ここにいて、呼吸している。

そのにすなに

あれは一つだけのもので、生

それは俺が俺だから。

二度はないんだ。

あれはそこに無い

替えはきかない。

俺の力が足りないとそんないのな

二二

だから。

もう、呼吸でさえも、空気の流れで、
自分でくれ。ねえ、頼むから、誰か。
自分なのに。

庵の中へ、可かへぬだ。

突然襟元を引き上げられた晴光は両目を瞬いて至近距離の顔を見つ

めた。

オリーブ色の瞳は憤怒に燃えている。整った顔を浅く呼吸しながら見、表情を引き締めた。

ここは街を一キロほど外れたところにある、レボリューション＝ローズ社の管轄の子会社のビルだ。内装はデスクと来客用のソファがあるばかりで、それもすべて布がかけられている。

無人のここにはおおよそ人のくるような雰囲気はない。

「えー・・・・なんとか革命社のおんぞーしのベティ」

「レボリューションだ！レボリューション＝ローズ社！」

間抜けな言葉にベティの表情は少し和らぐが、すぐに腕に力をこめて締め上げた。「答える」噛み締めた歯の間から声が唸るように言葉を紡ぐ。「お前らはドコの、ナンの、奴らだ」

「うぐ、ぐるじ、ちょ、ではなじ・・・」「言え」

「いえねえつて！」バシバシ腕を叩いてやつと解放された晴光は酸素を取り込み、改めて前を見た。

「俺は、グラス＝グリーンさんの護衛役を一週間前からやらせもらつてる、ます！セイコウ＝シュウ、つていいます！」

「セイコウ・・・新しい護衛？」

口の中で転がして、晴光の真っ赤な頭を見、顔を見、服を見る。来ているのは白いラインが前に付いたブラウンのジャケット、下のスラックスは制服のまま。

「・・・・・スマン。間違えた。勘違いだ」

「大丈夫っす！」

「ごめんな」

先ほどまでの様子が嘘のように萎えたベティは少し冷静になつたのか。薄く笑みを浮かべて見せた。

「で、どうした？ここなところで」

「俺、グラスさん見失つちゃって、で、ベティさん」「いるかなー・・つて。あの人の行動パターンはあなたの所か、学校か、屋敷か、その他しかありませんし」割合は2・3・3・2だ。「で、グラス

さん知りませんか」

ベティの顔が強張った。「…………いいや」「でも、心当たりはある。ちょっと座ろうか」

曖昧に笑つて、ベティは白い布をかけられたソファをさした。

「…………とんだ馬鹿だ」

呆れた声で呟いて、彼は黒に包まれた右手を振り上げ

シルヴィア・レノースは、彼がけつしてただの馬鹿ではないことをよく分かつっていた。

ちらんぽらんでお子様で、女顔で童顔でチビだが、結果だけを見れば十二分に利益をだしている。彼はリスクの高い賭けを必ず成功させる力を持つている。ただ、それを認められないのは、その賭けが、彼にしか出来えないことだからだ。

たぶん、この世界で、彼にしかこんな賭けは出来ない。いくら有名大学を出た部下でも『天才』といわれた者でも、彼と同じ仕事は出来なかつた。

この会社は、もはや彼無しでは在り得ない。

たまに彼は、それをすべて理解した上で馬鹿をやつているのではと思う事がある。

『自分がいなくなつても大丈夫なように』

実際、彼の起こす騒動の後始末で、眼に見えて社員のスキルは上がつていいように思える。しかし、自室のテラスで、通学途中の道路の脇で、自分が説教をしている時でさえ、何かにつけて空を見つめ

るその姿は、その可憐な容姿とあいまつても、光と共に、消えていきそうに思えるのだ。彼が消えてもきっと誰も驚かない。『妖精だった』とでもいわれれば、皆信じるだろ？』『きっと、『Jの会社を救いにきた悪戯好きの妖精だったんだ』と。

我ながら馬鹿な例え話だと思つ。しかし、今でも夢ではないかと思うのだ。16年たつた今でも、お嬢様でさえ、眼を覚ませば昔と同じ姿で生きているのではないかと。

あんなに彼女のこと好きだったのに、『Jの夢が覚めなければ』と思つて『Jの自分がいるのだ。

「なッ！」

金属が激しくぶつかり合つ音が一度響く。キーンとHコーを残したそれは、一度鳴れば十分だつた。晴光は後ろに距離をとる。

三メートル先では、黒尽くめの修道服の長身瘦躯の少年と、同じく黒尽くめの青年がにらみ合つていた。『べ、ベティさん！？』

「お前……グラスはどうした」

「……本当、馬鹿だ」リューは溜息ともつかない息を細く吐いて、ベティの鳩尾へめがけて突進した。

今度はベティが後ろに距離をとる。狭い空間に分が悪いと感じたのか、デスクにある布のかけられたパソコンを蹴落とし、広くなつた足場にしつかりと足を付けた。落ちたパソコンは大きな音を立てたがかまわずリューは攻めていく。腕に仕込んである刃が、照明の無い薄暗い室内で外の陽の明かりに反射して、きらりと白く光つた。

「いッつ、何なんだお前！？グラスを、」

「何を今更、武器を出した時点で君は終わってる。その口閉じてよ。

ナイフ

俺たちはもう気付いてる。「ベティの顔が歪む。

「待てやめろ！」晴光はベティとリューの間に躍り出た。ベティを後ろ手に庇つ。

「おい、お前、どうこいつことだ。ていうかお前が異端者だな^{イレギュラー}」

「そうだよ」

「・・・・ベティさんは、登場人物だぞ」

「わかつてゐる。でも今は違う。エル！」

今度は修道女が天井から飛び出した。晴光の背後のベティを蹴り飛ばす。「ベティさん！」ベティはデスクを落ち、その奥の金属製の棚にぶつかった。ガラスのはめ込まれた扉にひびが入る。駆け寄ろうとした晴光をエルが制し、ベティを睨みつけたまま言った。

「ちよつと^{イレギュラー}君、今ヤバかったよ？もの凄く。彼は精神分離・憑依型の異端者なんだつて」

「気付けよ」リューが呆れた声で呟いたのが聞こえた。

「せ、精神分離……」「の、憑依型ね。見た事無い？」
エルは苦笑いをして、晴光に眼をうつした。「そのまんま、肉体を
伴つて世界を渡れない。幽霊みたいなものだね。精神のみ、この世
界に存在する事の出来るのを精神分離型。その中でも、『登場人物』
に憑依して存在するのを、精神分離の憑依型。憑依型は、その体が
どこまで使えるか、人によつてまちまちだけど

微笑をうかべたまま。エルはベティ、否ベティの体の中の人物へと
眼を戻す。

「クソッ」それはベティの顔で、憤怒を燻らせた。

「君の場合、本人を押しのけて ほぼ完全に体を乗つ取れる
みたいだね」

「ちっくしょ！」

冷たい薄汚いコンクリートの地面で海老並みに背を仰け反らせ、も
がく姿はなんて滑稽だろう。自分を拘束しているその縄は、縄と言
うにはあまりに細くて糸のようだ。だからこそ一本一本の強度はそ
れほどでもないものの、中途半端に切つてしまふと、動くたびに絡
み付いて余計にうつとおしいことこの上ない。体力はまだまだだが、
精神力のほうがどんどんバケツですくう様に削がれていく。

こんな鬼畜極まりない捕縛方法を考えたのは誰だよ……つ！

普段は使わない口汚い言葉だつて飛び出してしまう。グラスは唇を
かむと、自分が思つていた以上に消耗しているらしいことを感じた。

「あ～～～つもーー！」

ここは救助を待つのが頭のいい方法だということは分かつていた。

でも、自分の性能のいい第六感というものが、真っ赤なサイレンを鳴らしているのだ。これは警告。

意外と多い頻度で鳴るこのサイレンの音は、自分にしか聞こえない、自分がどう行動するかの印の一つだ。ここで自分が何かしら行動しなければ、どうなるのか。想像できないからこそ恐ろしい。

「リューの馬鹿アアアアー！エルのカマアアアアアアー！女顔コンビイイイイイ」

自分のことを話したのは第六感が示したから。危険だけれど、大丈夫だと。味方ではないのなら、限りなく味方に引き寄せればいい。だって敵でもないのだから。

彼らは傍観者。見止め、記憶する事を目的とする。それだけだと思ったのに。

小さな天窓から、青色が見えた。雲はゆっくりと流れしていく。何故自分は今、そこに行けないんだ。

雲に透ける擦れた青色が、エルの瞳の色に見えた。

赤は燃える身命の色
それはその身を燃やして其の色とす
文明の炎は宝を灯し
その雪白へ色を映し
闇を父とし
光を母とす
空は焦がれる
愛の炎は宝とす

溢れた炎で色を焼き

然し其れは戾らない
然し其れは其処にある

緋炎の拳闘士（後書き）

原作解説（Gカンパニー／コマチ作）

無邪気でチビで女顔で腹グロな齢16歳の若社長、グラスを中心としたハイテンションコメディ。厳しい世話役シルヴィア＝レノアース（アースさん）、有能執事（アース　VVLOVE）、恋するメイド（陰険）、兄貴な親友ベティ（ベティヤス）などなど。アホに見えても、彼はとても有能です（？）

少女漫画誌で連載されているコメディ漫画。原作は乙女ゲームでそれをさらに脚色したもの。

原作ゲームよりも人気が高く、登場レギュラーキャラの一人、グラスに焦点を当て、コメディ要素のさらに強い内容になっている。もはやベツモノと考えた方がいい。

グラス＝グリーン

この年で会社を継いだ神童。女顔で小柄、服装は似合うとなれば一見女物の服でも着る。黒髪に青い目。トラブルメーカー。

アースさん（シルヴィア＝レノアース）

46歳。グラスの母親の専属メイドだった人。現在はグラスの世話役。厳格でマナー（道徳方面）に厳しい。グラスが唯一頭の上がらない。よく見ると美人。

眞面目で何でもそつなくこなす、絵に描いたような執事。 51歳。
10年前に妻を亡くしている。アースさんに淡い恋心。

ベティ（ベティヤス）

母の影響で、化粧品ばかり作るレボリューション＝ローズ社を、製薬会社として生まれ変わらせようと修行中の御曹司。オリーブ色の眼のイケメン。18歳。グラスのイタズラの被害者。

メイド

ベティに恋心を寄せるグラスの屋敷で働くメイド。美人だが、その恋は陰険。振られてからはさらにエスカレートした。やけに機械関係に強い。

「謎の一人組みの異端者によつて主人公誘拐その上、本を奪われ、さらにはレギュラーキャラに憑依していた別の異端者まで勝手に捕縛され、パニクつているうちに一人組みは異世界に逃亡、本であるファンは自力で拘束を脱出し、主人公を救出、送り届けた上、パートナーを探して彷徨つた挙句、道に迷つて、6時間後に合流、そして帰還 何しにいつたんだお前ら」

刈り込んだ短髪の上司は桜色のルージュを引いた唇を歪ませた。ぐしゃり、手の中で報告書が潰される。

「 言葉もありません・・・つ
「 装備がすべて壊されてましたあ・・・つー」

「任務は結果論で言えば成功だから別にいいんだけどなア・・・」
3時間52分もの間、正座させられた事は記憶に新しい。

「ありえねーありえねーよ、だつてもうちょっとで四時間だぜ！？記録更新しちやつたもん。ほんつと隊長ありえねー」

十数分間、梶振り手振りで同じことを繰り返す晴光君を見つめ、エリカちゃんはどこまでも深く溜息をついた。

「それは分かってたわよ。ついでアンタのものすごく熱い。しかもウザイ。その口閉じてよ。何なら私が綴じてやるわ、どう?」「ホチキススタンバつていらっしゃる——！」

私はおろおろするばかりだ。じりじりとエリカちゃんは晴光君にホチキスを持った手を伸ばしていく。先からちょっと飛び出した銀色

の鋭い針がキラリと光つた。

「まあまあ、エリカちょっと落ち着いて。冗談でもそういうことひと言わないの」

「私は有言実行の女よ

カチリ

ポトリと銀色の曲がった針が落ちた。「コレ踏んだら危ないよ」「細かい事は気にしないのニールアンタ男でしょ」

「ていうか何で晴光来てる訳? ファンちゃんオンリーならまだしも」「だつてコタツあんの、ここだけなんだもんよお~ はー温い」

「ちょっと潜らないで。わいせつ罪で訴えるわ」

エリカちゃんの手が伸びて、晴光君の真っ赤な頭をつかむ。「いででででハゲるハゲるハゲるハゲ ぎやあああああああああああああ」

あ「エリカ!」キッチンからニール君の声が響く。

涙で炬燵布団を濡らす晴光君を一警し、エリカちゃんは綺麗にむいた蜜柑を手渡してくれた。晴光君のところに行こうにも、エリカちゃんがぎゅうぎゅう詰めてくるので抜け出せない。

「つーかさー、何でエリカ、イギリス人のくせにこんな ジャパニアズ・スタイルな日本の冬満喫してんだよ」

「身の程を知りなさい晴光。アンタとファンちゃんどじや、オリオン座とサソリ座くらい相容れない対極の存在なのよ。復活リボーンが早すぎるわ」

「エリカはハーフだもんね。お母さんが送つてくれたんだよ」「にこにこ笑いながら、ニル君がキッチンからリビングへと帰つてきて、コタツに足を入れながら教えてくれた。机に置いたのはお煎餅だ。だ。

「お母さんが日本人なの?」

「お父さんのほうだつて、ね、エリカ」

「クソ親父の名前は出さないで」

「顔からなにまでそつくりなんだよね」

「へー・・・・」「エリカちゃんはとても女の子らしい顔立ちをして

いるから、とても想像ができなかつた。

「ならお養母さんとお養父さんに感謝しないとな～・・・」

その日以来、次のシーズンまで晴光君がエリカちゃんのコタツに入つてゐるところは見ていない。

『どうする気?』

薄い緑色の牛乳瓶からぐぐもつた、男とも女ともつかない声が響いた。瓶の底のほうには濃い色の靄のようなものが、絹糸のような線を引きながら渦巻いている。瓶の緑色にかかるて、その靄の正確な色は分からなかつた。

「どーするつて……」

「食べるんじゃない? 僕の仲間にいるんだよね、そういう子。話が終わつたら自動的にそななると思つよ」

瓶を覗き込んでエルは言つた。『それはヤダな』のんびりと、靄は返す。

「さつきたに比べて、ずいぶんとおとなしいね

『だつてさつきのとあたしは違つもん』

「・・・・・どう意味?」

リューがぼんやりと、黒眼を向ける。『さつきのと、君は違うの?』

『あんな屑つていうか欠片つて言つた、そんなのと一緒にしないでほしいの。あたしはその核。源で、動力源。ついでにいえば、アレはあたしを構成する一つだけど、その残り澤だから大した力は持つてないの。あれはあたしの体の一つだけど、あたしはあんなの伸びた爪や髪と同じ』

『形を整えるためならいつでもバツサリ切っちゃうよ、つてこと?』

『伸びっぱなしでもサマになつてゐる時はそのままだけどねつ』

『えへん! と心なしか誇らしげな声で霞みは言つ。』

『じゃあ、君は何?』

『魂的な? 魂の加工品? ピーナッツの入つたチョコつていうか、ただのパンとサンドイッチの違つて言つた、板付きのかまぼこ? これはちょっと違うかな? お鍋にじご飯入れて雑炊みたいな?』

『なんとなく分かつた』

「えつそれでリューわかっちゃつたのー?」

『飽きないから一度おいしい!的な』

「・・・・ああ~」

なるほど。釈然としないながらも、エルは頷く。「まだちょっと意味が分からぬけど、そーいうニュー・アンスね」『そつそつ』

「ところで君は、夜のネズミ、もしくは眠りネズミ、NYXのリーダー、知つてる?」

『知つてるかも?でも知らないかも?どんな人?』

「『赤毛』、『三日月』、『無い左耳』、『優男』、『あーーーー』

分かつた!—霞は瓶の中で飛び跳ね、歡喜の声を上げた。

『わかつた逢瀬の君でしょ!いや~あの人も一途だよねつ』

『一途?』首をかしげたリューをエルが制す。

『片割れをずうーーーと待つての。最近は探しもしてるみたいだけど。あたしとか使ってね?やつと、やつとよ!?やつと動いたの!待つてたのなんてもう何十年も何百年もよ?あんまりなもんだから、逢瀬の君つてあたしたちは呼んでるけど』

『あの人人がそんな情熱的だつたなんて、知らなかつたな』

『待つての!待つてのよつ!—』瓶の中がぐるぐる廻り始める。

『何?』「ちよつと!—」

『此処にいるよ貴方は何処?ずつと待つての、貴方を待つての!貴方は待つての?早く早くこつちへオ・イ・デ!』

欲しいのは君の赤!あたしの赤は君は欲しい?赤、あか、アカ!紅くれない

はすべての色の事!—』

『霞は瓶から蓋を押し上げ、溢れるほどに膨れ上がつていぐ。『ちよ

ツ・・・・』

『早く見つけてあたしは此処よ!?』

陽は落ちる！ 紫の空！ 黒をおとして星をばら撒く！ ！

青は遠いが金はこの手に！ ！

大丈夫、ダイジョウブ？ 大丈夫大丈夫！ ！ 眼を瞑つて、いち・に・

さん、その手を伸ばして大丈夫！

あたしの力チよ！ 海色は見てるだけ、空色は此処にある！ ！ 焦が
れるだけの紫なんてもう要らないわ！

欲しいのは命の赤と一寸先の闇の黒！ ！ 星も要らない、月も要らない
い！

どうかどうか泣かないで！ ！ 涙色も此処にはいらない！ ！

命の色が糸を引く！ 羽を広げて飛んでつた！ ！ その白は何の色？ 貴
方に白は似合わない！ ！

あたしは此処よーこの手を引いて！ 糸の端は此処にある！ 此れの先
にきつと届る！ ！ 』

ぶくり

音を立てて瓶を云つて霞があふれ出した。霞は蜜のよつた金色で、
どんどん広がつていく。

「エル離して！ ！」

『愛して愛して愛されて！ ！ 花束いらない、それなら薔薇を送りま
しょう！ ！ 一輪だけよ？ ハインを飛ばして！

昼の月は光色の返す白！ 雲は流れる、水溜り！ ！ 濡れた鴉は雨宿り
！ 濡れ羽は飛べない籠の鳥！

まわるまわる世界は回る！ 狂つた猫が落ちてくる！ 羽をひきつて落
ちてくる！ ！

僕らの腕に落ちてくる！ ！ ！

あたしは此処よーあおこで！ ！ ！ あやまつ！ ！ 』

「逃げられた・・・」

割れた瓶の欠片を見つめながらエルは眼を覆つた。「あちゃーこれ高いのに」

「あっちが一枚上手だつたね」リューはエルの肩をたたく。「残念だつた」

「ミーナ怒るだらうな。持つて帰るつて言つちやつたから」

「もう瓶無いの?」

「無い」

エルは肩を落とし、恨めしげにあたりを見渡す。

「この人たちはなーんにも知らないんだらうな」

「まあそうだらうね」

薄暗い荒れたオフィスで、二人の人間が眼を見開いて固まっていた。

「止つてるから」

【 異端者 · 三 · 】

希望が見えているものなんて居ない
それが何色かなんて誰にも判る筈がない
どれだけ目を凝らしたって、それがどの方向にあるのか、前にある
のか後ろにあるのか

太陽のように上で輝いているものなの
か足もとに転がっているものなの
か

そんな形のないものが見えるものなんて、一人だつているわけがない

それなのに人は私を神と呼ぶ
希望だといつ

それが見えるものだと信じて疑わない

迷い惑つて、同じ過ちを繰り返し、その行動を後悔する

それが出来る私が神とは如何に

正しい道かなんてわからぬ

ただ自分を信じているだけ

でももし間違つた道だとしても、その先に結果として『正しい』
と言われる、そんな未来があることも知つてゐる

ずっと先の、未来の希望を手にしたいばかりに、間違いといわれ
る道を近道と進む方法があることも

私は神などではありえない

だつてその、『間違つた近道』をしてしまつのだから

(佐藤 咲希著『幻空帖』 希望の神
様)

走れ！
走れ！！

止めることは許されなかつた。闇で動く真つ黒な塊が追つてくる。聞こえたのは、アレの声を聞いたのは一度つきり。

『誰だ！』

鋭い刃物のような声。その空氣の振動。初めてだ。殺氣なんてモノを感じたのは、自分の体のはずなのに思うように動かない。チラリと見えた空は濃紺などではなく真つ黒で、隙間から零れる光のようすに青白い光が幾億と瞬いでいる。ここは僕が居た場所じゃない。だつて、だつてあんな光、見たことなんて無い。

違う世界だ！

こんな場所知らない。知らないんだ。何もわからない。なのに、なにごどうして。
どうしたら

死ぬ？

嫌だ

まだ、まだだつて・・・

「あつ
」

砂が口に入った。舗装もされていない道。間近の砂はほのかに赤く、砂浜の砂のようにさうさうしている。

「う・・・・・・

走らなあや。 「動くな

首に当たる、氷のよつて冷たいナニカ。

嫌。

やめて。

殺さないで。

鋭くそれが貫いた。

空は遠く、伸ばすその手は届かない。
端から届くはずが無かつたのだ

前にあるのは「ペー用紙を閉じただけの小冊子。小さな活字が、小さな黒い虫のようにびっしりと埋まっているのを見て、ビスは小さく溜息をついた。ちらり、と隣の兄へ、白く長い前髪で隠された右目ではなく、裸の蒼い左目で視線を送る。「不安?」

「……いえ」

ビスは背筋を伸ばして椅子に座りなおし、机の上のモノクロのその紙の塊を見つめた。

「大丈夫です。自分は、出来得る限りのことを。選ばれた事は、それだけ評価された事と考えます」

「じゃあ決まりか

「……はい」

擦れた声で囁くよつと言つて、ビスはその小さな手でそれを手にした。

た。

「『此処にいるよ貴方は何処?ずっと待つてる、貴方を待つてる!貴方は待つてる?早く早くこつちへオ・イ・デ!」

欲しいのは君の赤!あたしの赤は君は欲しい?赤、あか、アカ!紅くれないはすべての色の事!—!』

『ちょッ・・・・』

『早く見つけてあたしは此処よ!—?』

『陽は落ちる—紫の空—黒をおとして星をばら撒く!—!』

青は遠いが金はこの手に!—!』

大丈夫、ダイジョウブ？大丈夫大丈夫！！ 眼を瞑つて、いち・に・さん、その手を伸ばして大丈夫！

あたしの力チよ！海色は見てるだけ、空色は此処にある…。焦がれるだけの紫なんてもう要らないわ！

欲しいのは命の赤と一寸先の闇の黒…星も要らない、月も要らない！

どうがどうが泣かないで…涙色も此処にはいらない…

命の色が糸を引く！羽を広げて飛んでつた…その白は何の色？貴方に白は似合わない…

あたしは此処よ…この手を引いて！糸の端は此処にある！此れの先にきつと居る…』

『エル離して…』

『愛して愛して愛されて…！花束いらない、それなら薔薇を送りましょう…！ 一輪だけよ？コインを飛ばして…

昼の月は光色の返す白！雲は流れる、水溜り…！濡れた鴉は雨宿り！濡れ羽は飛べない籠の鳥！

まわるまわる世界は回る！狂った猫が落ちてくる！羽をひきつて落ちてくる…！

僕らの腕に落ちてくる…！

あたしは此処よ…さあおいで…！きゃははは…』

その場の誰もが聞き入っていた。人数は10にも届かない。全体として、年齢は若く、中心に座るのは赤毛の妙齢の女だった。その傍らには黒髪の東洋人の男が座る。

音が消された後も、誰も発言しようとはしなかった。むしろ、音を立てるのを禁忌としているふうにすら見える。

ややあつて東洋人の男が立ち上がった。大きくない声はその場に響く。

「これは物語管理局の夢人の一人が接触した、憑依型の異端者が時イレギュラー

間停止された空間で別に居合させた異端者に言つた言葉です。異世界を渡るにあたつての彼の装備は総て壊されていましたが、このテープのみは無事でした。異空間でも使えるよう強化されている音声記録機で、何かの衝撃で動いたものと考えます、「

白銀の童子

「…………何度聞いても、辛いものがあるね」

「ぼそりと、一人のシルクハットを被つたブロンドの男、帽子屋が喰いた。」「…………」んなのって

其れを始まりに、周囲も話し出す。フロックコートの淑女が確認するように身を乗り出した。

「…………ねえ帽子屋、これはあの人だよね？」

「白兎、貴方はこの声を忘れましたの！？なんて事、あの人はこんな…………！」

赤毛の女、Q^{クイーン}は顔を手で覆つた。

「ぶつちやけボクにはわからないよ？あの人と過ごしたのはあんまり長くないもの。ねえ帽子屋、これは本当に…………」

「ハンプティ！？貴方また…………」

「Q^{クイーン}ナンバー2の君がそんなに取り乱したら駄目だろ。落ち着けよ」

「ジャックお黙りなさい！」

傍らで嗜めた東洋人の男、ジャックへとびしゃりとQ^{クイーン}は赤毛を振り乱して叫ぶ。

「K^{キング}！貴方はどうですの！？あの方がこんな扱い…………いいようを使われて…………」れを持つてきたのは貴方でしょう！？」

「Q^{クイーン}落ち着こい」「…………」

「貴方まで！？貴方はわたくしの片割れでしょう！？」

「だからデスよ。K^{キング}アナタを止めらるるK^{キング}だからでス」

中華服の老熟した雰囲気の青年がQ^{クイーン}を見る。その向かいに座る彼女と同じ赤毛の少年は苦笑した。

「…………分かりましたわ、イモムシ。ええ、落ち着きましょう。眠りネズミ、チエシャー、貴方方は発言していませんけれど、どうなのかしら」

伸びきった黒髪の男が頬杖をつきながら、眠そうに閉じた目を少しだけ開いた。

「まあ、主犯が俺と同じ『眠りネズミ』つてのがまず気に入らないね」

沈黙が落ちる。

「・・・ネズミ、Q^{クイーン}がキレる前に悪ふざけはやめろよ」やつと、帽子屋が嗜めた。

「ああ。俺の元情報部長としての見解としては、彼女は彼女としての意識があると考えるね」

「あえて、こんな行動をしたと・・・？」

「ワタシもそれは同意します」

軽くイモムシが手を上げ発言する。「でも、完全に意識があるとは言い切れない。『焦がれるだけの紫なんてもつ要らない』これはチエシャー、貴方の事でショウ? あの人はコンナ事は言いません。貴方達夫婦の仲はミンナが知つテる。命令のナ力に自分のメッセージを混ぜてイルと考えルのが妥当」

視線が奥に座る男に集中した。

紫に染めた髪の間から、切れ長の金色の目が光る。黒い服に白い白衣が浮き上がつて見えた。

「お前らここ何年で忘れてんじゃねエか?『アリス』は元から楽天主義の上、物凄く明るい緊張感の無い奴だ。そのくせ、誰よりも頭がいい。『楽しい事』のためならどこまでもする」

チエシャーは自身の黒く塗られた長い爪を見つめる。

「アイツは特殊だ。特別だ。なまじ頭がいいモンだから、突拍子もないことをする。アイツを心配する頭も権利も、俺たちには無^ヒんだよ。」

「アイツは夢そのなんだから」

「クツ、チエシャー猫は喉を鳴らして小さく晒つた。」

小さなランプの僅かな明かりが辺りを少しだけ金に照らす。絨毯も
ひかれていない、冷たい石の床で「ツツツツヒールの足音が響いた。

「始まつたわ。やつと、やつとよ。今会いに行く」

彼女はそつと、その血のように紅い目に触れた。

「・・・今、行つてやるわ。今度の私には羽があるもの」
翼が闇を覆うように大きく広がる。紅い目は前を見据えた。ひび割
れた姿見は黒いドレスの女を映す。

「私は貴方を見ているわ」貴方は私を見ているかしら。

白は何にも染まるただの白
それはその身をもつて色を彩る
闇は背にして
炎は映し
光は共とし
空に守られ
愛の炎は手を翳す

真の白をもその目に宿し
すべてを観し
涙を流す

「割に合つてないと思つんだ」

ニルが唐突に口を開いた。

曇りガラスがはめ込まれた木戸に鍵をかけながら、晴光は首をひねる。「ワリ?」

「何なのよいきなり」

「いやだから、この前の僕とエリカのと、晴光君とファンちゃんの任務内容」

「今、エラールの話してたじゃないの。それが何で任務内容になんのよ」

「いや、ごめん。何か急に……」「行くわよ」「あつ、ちょっと待つてよ」追いつき、ニルは少し考えてから話し始めた。

「いやだつてさ、僕らはこの前やつと研修がおわったばかりの新人で、晴光君達もまだ一年目、僕らはパートナーを組んで6年経つけど、晴光君達はまだ一年半。

チームワークもまだまだだし、経験不足。普通、魔法生物やら憑依型やらの任務につける?」
足は覚えた道を進む。

「それはたまたまじやね?たまたまそなつちやつた、つていうか。俺んとこの隊長もそういうてたし」

「私もそう思うわよ。魔法生物つつたつて……ああでも、アレ一步間違えば」

「……そつか、一歩間違えたら登場人物が最悪死んじゃつてたよね」

「女子組正解。最悪その世界崩壊。新人一人で、そんな任務つかしくない?」

「ええーマジかよ。何ソレ部下イジメ?成績悪いから?」

「さすがにそれは無いと思うわ。でもねえ……」

エリカがきゅつ、と眉を寄せた。「そりやおかしいわよね、だつて少しくらい予想できたでしょ?なのに応援もナシに新人に任せること……むしろチームでする任務よね。何で気がつかなかつたのかしら、少し考えたら分かるのに」

「…………何かの試験、とか？」

「何のよ」

「…………出世の?」

「えっと、それは昇進じゃないかな、出世じゃないなくて」

「あそーか。ファンナイス！」立てた親指を突き出した。エリカの足が伸びる。

「『ナイス！』じゃないわよ」「いつてえ！ひつヒール！ヒールは駄目だつて！！」

「ぎゃーめり込んで……ちよつと凹んでるううう」「あ、赤頭を視界にもいれず、エリカはふう、と息を吐いた。（「チヨツ……ファン！……血い出でない！？」」「うつ、うつ）で脱がないで晴光く、きやーー。」

「考えても仕方ないわよ

「まあ……今回の任務頑張るつか。晴光くーんファンちゅーん行くよー」「ううう」「つち来ないでええ」「えええ俺達パートナーじゃん！」「パートナーだけどイヤーーー。」

晴光を一警し、ポケットに手を入れる。手元の白い紙に田をつくり、隣を歩く二ルの肩をたたいた。

「ねえ、今回の命令任務、隊長の、この第五部隊のビス=ケイリスクつて誰よ」

白銀の童子

「今回、合同任務の隊長を勤めさせていただきます、ビス＝ケイリスク任務隊長です。よろしくお願ひいたします」
静かに言つたその人間は、明らかにこの場にそぐわない姿形をしていた。

「あれ子供じゃん！！」

目を丸くして赤頭が叫んだ。石畳の薄暗い廊下には、その声が反響してさらに大きく聞こえる。無言でエリカは晴光を殴り棄て、先を急いだ。前を歩くカーキのマント型の制服を纏う小さな背中は何の反応も無く、ただ先頭を歩いている。傍らの『本』らしい長髪の、長身瘦躯の男も同様だった。

（しらが、というよりは、はくはつ、の白髪。いや白というよりは色を反射する白銀？ 一人とも目が悪いのか・・・・いやでもあれじやあむしろ見えないし・・・・）

『本』の男だ。小さい方は片方 右目が髪で覆われているのみであるのに対して、彼の両目は白いアイマスクで隠されている上、そのアイマスクに細かい厚い刺繡が施されているので透けて見えるとは考えにくい。

「何呆けてんのよ」エリカが小さな声で囁いてきた。

「・・・・いや」

そついつて首を振ると、それだけでエリカは分かつたようだった。

「まともつたら後で教えなさいよね」

「・・・・エリカ知らない？ケイリスク兄弟」

出勤への道すがら、二ルが口火を切つた。『知らないわね。それ今度の隊長のことなの?』

「うん・・・・・・じやあ『本』の禁忌は知つてる?』

『『多種族と交わらない』』

『そう。その二人は、その禁忌で生まれた兄弟なんだ。両親は本と夢人の元パートナー同士。

本だつた母親の方は本家の令嬢。医学を学び、ファンちゃんと同じ肉体強化と薬学に定評のあつた医師・青色の口キ。彼女は変人だつて噂があつて、父親の方の夢人はそれまで5回、パートナーを変えてるんだ。本人の特殊能力のせいだつていうけど。

父親の方には親兄弟いなかつたから、母親の方の家の反対を押し切つて、二人は三年後に勝手に結婚、長男をもうけた。それが兄の『本』の方。

今度の隊長になつた弟は父親の、夢人の方の力を持つていて、誰もあの二人とやりたがらないから二人でパートナーを組んでる

『禁忌の子、つてやつなのね』

『うん。見たらすぐわかるよ。』

『本』は髪とか眼とか鮮やかで色とりどりだけど、この二人は『禁忌』にしか出ない『白』を持つてるんだ

髪にね、と二ルは自分のこげ茶の髪をつまんで見せた。

視点はまた石畳の廊下に戻る。

『・・・・・エリカ、最初に謝つとく。僕とファンちゃんはあの二人に話しかけられないから、『ごめんね』

『ハア！？何ソレ！？』

曙光よりも大きな叫び声に、前の一人が振り返つた。『・・・・・何か？』『すみません。気にしないでください』

「どうじゅことよー」声を潜めながら口調を荒げるといつ偉業を成し遂げながらエリカが噛み付いた。

「全面的に禁じられてるんだよ」

「禁忌に觸れるなって！？そんなん言わなきゃ分かんないじゃない。今から行くのは異世界よ！？」

「いや僕は頑張るけど・・・ウチは分家でも厳しくない所だし・・・・・・ファンちゃんは、ほら、本家に近い家の子だから、たぶん無理だと思うよ」

「本の一族つて自由と結束がモットーのくせになんなのよソレ。人んちの家訓に文句は言いたくないけど、それつて餓鬼のイジメ常套手段じゃないのよ」

「あはは・・・・いや笑えないんだけど・・・」

「二郎は小さくなつた。」

「しかたないよ」

石畳の廊下の先、小さな、しかし纖細な彫りがされた半月型の扉があつた。人を表す薔薇と本を表す蓮を掲げるその、ブロンズの取っ手に先頭を歩くビス＝ケイリスクが手をつける。それだけで扉は内に開き、6人を招きいた。

「・・・慣れねえわー」

色という色が混ざる空間は平衡感覚も上下左右の感覚もおかしくする。ぼやきながら晴光はマーブルの空間に手を伸ばした。手はぬるりと色に埋まるが、感覚はあくまでも空気の上に乗つていて、それだけだ。「視覚攻撃が半端ねエ」げんなりしてその手を引き抜いた。「感触があつたらぬちゃり、というかぬめり？ずるり？そんな感じだと思つ」

「馬鹿なこと言つてないでちやつちやと進みなさいよ」

自分達の声と衣擦れの音のみが聞こえる場を進む。色は列の横をモ

一セで波が割れたように避けて流れしていく。

リン

100メートルほど歩いた程か。不意に、鈴の音が響いた。

リリン

『ボクは管理人です。今からどちらへ?』

「座標RV10へお願ひします」

甲高い、姿なき声にビスが答える。

『明るい桃色ですね。わかりました。バッヂを拝見・・・はいわかりました。夢人ですね、ではお気をつけて』

感情の無い単調な声がゆっくりと言い

リリン・・・・・リン

音は弾むように鳴りながら遠ざかっていった。

「いつも思つんだけど、あの管理人ってどこから見てるのかな?」

「さあ? 管理人だもの、どうかで見てんのよ」

104

イレギュラー

「今回するのは、この世界で連續して召還される異端者の殲滅です。原作は『サンド』、場所は城下の門と堀の付近です。主に夜中、憲兵にその姿が見かけられています」

陽はすでに低い位置にある。

顔半分を赤く染め、砂埃が舞う乾いた道の端、閉店間近の露天の影で6人は顔を付き合わせた。街の外れも外れだ。客の来ない場所で、太つたいかにも気の弱そうな店主が大きな体を小さくして目を閉じて座り込んでいる。

「連續・・・・つてことは」

「他の異端者は憲兵に捕縛され、処刑されました。この世界は危険のため、これ以上犠牲者を出すわけにはいきません」

「じゃあ、召還されるのは一般人ばかり?」

「はい。どれも学生服の子供ばかり」

「召還師は?」

「今回の場合、召還師はすでにこの世界の他の罪で連行され、処刑されています。残った陣と魔力で勝手に召還が行われているものと推測がされています。以上ですが、何か質問は」

淡々とビスは無感情に言葉をつむぎ、隠されていない方の蒼い左目で右からエリカ、ニル、晴光、ファンの順で見た。首を振ると、「では、」と今度は作戦について話し出す。

無表情の弟に対し、兄のほうは目元が見えないにもかかわらず、常に笑顔を浮かべていた。ニルとファンはその宣言どおり、一人には話しかけもしないうえに、視線も合わせない。

（やりにくいつつーの・・・）

エリカと晴光の意見が一致した。

夢人の力は『世界を渡る』力だけではない。

『想像力』。

それはただ、頭の中でものを再現する、もしくは創り出す、それだけの力ではなく、人間だけが平等に与えられた『創り出す』能力だからこそそれは『創造力』とも呼ばれる。

しかし人はそれに気がつくことは無く、存在すら皆無である。理由は簡単。『目に見えないから』。『想像力』の影響は、他の世界に現れることが多い。筋書き通りに進められる物語世界がその典型だ。力は集まれば集まるほど、想えば想うほど、物語はより確かに輪郭を持つ。愛されれば愛されるだけ、物語はより確かにより確かに世界を支える柱となる。

能力増幅剤としての『本』が行うのは、その力の増幅、人一人で、数万人分の『創造』を。

だから、夢人は本が必要なのだ。

麻の長いマントを鼻先まですっぽり被り、ぞろぞろと暗い乾いた道を進む。現地調達のマント姿は怪しいことにの上ないと思っていたが、陽の落ちた町ではそんな怪しげな団体も多く、憲兵の視線は痛いがそれだけだ。

始めて見たケイリスク兄弟は、『全体的に白い人』といつのが、晴光の感想だった。

（女の子だつたら、5年後が楽しみな感じになー···）

先ほど穴が開くほど見た顔を思い出す。白い長い前髪でよく見えなかつたが、弟の方は小さいながらも可愛い、というよりも美人、という感じだつた。人形のように無表情なのも、白いを通り越して生気が無いほど青白いのも便乗していると思う。兄のほうは、禁忌の子といつてもやはり本らしく、腰まで長い白髪を三つ編みに垂らしている。また系統は違うが、常に笑顔でその上、すっぽり目元から鼻筋まで隠すアイマスクときて弟と並ぶほど白い肌、せらりに作り物らしい。

（あれどいつやって見てんの？心の田へとか？ うわなんかマジでできそつあの人···）

つい、先ほどのことだ、無言で一タリと笑いかけられたのは。ぶるりと晴光は身を震わせた。迷い無くケイリスク兄は進む。（あれむしろオレより見えてんじやね？）そう思わせるほどに障害物も難なく前を彼は歩いていた。その彼の足が止る。

「···んん？ 何？」
「···着いたのよ」

召還師の遣した場所に。

「風が吹いたら壊れそう、つてとこを想像してた」しつかりとした建物だった。

ささやかだが少なくとも貧乏な人間の住居ではない。泥を固めた壁は上に石をかぶせてあり、隙間など到底無い。屋根も雨漏りなど無縁なように見える。

「・・・・・召還師つて、儲かんの？」

「占いとかもしてゐわよコイツ。外にマントのやつらがウロウロしてたじやない、流行つてんでしょ。それじやない？」

晴光には到底わからない銀のカップと模様のかかれた紙の束を見せた。「模様じやないわよ文字よ」

「エリカつて魔女だつたんだあ……」「……訓練で魔法使つてたでしょ？私、魔法以外で戦闘したことないわよ」

「エリカ」

しつ、とニールが指を立てた。

「・・・・・居ます」

そつとそれぞれパートナーに近づき、何処かしらに触れた。あわせて音も無く融けるように二人が本に変わる。

それを開いて片手に持ち、構えた。

奥の扉が開く。「・・・・あんな扉、オレ気がつかなかつた」

「・・・・・」

闇の中、息を呑む声。

「まつ・・・待て！」

ギヤザースカートを翻し、肩をひそめて小さくなりながら、転がるように少女は入り口に突進した。

白銀の童子（後書き）

本の一族は3つの本家とそれに順ずる四つの分家で構成されています。

白銀の童子

すばやく入り口に一番近い晴光が立ちふさがった。少女はたたらを踏み、すばやく大きな瞳を動かす。少なくとも外に続くのはこの扉だけだ。

『い　いや』

親指を拳に固めて守るように体の前でクロスした。首を振る彼女はゆっくりと後ずさる。

耳に鳴れない言葉に、エリカはイヤリングの翻訳機へ手を伸ばした。

『ま、待て待て待て。落ち着けよ』

震えながらぼろぼろ涙を流す彼女に、晴光が早口で何事か口走った。

『オレ達何もしねエから』

『　　ゆ、ゆうかいは、『ち、違うつて！－な？』ばさりとフードを取る。

『オレら、たぶんそんな年変わらねえし！』

『ふ、ふりよ』

『オレ超マジメだから！見た目で判断すんな！！』

大声にびくりと肩を跳ねさせ彼女は固まつた。『大丈夫、味方だ』少女の強張った肩がわずかに下がる。

震える唇を噛んで、黒い目がこちらを見つめた。

『落ち着いたか？』

『・・・・・』

頷く。

『・・・・・言葉が分かるならアンタが話した方がいいわ』

『お、おう。頑張る』

『まず、此処に来る前、何をしていたか、話せるか？』

知らない場所だつた。

冷たい床はコンクリートでもフローリングでもない。そこに、気がついたら立つっていた。窓からは真っ赤な光。部屋はやけに暗い。ドアが一つあつたから、ちょっとだけあけて見てみた。ここよりもずっと、暗い部屋があつた。でも、絨毯がひいてあつたり、壁にモノがかかっていたり。

人が居る

ここは人が住む家だと、そうわかつて少しほつとした。一人が無性に怖かつた。でも、ここ家の住人が悪い人だつたら？もし、その人が私を連れてきたんだつたら？

逃げないと

心臓はバクバク鳴つている。どうか帰つてきませんようにー。冷静になろうと、手をつなぐように両の手を結んだ。まず、もう一度もとの部屋に戻つて窓の外を見た。

そこで始めて、ここが私の知らない、外国だと知つた。

外を歩くのは褐色の肌の人達。黄色人種と黒人種の中間みたいな人達。言葉は？無理だ、英語も習いたてで文なんか作れない。発音だ

つて、外国人の先生は褒めてくれたけど、単語一つの発音が巧くなつて。

口を結んで、手を握りなおして、じんわり汗が流れたのを感じた。冷や汗といつもの本當に出るんだ。

呆然としていると、音がした。次に話し声。小さな声がぼそぼそ聞こえる。1人や2人じゃない。言葉は分からなくもいっぱいいるのは分かつた。何かを探している、何を？ 私を？ 何をされる？ 何をなにを？ 何？ 不審者が出たとき、そういうことを学校で習つた。知識はある。けど、具体的には知らない。何を？ テレビでそういうことは見たことがある。都市伝説の番組で、確か超能力者が親に依頼されて行方不明の息子を

『息子さんをあちこちで感じます』

じつはね、この話、

彼が臓器売買されてたつていう話ですよ。

血の気が引くとはこういうことだ。

気がついたら体が勝手に動いていた。

ちらりとさつき、思つたんだ。『逃げるなら、不意打ちを狙うしかない』

目測で数メートル。それだけの距離で、2度、転びそうになつた。足元が絨毯をすべるたびに、体が氷付けにされたような錯覚を覚える。人はたつた三人だった。もっと多いと思っていた。マントの人は大きいのと、中くらいのと、小さいの。中くらいのが叫んで、大

きいのが私の前に立ちふさがった。小さいのだつたら良かつたのに！
状況がいつぱく遅れて頭に届く。「い　いや　」我ながら情けない声が出た。あれだけのことをしたのに、こんな、こんな声しか出せないなんて。

「オレ達何もしねエから」

大きな人は言った。嘘だ。

「　　ゆ、ゆうかいは、」「ち、違つてーーな？」ばさりとフードを取る。

「オレら、たぶんそんな年変わらねえし！」

確かにそう見えた。三年の先輩くらい。でもまず、真っ赤な頭に目が行った。

「ふ、ふりよ　」不良さんだ。「オレ超マジメだから！見た目で判断すんな！！」

「大丈夫、味方だ」なんて、嬉しい言葉。

「落ち着いたか？」でも、信じていいの？本当に？

後ろの中くらいの人と、元の言葉で大きい人は言葉を交わした。ねえ、それは私をどうするか話してるんでしきう？そう思つたらまた体が強張つた。何？何なの？大きい人は口を開いた。

「まず、此処に来る前、何をしていたか、話せるか？」

此処に来る前？

閃光が、走る。

部活、そうだ、部活で、応援、大会で、駅ホームで？

「雨じやん。中止にならないかな？」

「屋内だもん」

『列車が通過します。白線の内側までお下がりください』

「あつ」

列に並ぼうとして
チラリと映ったグレーのスーツ
針のような雨
手を離れる傘
黄色の点字ブロック
黄色と黒の乗り越え禁止のロープ
親友の黒い後ろ頭

下で砂利が その下には線路

電車？

「 いっ

傘、雨、電車、応援、落ちる、骨が、
エリカがやつと設定できた翻訳機で拾つたのは、この単語だった。
次に悲鳴。

一瞬で分かる。傘、雨、電車、で、エリカは気が遠くなるのを感じた。そして、『落ちる』、でこちらを確認するように振り返った晴光の蒼白の表情。その予感のすぐの『骨』。悲鳴。

【最悪の事態】だ。

体液を撒き散らし、髪を振り乱し、口から吐き出されるのは言葉にもならない悲鳴。

「死してさえ安息は許されぬのか、」

その台詞が浮かび、泣き叫ぶソレに、エリカは思わず目をそらした。魔女であるエリカにとって、その術の知識はある。

実際、それを数多使つた犯罪者も、エリカの故郷には居たらしいし、どちらかといえばそういう闇の魔術と言われる魔法を戦闘要員の調整部を選んだ際に散々調べたものだ。さらにいえば、魔法だけではなく、力というものには、植物にしろ動物にしろ、生命なくしてはありえない。

少女に外傷は無い。服にも真新しさがありありと伺える。

「何でよりもよつて・・・・・」痛む頭を抑えた。

呆然と晴光は立ち尽くしている。

「ちょっと、しつかりしなさい！仕事中よ」

苛立たしげに肩をつかんで見れば、蒼白で震えていた。「・・・・・これつて」擦れた声で問う。

「見れば分かるでしょう。突つ立てるんなら邪魔よ。どいて」「いやでもつ」

「ああああんたたちでしょう」

声は揺れながら掠れていた。「アンタ達でしょう！こんな事したのはつ！！！」

「・・・・・違う」「うそうそうそ！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

「ないもん！？！？！？！？！？！？！？」

「知らない知らない知らない知らない知らない知らない知らない？」

「…………ツツ…………」

彼女は腕を広げてエリカに掴み掛かった。「しらないしらないしらないしらない・・・・・」うわ言のように呴く呪詛と息が間近にかかる。「あっ、おい！！」晴光が慌てて取り押さえ羽交い絞めにした。「 何でアタシなのツツ！？』

パスンツ

それが合図だつたかのように、空間を斬り進む音と共に、騒音は消えた。

構える鈍色からは薄く小さく煙が上がっている。ビスはフードの下で小さく息を吐くと、目の前に差した影を見て手元からそれを消した。

「何で撃つた！？」

「それが必要だつたからに他なりません」

ぐん、と視界が揺れる。勢いで『本』とフードが落ち、晴光の赤茶の目が一時丸くなるのが瞳の一本一本が見えるほどの距離で見えた。

「彼女は、もう、死んでいます」

幼子に言うように、ゆっくりと言われた言葉に、震えながらゆっくりと踵が床につく。入り口近くの床を見ると、すでに骸はエリカが送つた後だった。

「仕事が速いですね」

「・・・・・まあ」エリカは肩をすくめる。「・・・・・時間は無駄にしたくないですから」

晴光はそちらを見なかつた。

金の波紋が、瞬くように円を描いた。

当たり前といえば当たり前だ。

帳は下りて光源がなければ、互いの顔も見えない。その中でぼんやりと、しかし確かにそれは存在を主張するのだから。当たり前だ。闇が迫る。

その金は音も無く、その主と同じに淡々と、光の波紋を描き続けていた。

「・・・・・行きましょう」

気がついていないわけは無いだろう。晴光を除き、それぞれ色の違う三対の目が向けられている事になる。

これだけ視線が彼の目に集中しているのだ。いくら暗かるうと、戦闘要員の調整部にいる人間、気がつかなければ逆に仕事にならない。しかしビス＝ケイリスクは変わらず、こちらを見もせずに、さっさと召還師が遺した道具を回収すると、前だけを見て、兄の手を取つた。

白い髪に隠れていな方の蒼い左目は、瞳の中心から外側に向かってその名のとおり、光の波紋が綺麗な円を描いて広がつていく。暗い中では隠された右目も、その主張を隠しきれてはいなかつた。

ただ左と違うのは、その光の力強さ。右と左では昼と夜ほどに差がある。蒼色に広がる光はさながら昼の白い月か。なら右はそのまま夜に浮かぶ蜜色の満月だ。

沈黙が保たれたまま、一行は数時間前ぐぐつた扉を閉じた。

「エリカ＝アイリーン＝クロックフォード、本・ニルとのパートナ－歴は現在6年3ヶ月。調整部第五部隊新人隊員。魔女。

ゆるく湾曲した刃に酷似する刃を持った剣が主な戦闘武器で、スピードとそれを媒体にした魔法を合わせた近距離、中距離も出来るオールマイティー型。本であるニルとは、研修時代から組んでいる。恐らく今の新人の中では一番長い。

杖腕は右、材質はサクラと白い羽の芯^{ハラ}センチ・メイドイン・母なんだそれ。

パートナー共に、成績優秀、模範的だが、共にマイペースで協調性に欠ける部分有り。たぶん無自覚。

えー・・・・懸念する点は、平均3年の研修を倍の6年かけてしていること、原因として、渡り^{トランプ}の力が以上に強いため、研修途中での離脱等があげられる。

はい次、

曙光^{セイヨウ}＝周^{シユウ}、本・ファンとのパートナー歴は7ヶ月、約半年前に第四部隊に異動した際、前任のパートナーが故障により辞職したため、パートナーを組む。前述の通り調整部第四部隊所属。第四部隊らしく、本による肉体強化を中心とした肉弾戦が主、というかそれしかない。

えー、入隊二年前当時は、平均3年の研修を1年で終えた天才といわれていたが、現在伸び悩み、中の中、もしくは下。本人いたつて気にした様子は無く、やや問題児扱い。性格は明るく猪突猛進、趣味がバスケ、RPGゲーム。『こいつは阿呆だ』第四部隊長始め第四部隊員談。

パートナー・ファンは医療系サポートを得意とする。人間の体を熟知するため、肉体強化は十八番。気は小さいところはあるが、周囲をたつた半年ながら信頼しているらしく、早くも兄妹のように仲睦まじい様子が見られる。以上だけど、質問はー?』

「ありません」

「ああ、うん。」

ビスは兄から紙の束を受け取ると、頬杖をついてそれを眺めながら溜息をついた。体重をかけたテーブルはギシリと音を立てて軋む。

「買い換えたさやねエ・・・・あ、お茶いれたけど、飲む?」

海食ひを受けて居る方へ三に持たれて、海馬を載て船に上る。

「・・・・・いえ」

まあ頑張りなよ。家の事はちゅうちゅう俺もするからわあ。またちゅう一頑張りやがついてる。葵次もいふ

「飲んでます。」冗談でもあれば、お五一様

なことですか？・・・・

「あーせん、あた溜息ーーしゃべりでー

ス元にリハは車を乗り出し ぐいと手を伸はした
弟の白い頭を混

「うへ。お父さん?」「呪わん氣持ち悪いです」

その日は雪が降つた。

白銀の童子（後書き）

更新がいつもより遅くなりました。

白銀の童子

「なんか今日暑くね？地球温暖化？」

「それは……訓練帰りだからだと、思つただけど……」

「ここに温暖化は無いよ」

「本人達、エコな暮らしだしてるものねえ……」

風は冷たかっただがしかし、道の端には春の野草が急くようにな花をつけて揺れている。

季節は、春。

「ちょっとー！一緒にいくつたのはアンタでしうが。たかが着替えに何分かかってんのよー」

「『女の身支度は長い』って言ひじやん……」

「アンタいつから女になつたのよー！」

「ファンちゃんならもうここにいるよー」

「うお、マジでか。じゃー今は水被つて女の子、テース

「シャワー浴びてる時間は無いよー」

「馬鹿界の新星ねアイツ」

吐き棄てるエリカに、ニルは苦笑し、ファンは噴き出した。エリカはいつもの黒いシャツワンピースの制服の上に、黒いコートを羽織り、淡いレモンイエローのマフラーをさりげなく首に巻きつける。

「いやー待つた？」

「待つた待つた」

「これ探しててさー」

じやーん

見せたのは日よけ部分が緑色に透けたサンバイザードアだつた。「ダサ

ッ！！

「え、カツ「よくね?」

目を丸くして、晴光はそれを陽に掲げてみせる。「どーよ」

「いや夕かにね……それは」

「…………付けていくの?」ハハタホリが「…………」の前髪全部櫻

「いやー」の前装備全部壊したやつたじやん？装備見て見た目似た
ようなのが数も種類もあるからさー オレもうドレがドレだかわから
ねーって、専門店のねーちゃんに言つたら『試作品なんだだけー、
どう？』って格安のサンキュッパで貰つてセーほとんどの装備コレ
一つに入つてるんだって。凄くね。んで、ほら

じゅうじゅうじゅうじゅう

「アーニー・...?」

「どうひで・・・・」「さらにーーー！」ビシ！「もうひとつ！」と人差し指を立て、額部分に埋め込まれた石とファンの手首の

数珠とを指し

「それは要」

「その直段でそ

い。
満面の笑みの晴光とはにかむファンに反してエリカとニールの顔は渋

「でもそれならクオーツだけ作つてもらつた方が良かつたじゃない」「僕らも数珠をペアで作つてもらつたけど・・・うーんでもアレ、完全オーダーメイドだし、機会があつたときに作つてもらつのがいいよね・・・」「

「えは私かないし」「
「結束力が増すつていうよね。晴光の色はどうちの色?・・・・・
まあ訊くまでもないか」

ファンの手首に收まる数珠は、石榴の実のような赤と淡くもはつきりとした桃色が交互に收まっている。「おいしそうな色よね」

「何それセクハラ！？」

「馬鹿ねー。欲望に忠実そうな色してるつー意味よ。血みたいで綺麗じゃない。ちょっとニール、今何時？」

「え？ あ、9時22分。ギリギリ

「ちつ、遅刻！？」

「ギャー——！」

「走つたら間に合つよー。」

四人は全力疾走した。

さゆつ

磨き終わったグラスと布巾を置いて、シオンはやっと終わったとばかりに腰をたたいた。捲り上げていた着流しの袖を下ろし、濡れると脱いだ羽織を着る。

和服姿のシオンは、白と茶で構成された、フローリングの床の店内に酷くアンバランスだつたが、それを彼は愛おしげに見て息を吐いた。

「終わりました？」

「うん終わった終わった」

顔を出したバイトはパタパタ スリッパを鳴らしながらエプロンを翻し、『オープン』の入り口のボードを出しに行く。「いやア、今日はいい天氣つスよオ。このボヤッとした感じがなんとも」今日は曇りだ。

「開店の時間だよ

「はいよー」

「最近忙しそうだね」

「そーそーてんちょーー！」カウンターに座る子供がスプーンを持つ腕を振つた。

「ボスがさ、すつ””い計画立てたらしくてね、あたし達、しばらくすつ””い忙しいんだつて！」

「ひらミーナ」ドレス姿で身振り手振りで話す少女を隣の保護者の男が嗜める。

「僕らもこの前、リーダーに言われて行つたよー」

「・・・・失敗したけどね」

「僕ら成功率98パーセントが売りなのにねえ・・・」

溜息を吐いてグラスの中身をすすつた。落とした肩を、隣の相棒が叩く。

「エル・リュー・コンビが一番手なん?ウチらはまだいつ行くかすら決まつとらへん」

「オレらはまだ先やる。双子が次くらいちゅうか、どやねん」

「え、マジで?」氷だけになつたグラスをスプーンで弄んでいた手が止まる。

「めんどくせ」「今私達は別件で忙しいんだよね」

「別件?あんたらそんなんあつたつけ?」

「そうそう聞いて聞いて」「この前置いてきちゃつた合成獣、誰かが放したらしくてさー、マーキング付けっぱなしだったからもー」「術がイカレちゃつて。手放したつても可愛いわが子なのにあつさり逝つちゃつたらしいし」「他のも術の異変に上へ下への大騒ぎで、いくつか卵駄目になつちゃつた上に、そのせいで桜ちゃんの胎教に悪い悪い」「興奮してダンナを襲いだすし、子供食おうとするし」「もう散々」

「もう散々」

「大変だつたねえ・・・・」

カウンターに身を乗り出され、ユニークで言われた言葉にシオンは頷いた。

「アンブレラさんは今仕事は?」

細い目をさらに細めてミス=アンブレラは頬に手を当てた。指先で顔にかかる真っ青な髪を後ろに掃う。

「情報屋の方の仕事が五件ほど、DORMOUSEの仕事はまだ未定ですわね。でも長丁場になると聞きましたので、この仕事で『情報屋UMBRELLA』はしばらく休業ですの」

「長丁場・・・・つて、どれくらいなのさ、アンブレラ女史」

双子の片割れが不機嫌そうに聞いた。

「そうですねえ・・・。あの人がどう考えていらっしゃるのかは
判りませんけれど、恐らく長ければ一年、もしかしたら一年、さら
にはもっと」

「え――・・・・」

揃つてその場のものが渋顔を作つた。「あら」
「私達は DORMOUSE じゃありません。夢を見ないでどうし
ます。小さな赤毛の鼠のために、その子供達は頑張るのですわ」
微笑む彼女と溜息をつく DORMOUSE に、シオンはそつと、お
かわりを差し出した。

閑話 四月八日 噙茶ASTERにて（後書き）

話数を数え間違えていたので、予定を急遽変更して、次回より本編開始です。

一章　「ひつ色の異端者（前書き）

本編突入企画リクエストお願いします！

一章 いつし色の異端者

黒は染まる事のない闇の黒
其れは力を以つて色を飲み込む

夜の常闇は総てを包み

命の炎をも色に染め

無垢なる雪白を背にたつもので

光に従い光を従う

空は隣人

愛の炎は静かに燃やす

灯した光は星の色

延びる軌跡は情の色

高貴の色はその身に宿す

赤は燃える身命の色

それはその身を燃やして其の色とす

文明の炎は宝を灯し

その雪白へ色を映し

闇を父とし

光を母とす

空は焦がれる

愛の炎は宝とす

溢れた炎で色を焼き

然し其れは戾らない

然し其れは其処にある

白は何にも染まるただの白
それはその身をもつて色を彩る

闇は背にして

炎は映し

光は共とし

空に守られ

愛の炎に手を翳す

真の白をもその目に宿し

すべてを観し

涙を流す

赤は白に成りえず

青にもなれず

地に落ち混ざり

黒と成る

カンカンカンカンカンカンカンカンカン！

たとえばそれは、近所にあつた踏み切り

たとえばそれは、朝を知らせる日覚まし時計

たとえばそれは、おもちゃのシンバル

たとえばそれは、遠くで響くサイレン

たとえばそれは、

たとえば

これは警告だ。

警報は騒音として、この頭の中にただ響いた。

どろりと黒いそれは、触れてはいけないものであると、ただ、ただ音は知らせた。

しかし所詮、音は知らせるだけであると、しつかりと僕は意識した。どうする？どうする？？

決めるのは

考えるのは、

たとえばそれは、田の前に落ちた、自分で爆弾だった。

「見ているか？」

彼は問う。「見ているか？」

「人の不幸は蜜の味というものなア。見て、それを、お前はどうしたかった？聞いて、それをどう考えた？」

この世界でお前は一人きり、僕もそうだ。

お前の中身は誰も見えない。お前のしたいことは誰にもわからない。

お前の求めるものは誰も知らない。

お前の夢は何だ？

お前の色は何だ？

お前の は何だ？

何をしたかった。何に成りたかった。何が欲しかった。欲なぞ数多あるだろう。お前はどれを選び、どうして、どう成った。

間違いだつたのではないかい？すべて、すべてはお前のそれが、中心を壊してすべてを狂わせた。否、中心でなくとも、その一つを確かにお前は壊したのさ。

大切な、大切で、お前ではなく、誰かにとつては何よりも大切な、中心、核となつていたものを。核と、なるはずだったものを。

お前の世界はお前の両手の届くところまで、見えるところまでしか
無いんだぞ！？お前がうるさい、業もうるさいぞ！

彼は問う。

お前の世界をお前ばかりのやうに？

「何で オレ、朝つ ぱらから、走つたんだ つけ？」

「そ、それは、晴光が つ、はあ・・・・」

「アンタ馬鹿よ・・・・やつぱり」

私は溶けそうです。

こうじうとき、さすが調整部の人間だと思つ。一番早いのは男の子で体力のある晴光君で、次に意外にもマラソンは得意らしいニル君、次に短距離は得意だけど、と言つエリカちゃん、最後に私、ファンだ。

医療系サポート重視の私だから、最後のほうはほとんど晴光君に引つ張つてもらつていた。今は息が続かず、言葉も出せない。やつぱりというか何というか、晴光君・エリカちゃんは乱れた息もすぐに立て直している。ニル君も肩で息はしているものの、笑っているので大丈夫らしい。ああ情けない。少しくらい鍛えた方がいいのだろうか。

「おいファン大丈夫かー？ 何か死にそつだぞー」

すつ、と晴光君が手を伸ばす。

（きやー！）

背中をさすってくれるのは有り難いけれど、心拍急上昇で死にそうです。（違う意味で）

「エ、エリカちや」ヘルプ！

視線で語りかけると、エリカちゃんは肩をすくめて「ホラホラアンタもー少しくらい女心を察しなさいよ！」と晴光君を蹴散らし……蹴散らし？ 引き剥が、引き剥がし？ （何か生々しい……けど、一人はこんな感じ）変わりに隣にエリカちゃんが立つた。私服では高いヒールなんかを履くエリカちゃんは、一つ上と思えないほ

どかつこいい。

「ファンちゃん大丈夫？ 行こうか」
ニル君がにっこり笑つたので頷いた。

四月の新期ということで、物語管理局の夢人課では、調整部と案内部合同で集会のようなものがある。今期の目標、2、3人ほどの新入部隊員の紹介、もろもろを一番広い調整部屋内にある修練場で行う。

晴光君いわく、『学校の始業式みたい』で、それより少し小規模で真面目でささやかな感じ、らしい。

修練場は半分だけ吹き抜けがあつて、丸く空が覗いていた。並びは部隊ごとに並ぶけど、まだ集合がかかつてないので適當だ。

「あれ？」

ぽつん、と白い人。同じく気付いた晴光君が、エリカちゃんの肩をたたく。その人はゆっくりと私達に近づいてきた。厚い刺繡の目隠しは存在しないかのようにまっすぐこちらへ。

「ああ、やつぱり。君達か」

「つじ色の異端者（後書き）

副題、オカン・ニルと子供達。（末っ子視点）

「うつじ色の異端者

エリカちゃんはちらりと私達を見る。私はそろりと視線を下げ、彼女は「しかたない」というふうに肩を軽くすくめて直った。

「お久しぶりですね」

「ああそうだね」

「で、何か？」

うつすらとエリカちゃんは微笑んで見せた。

「うーん・・・別に何かってわけじゃあ無いんだけど」困ったよう

うに、本のお兄さんは笑う。

「見かけたから、挨拶しておひつかと思つてね」

正面に添えられた調整をして『らじし』、マイクのスピーカーからノイズが響いた。

「そうですか。こちらこそ、また機会があれば」

「いやー、その機会がありそuddだから、こうしてね』『ア、アーアー、マイクテス、マイクテス』

突然のマイクテストの声。あんまりにも『いかにも』な言葉に、周囲から色んな笑いが漏れる。思わずそのマイクの持ち主を見た。

『アーマイクテス、マイクテス。もういいですか?ハイそのまま聞いてくださいね』

ピーポのような、白い仮面が笑っていた。

「ちよつ、アレ局長じやないのか!?」

ざわづ。その場の空気が硬くなる。

『あーいいよいよそのままで』その言葉に並ばなければと動かそうとした足を止めた。

『ちよつとお知らせをボクの方からしそうと思いまして、壇上に上がつて来た次第です。あ、ここ壇上じやないか。まあいいわ、その

まま聞いてね』

男の人にしてはかん高い声。私達は静かに前を向く。

「行こうか」

手が私の肩を押した。『え?』

『ほらほら君達も。静かにね』 本のお兄さんは既に手を当てて、二
ル君の肩にも手を置いた。『早くしないと』

『は?』

『何なのよ?』

『君らもだよ』

されるがままに進む。いぶかしげに周囲の人間が私達を見た。『は
いそこの君達ー』

びくりと私を含めた四人全員が肩を揺らし、『どうしてくれるんだ』
というような視線を送る。『こちらへ』

『え?』

『ほらア、こいつこいつ』

一斉に沢山の目が私達を見た。心臓が縮み上がる。肩に置かれた手
が私の肩をポンポンとたたいた。

『調整部第四部隊・晴光』 周、およびその本ファン、
調整部第五部隊・エリカ』 クロツクフォード、およびその本ニル、
そして同じく調整部第五部隊・ビス』 ケイリスク、およびその本ス
ティール』 ケイリスク以下三組を隊員とし、

「ここに、調整部第六部隊を設立する事をワタシ、物語管理局長口メ
ロ＝ヴ＝ニアノは宣言いたします』

「あの黒髪綺麗系美人は性格絶対キツいよ。なんていうの？俗な言
い方すると女王様系？でも同年代みたいに髪も染めてないし、仕事
中しか会った事無いけど、隙が無いし、絶対浮いてるよ、アレ。も
うひとりの本の子のほうは可愛い系だけど、あと三年ですごいこと
になると思うんだよね。ああいうのに限つて、五年後とか同窓会と
かに会うともう人災並みに垢抜けで可愛くなってるんだよなーコレ
が。お化粧とかしちゃってやー」「兄さん」「ん？あ、でも黒髪は
アレかなー私服で会つたらそのギャップにくらつと来ちゃう感じ?
女の子って変わるからなーでも一人とも肌綺麗だつたし、スッピン
であれだけあつたら着飾つたらもつと凄いと」「兄さん
「んん？何？どうしたのビス」
「もう、いいですから」「あ、そう?」

うつし色の異端者

私達四人の表情が一瞬で変わった。エリカちゃんは無表情で機嫌が悪い。ニル君は蒼くなつて顔が引きつついて笑顔はない。「え！？は！？ええ！？」晴光君はわけもわからず、頭を抱えたり、あたりへ視線を送つたり、蒼くなる暇も無く状況把握に騒がしい。私はといえば、誰よりも真っ青になつて、誰よりも放心状態だった。

『では挨拶を』

『では挨拶を』
前だけを
前だけを見て。

顔色の悪い小さな白い子供が壇上に上がつてきた。紙の様に真っ白な顔色で、マイクの前に立つ。

背を伸ばす。
顔を上げる。
光の波紋は今はない。

『第六部隊の隊長に就任いたしました、ビス＝ケイリスクと申します。この度は大変重要な任に着かせて頂き、大変光栄に思つております。まだ新米ゆえ、ご迷惑をおかけする事も無いとは言い切れませんが、今回の機会を人のためとなるよう、存分に力を発揮する次第です』

そこから始まつた言葉は、そう長くは無かつた。

『先鋭第一部隊、サポート第一部隊、柔軟な第三部隊、戦闘の第四部隊、快活の第五部隊。それぞれ特色はありますが、第六部隊は隊

員数六人と第一部隊以上の少人数のため、狭くとも深く、その存在を残せねばと思います。この度は有難うございました』

深く礼をしてビスは後ろに下がり、右端 兄の隣に立つた。入
れ替わり、また局長がマイクを手にする。

『今回の新部隊設立は隊長含め、入隊五年以内の新人です。目的として、特殊な任務に対応できる新人の育成を掲げていきます。先ほどケイリスク隊長が言いましたとおり、調整部の5の部隊にはそれぞれ特色というものがありますが、この隊と、そして今年度の新しい仲間達がどのように成長していくのかは彼らを含めた、彼らに関わる者全てにかかりていますので、そのところを胸に刻み、よりよい環境づくりに徹してください。

では今年度の新入隊員の紹介を 』

「不満？」

「不満以前の問題です！！」

バンッ

染み一つないテーブルを叩いた。ぐらぐらと目の前のグラスが危なげに揺れるのを見て、慌ててそれを片手で支えながら言う。「こちらに相談もせずに何て勝手な事をつ！」

「じゃあいいじゃないの」唇を尖らせる目の前の道化は何もかもが白い部屋で、長い白い髪を垂らして座っている。僅かに見える肌さえも不気味に白い。

（これが齢700を越す長老！？生き神！？馬鹿な！）

「局は貴方のおもちゃでは無いのです！」

「わーかつてるーつてH、そんなもん、だつて仕事じゃないの。君
も、僕も」

（舐められてる！）

そりやあ、今年で30も半ば、老いを知らないこの男に比べれば童

もいいとこ、外見だつてつりあわない。影で部下達が河童呼ばわりしているのも知っているし、部下だけならず、家では娘が、もつと素直な酷い言葉で自分を罵つているのも知らぬふりをしている。しかしこの年でここまで出世をしたのはそれだけの自分の実力と周りからの信頼があつてのことだと、心から誇りに思つてゐる、それなのに！

「貴方は私が、どのよつな役職だといつことを、存じていらっしゃるのですか」

「知つてゐるわ。当たり前だわ。それじゃなきゃこいつ君は居ない

い

「なら何故相談もせざ！」

バンツ
ガシャン

今度こそグラスが倒れた。

「何故思いつきだけで！何故独断で！何故第六部隊などといつもを何故創つたのですか！！」

やれやれとロメロは首をすくめて手を上げた。

「ひつ色の異端者（後書き）」

リクエスト受付中です。よろしくお願いします。

うつし色の異端者

「言えないんだ、」めんよ

「ハア！？」

まるでチンピラのような声が出た。

「いいですか！？私にも責任というものがありますー・聞く権利
いいえ、この役職についたからには、義務があるのです！貴方は
私を　　いいえ、私の家族を路頭に迷わせるおつもりですか！！」

やつてしまつた、と思つた時だつた。

空気が、とたんに張り詰める。

ああやつてしまつた。

「そのつもりはないね」

仮面に手をかける。局長は溜息のような息を吐きながらそれを一
ブルの上に置いた。

異常なほど白い顔の、白濁した目がぼうっとこちらを見ていた。

「君は信頼に値する人物だといつ前提で、話をして、いいと僕は思
うけれど、」

怖いくらいに真っ白な道化^{ヒロ}が笑う。

「どうですか、羽の生えた猫は。キング？」

白い扉が開かれた。

さて、誇りなど、とうに棄てて仕事に力を注いできたが、そういうえ
ばその『棄てる』ということさえも私の誇りからものだったこと

を思い出した。

『誇り』を『棄てる』ことで、私は『誇り』を持ち、それによつて色々なものをを守つっていたのだ。守りきれる力があることが私の誇りである。

それを思い出した時、少しだけ冷静になつた。

「判りました。しかし・・・・

頭が痛い。

先ほどとは違う意味で。

「これを何と表すか。

「・・・・・途方もないですな」

「ハハハツ」

ピエロは笑う。

「その通り！君、まだ時間はあるだろ？少し話したいんだけれど」

再びこの男と二人きりになつてしまつた上、何やら誘われてしまつたが。

何を話せと。

「説明をお願いしたいですわね」

憮然とエリカが言つた。無表情だ、これは怒つてゐる。

「私達、誰一人そんなお話聞いてないんですけどね」

次に笑顔。

訂正、物凄くいい笑顔。今にも突き刺しそうな。

（・・・・・怒つてゐる）

さすがに刺しはしないだろ？けれど。

（僕は今は止められないし）

目の前にいるのはあの兄弟だ。

（でも僕以外なあ・・・・）

彼女はキレはしないだろ？根つこの方では冷静を保つてゐるはず。

「まあまあまあ、ちょっと落ち着こうぜ、な？」
止めたのは意外な人物だった。

「いつの色の異端者（後書き）

変な友情を育むの巻。

イメージとしてはハマさんとスーさん。

by釣り馬鹿日誌

「いつこ色の異端者

「晴光・・・・・」

キヨッ、とエリカの眉間に皺が寄つた。

「そんな怖い顔してたら話せるモンも話せなグフォアツ

「」のド馬鹿が。空氣読めよ

殴られるのは判つてただろうに、学習した方がいいと思つ。

合掌。

七枚の花弁が扇形に広がつてゐる様にデフォルメされた蓮の花を連想して欲しい。

これが、『本』の一族のシンボルである。この花弁は本の3つの本家と4つの分家を表すものなのだがそれについては割合。さらに、西洋を舞台にした小説のような塔が何本もそびえる赤茶色の城。この城は横から見ると長方形だ。

さて、これが七棟。

上記の本のシンボルマークの蓮の花弁のように並べ、花弁の上端は一階と二階の渡り廊下ですべて糸でつなぐように、花弁の根元、ガクに当たる部分は断ち切るようにくつついてい。

これが物語管理局である。

局は花弁の左端から、

・第四部隊棟

(血の気が多く建物も良く壊すため、端っこになつたとの噂)

・医療・第一部隊棟

(第一部隊は医療・情報収集のサポートのためすぐ出動できるよつ)

(専属の医院完備)

・サポート棟

(食堂・備品室・専属の道具専門師の店)

・本棟・第一部隊棟

(司令塔的な中心施設)

(資料室・非戦等部隊案内部本部)

・育成・第五部隊棟

(研修生の教育施設が中心)

(視聴覚室がある)

・開発・第三部隊棟

(第三部隊は数が多いため)

(余談であるが、それぞれが各自の分野を極めているのでなんとなく雰囲気が異様。第四部隊の次に問題児)

・局員宿舎棟

と、それぞれの特色を生かした構造となつていて。そして僕らが今居るのが、本棟・第一部隊棟。

の、上、に当たる部分。

いつのまにか出来ていた、赤茶の城を10分の1カットしたような建物である。此処まで来ると、もはや外装は施設といつより西洋のお邸風の住居だ。一応渡り廊下は繋がっている。

「これは一応、『第六部隊・特別棟』となるらしい。

「話もなしに異動? 私達一応第三部隊に異動が内定してたはずよ。曙光にいたつては一年前に第五部隊から第四に異動したばかりでし

「う
よ

その通りだ。僕らは、とういうかエリカは、剣術と魔法での幅広い戦闘方法で、研修生の頃からその話が来ていたのである。

「それについては後に話があると思います」

ビス＝ケイリスクが感情を滲ませず淡々と言つ。

「でも『新人育成のため』なんて不愉快だわ。低く評価されている気がして」ちらりとエリカは晴光を見た。

ここで誤解しないで欲しい。

エリカは晴光達のことを言つている。

ファンちゃんはこの年で人間の体についてはスペシャリストだし、僕らは手合させで晴光に勝つたことが無い。

ただ彼らは突然的な事態に弱いだけだ。団体の中においてもどうしても前に出る事が出来ない。致命的だが、それだけで彼らの評価は物凄く低く付けられている。

しかしエリカの中でその評価は不服なのだ。『底力出せばいいのに』手合させ後のエリカの口癖である。

（・・・判りにくいなあ）

要するに友として心配しているのだ、コレは。

晴光はエリカの横顔を見て小さく『お手上げ』のポーズをした。

「ひとつ色の異端者（後書き）

シンティレHリカ判りにくじテレ。

「うつじ色の異端者」

「あ、じゃあさじやあさ、そーいえば聞きたい事あつたんだけどさア、オレ」

「何よ」

「弟さんつて実年齢何歳なのかなー・・・とかなんて晴光は苦笑いで頭をかく。

「・・・・・・・・」

「ええ！？何、聞いたちや駄目だつた！？」

ケイリスク兄弟はなんとも微妙な間を置いて顔を見合せた。

「え、何、弟さんつて」

「え？そこ？兄弟の弟の方だから」

「いやあそれはそつなんだけど、え？じゃあ何？俺は兄さん？」

(あにさんつて何だ)

「いやいやそこはじやあ、【おにいさん】、で！」

(何かズれてる？)

「・・・・・天然？」

エリカがぽつりと言つ。

【天然】なるほどそれだ。

「自分は今年で19になります」

『19！？』

綺麗にエリカと晴光の声が揃つた。

「予想以上に・・・・・」

「やっぱ変化症スか」

(変化症・・・・)

だとしたら、かなりの重度だらう。7歳は若返つてゐるのだから。

「・・・・・ 晴光君つて、変化症知つてたんだ・・・・・」
ファンちゃんが呟いた。

「えええ！――？そりやオレだつて知つてゐるの――それくらい――職業病なんだから知らないと逆に駄目だと想つよ、ファンちゃん。

変化症とは、上の通り夢人含めた、異世界をわたる者すべてに起る可能性のある現象である。

世界を渡るときにその世界に適合しそうと起るるもので、症状は人によつて様々。それによつて対処法はほとんど無い。晴光が前に会つた、憑依型というのも症例の一部だ。

「髪とか眼も、つてことは?」

「これはもともと」

「田といえば、そのアイマスクでビデオ見てるんスか?」

「うーん・・・企業秘密。あえて言つなら心の田?」

「心眼!?」

(凄い、仲良くなつてゐる・・・・・)

「さすが^{バカのカラスマ}晴光。アレ三ヶ月前のことなんて忘れてるんじやない?」

「そうかも。

「いやいやいや、でもさすがの晴光も・・・・・」

「ていうか、馬鹿と天然が会話してると何か居た堪れなくなつてくるわ」

「話は吹つ飛び、晴光は犬の視力がなんとか言つてゐる。いや晴光だつて考えて・・・・・」

「犬といえば、林檎の種が

」

「・・・・・居た堪れない以上に切なくなってきたわ」

「林檎は何処からきたんだろう」

「・・・・・犬が咥えてきたんじゃない?」

「フォローしきれません。」

うつし色の異端者

「白い道を、白い髪を翻してゆつたりと進む。

「あの子は当たり前を当たり前と思わない」

閉じた眼の奥が鈍い色を跳ね返した。

「それは利点でもあり、致命的な欠点だ」

その瞳は光を通さない。

「自分にはそれがほとんど無いと、とっくに失つたものだと、残つたのは僅かばかりだと思っている」

唐突に白い道が色溢れる道に、否、廊下だ。廊下の濃紺の絨毯を踏んだ。

そこで始めて彼は壁に手を付き、辺りを詮索しながらも再び迷いなく歩き出す。

「それであそこまで育つことができたのは、ひとえに一番近い、あの子の存在か」

彼の髪の色はもう白ではなかった。

手をつく壁と、濃紺の絨毯、壁にかかった時計、その秒針にいたるまでの色を、歪み濁つた鏡のように映し出す。

「……………」しかしあの子の声は耳に心地いい。よく似ているよ・・・

・そうは思わないか？我が愛し子よ

頬と瞼に封をするように、結ばれた赤の線を歪ませて彼はほほ笑んだ。

あたかも道化のよう^{ヒロ}。

「・・・・遅いですね」

「おっと端に立っているだけだった彼の声を耳が拾つた。

「あ、そうだねえ」

先程まで晴光と、作物の品種改良について語り合つていた（そこまでの経緯は割合）、兄がこちらを向く。

「え、今つて誰かを待つてたんスか？」

「うん一応ね 頬合わせもあつたけど、そっちが本題。詳しい説明はその人が」

「・・・・さつきチラッと見たけど、ここ^{ナツチ}給湯室あつたわよ、お茶でも淹れる？

「勝手に使つていいですよね」

エリカがビス＝ケイリスクの方を振り返つて聞いた。彼は少し考え「大丈夫でしょう。ここは第六部隊専用ですし

「ですよね」

「じゃあ僕、手伝つよ」

「当たり前でしょ、私下手だもの」

エリカの後ろについて部屋を出た。

「

「・・・・エリカは、もう第六部隊になつてもいいつて思つてゐるんだね」

二ルは单刀直入に切り出した。怒つてゐるのかと思ひきや、その顔は薄く笑つてゐる。

「だつてあんな大々的に発表されたのよ？ むしろ断つた方が

後で周りが五月蠅いわ」

手袋を外した手でカップを並べながらエリカも少し笑つた。」

もともと、第三か第一で迷つてたんだもの。第三を選んだのは、生真面目でおとなしい第一よりも、淡々と自己流で突き進む第三の方が面白そうだったからよ

でも、ヒエリカは繋いだ。

「でも、第三はあの人数で基本は単独行動のくせして、それぞれの好奇心が半端ないのよね。うつとおしい事になるのなら新設部隊の少ない人数の中、頑張った方が得策じゃない?もちろんアンタが嫌つて言うなら他も考えるけど、まあ言わないだろ?」
背を向けて火の前に立つニルの後姿を一瞥する。

「ヒエリカがそう言つたら言わないよ」
笑いを含んだ声で、彼は言つた。

「いつの異端者

力チャ力チャ磁氣を鳴らしながら盆を運ぶ。一つの盆に分けたのでは大した重さはない。しかしどいつやつもその音は、足を運ぶたびによくその場によく響いた。

「あら？」

「どうしたの？」

エリカは玄関前のホールで足を止める。

「こんなところに螺旋階段なんてあつたかしら」

「えへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ................................................................

左上に視線を上げる。

「・・・・・あつたんじやないかな？ 気付かなかつただけで」

内装・外装に忠実な、金色の手すりの立派な螺旋階段だ。床と同じ濃紺の絨毯が敷かれている。

しかし、局の本館と揃いのそれは、この10分の1も無い建物のサイズには到底不釣合い、場違いな代物だ。

「・・・・・もう普通の階段でいいじゃん、つて思うんだけど」

「それは言つちやあ駄目でしょう。お茶が冷めちゃうわ、行きましょ」

大きく湾曲して螺旋階段を避けながら前を過ぎる。

（ 激しく邪魔だ・・・・・つ！ ）

局の予算はどうなつているんだろ？、ヒールは遠い田で無駄に煌びやかなそれから田をそらした。

きしつ

足音だ。

条件反射で二人は足を止め、エントランスの上を見上げる。

わしづか、わしづか、

わしづ

「やあやあ相達つー！」

ペロロが両手を広げて立っていた。

「おっそかつたですねー局長」

「急な来客があつたのさ。文句は彼に言つてくれたまへ」
ちやらけた雰囲気の最高責任者は床に届くほどあるだらう髪を肩ほどで輪にして纏め、詰襟の夢人の制服に少し似た白いコート型の制服を纏つた手でカップを持つ。

声も高めで見るからに優男だが、ひょろりと身長は高く華奢ではなく、耳蓋の上から頬まで一直線に封をする赤い線を歪ませて、しゃらりと鳴る細い鎖で繋がれた額の飾りを揺らして首を傾げ、見えない目で周りを見渡し満足げに微笑んだ。

「まずは自己紹介をしてくれないかね。ボクは見ての通り、目が見えないもんで」

先ほどから身動きもしないファンを除いて、それぞれ顔を見合せれる。

局長は高らかに手を叩いた。「よしー！」

「じゃあオーソドックスに右から時計回りに、名前と所属どじ趣味と生年月日、血液型と戦闘スタイル、好きなもの嫌いなもののタイプなんかをチャチャツとー！」

その場の心が一つになつた。

(お見合い・・・・?)

うつし色の異端者（後書き）

大暴走。

「うつし色の異端者」

「さあて、とまあ、冗談は此処までとして」
(「冗談だつたのか……」)

「君達の事はよおしく、知つてゐるからね。新設第六特別部隊、説明会を実施しましようか」

ねつ、とミニアノ局長は語尾にハートマークをつけて小首をかしげた。

(男が小首かしげるつて……)

(大丈夫なのかなこの人)

(局長自らこんなところに来ていいんでしょうか)

(笑)

(仕事は……)

(この人もしかして暇なのかしら)

それぞれ思いは様々である。

彼女は目を伏せた。磁器の中の赤い紅茶がくるりと輪を描く。白い顔に、真っ赤な目の中の奥ばかりがチラチラと光り、黒髪の間から覗いて見えた。

「これは私の我侭ね」

「はい！ちゅうもーくつ」

彼は一度だけ大きく拍手を叩いた。

「知つてのとおり、ボクはこの物語管理局長、ロメロです。

表向きは『さらなる優秀な新人発掘』なんてなつてたりなんかしちやうんですが、第六部隊は正式名称を『調整部第六特別部隊』。つまりボク直属の、『ボク』の声を一番聞いて貰う重要な部隊になります。そこんとこよろしく」

「直属・・・・・？」

「重要！？」

「・・・・・」

エリカの目が細くなり、晴光の眉が情けなく下がつた。ビスはこつそりと米神を揉む。

「そう、重要な、組織になる。」これからね

「具体的な活動は？」

「いい質問だ、エリカ嬢。後ろを見て」

ミアノ局長は無造作に腕を振つて弧を描いた。照明が落とされる。

淡い色の壁をスクリーンにして、画が浮かび上がつた。

「・・・・・これは？」「大切なものだよ、よく覚えておいて。見て損は無い。知識は必要だ」

青白くそれぞれの顔が暗い室内で照らされる。

晴光は自分の正面に座っていた局長を振り返つた。「ちゃんと見て

IRREGULARS

「いいかい？君達は知つておかなくてはならない。意味はすぐに分かるはずだ。もしかしたらすでに分かってるかな？」

滑り落ちる。

音を立てて割れた中身は深紅の絨毯に染み込み、そこだけ色を変えた。

「私はここについてはいけないのですよね」

窓の外は濃紺に浮かぶ丸が一つ。

「戻る事ができたなら、」

「探すのは三つ、もう、この三つだ」

「…………表向きは、って、そういうことですか
鹿げてる。俺等に出来るわけが無いでしょう」

「ステイールが『ぐりと喉を鳴らした。』

「無理です。途方も無い」

「いや。大丈夫だから君達なんだ」

探すのは三つ、ネオイロサー

馬

“夢”だ

ネオイロサー

ビスは前を歩く兄に気付かれないよう、じつそりと息を吐いた。

彼は苦手だ。

これから直属の上司となる人であり、何より最高責任者でもあり、恐らく隊長である自分は他の隊員以上に接する事も多いだろうと思う。

何故彼が、第五部隊の末端で、何年も上にいげず詰まってしまっている自分などを名指しで指名してきたのかは分からぬ。が、彼は自分なら出来ると、そう言い切つた。

自分でなければ駄目なのだと。

よくよく聞いていれば、自分の部下になる他隊員も彼自身が直々に同じ理由で選んだらしい。

彼らとは接点も何も無い。クロックフォード嬢とは同じ第五部隊という事だが、そもそも第五部隊とは研修が終わつた新入隊員が最初に必ず入隊する部隊だ、そう考えれば一年前に第四部隊に異動した周少年も同じ事が言えるが、それは他大勢の隊員も同じ。大した共通点ではない。

そもそも、彼とは付き合いだけで言えば長いのだ。なにせ、名前を借りただけとはいえ後継人だつた時もあつたのだから。

それは両親が亡くなる12の秋から、自分が『本の国』での一応は成人と認められる1-3の正月までの約半年だつたが。彼はある意味での自分達との同種である。

『本』との掛け合い、他種族との間にこの地に生れ落ちた人間だ。それは兄と自分と彼、表に出て生活しているのは恐らく自分達三人のみであろうという。それを抜かしても彼は最も有名な本の一族の血を引くハーフである。

おんとし約700歳。

パートナーを持たない夢人であり本でもあり、長年の功績と人柄で

盲目というハンデを超えて物語管理局の母体、異世界管理局本部の幹部から再び物語管理局の局長に就任。

『有り余る時間の人』。

彼はたぶん、その時間を数少ない同胞に少し分け与えた、それだけなのだろう。かれの行楽趣味は有名だ。

では今は？

本の一族の『色』に白色が無いのは何故か。
それは白が禁忌の色だから。

禁忌の子供はどこにも居ない。純白は色をつりし、その存在をこの世から消すのだ。

本の血は濃く、染まらない。

しかし強すぎる色はあるべき色を濁らせる。あるべき形を描けない。ゆっくりと、時間をかけて白は景色に溶け込んでいく。じわじわと真綿で締めるように、気紛れにそれに針金を混ぜてみたりもしながら、半分流れる強い血は、少しずつ少しずつ肉を絶つていく。

彼の盲目もそのためだという。

人は目で理解する生き物だから。

それでもそれだけで済んでいるのは、ひとえに世界を渡るという順応に優れた異端者の血だ。彼は死を逃した変わりに生を得た。

自分にも異端者の血は流れている。力があるのだから、兄以上に自分はその血が濃いだろう。

母似の自分にそれがあり、父似の兄に強い本の血が出たのは皮肉としか言えないのではないか。兄は自分の性質はどこまでも父の方だと言つけれど、それをいうなら兄のほうも母の性質そのままだ。しかしそんなところまで似なくてもいいのにと思つ。

知らず知らずに息を吐く。

時と共に進行する血の束縛から逃れるために子供の姿をとつて。
その血が濃く影響する父から貰つた一対と無い目を封じて。
父の目の力が特殊であつた事は幸いといつべきか、感謝するべきか、
はたまた恨むべきか。

夢人になつたのは両親の力を誇るべきものと思つたから。

それは力があると分かつた1-2の時、それはこの姿と同じく違わない。

今回のこと、承諾したのはもしかしたら無意識にその誓いがあつたからではないかと思うのだ。

チャンスなのかもしれない。

金色の左を少しあけてみて、この姿だと大きく見える兄の背を追つた。

好ましいと言える未来が見えればいい。

大人になるということに理由は必要なのでしょうか
大人になるにはどうすればいいのでしょうか

早く大人になりたいと思いました
他の子よりは大人だと思いました
でも平均値では足りないのです

全体を見ればもつとすばらしく大人な人は星の数ほどいるのです
大人とはなんでしょう

人生つてなんてめんどくさい

あるとき誰よりも大人になれる人に出会いました。
その人は子供に甘えることの出来る大人でした

甘えを知らない人でした
甘える事が上手な人でした

俺は、俺の世界の扉が開くのを感じました。
知っていますか？

大人になるつて、変わらない幸せを作ることが出来るということなんですよ。

愛しいと思つた。

何よりも守りたいと思つた。
結果的に言えば無理だった。

遅すぎた。

あの人は『それでいい』と泣き笑いの顔で言つ。

『このままでいいの』

『このままがいいの』

初めてあの人達が自分に頭を下げた。

『守るなら、今を守つて』

『私の今を』

『あの人達の今を』

でもそこには、僕は居ないじゃないか。

ふざけるな

ふざけるな！

ふざけるな！

『また来るよ』

全部押し殺し、再会を誓つ。

遅すぎた。

見つけるのが遅すぎた。

繰り返し繰り返し、同じ時をもう一度再生できたらいいのにと思つた。

（無理だよ僕には）

彼女の前でそんな情けない事は言えなかつた。
次だ。

次ならきっと。

真っ赤な丸いボタンを押す。

リセットされたら、また迎えに行きます。

今度は誰よりも早く。
今度は君の来る道に。

今度は僕が待つてます。

来る～
あつと来る～

【エリカ＝クロックフォードについて】

・物凄く頭いい娘。凄い空気読むし。結構横着で豪快だけど、いつも見た目だけは何があつてもきちんとしてる。薬作ってるときはエリカは魔法薬の調合が趣味で 普段より5割り増しで几帳面。

・エリカは美少女で常識あるんだけどなんかたまーに変だよな。なんか抜けてるつていうか。人のこといえないと思う。でも完璧にこなそうとするから、凄いと思う。でも女王様でどう。

・お姉さんつて感じ。緊張とか、しないのかなーと思つたり。いつも堂々としてて。

・女の子には嫌われるタイプじゃないかな?何か第一印象で誤解されそう。将来有望。

・これから頑張ろうと思ひます。

【ニルについて】

・自分の努力を表に出したがらない。
縁の下の力持ち。

普通だと思ってるかもしれないけど、それが実は つてことが良くある。

よく気がつく人。

・ニルはお兄さんのこと、天然だつて言つてたけど、あれ人のこといえねーかんな、アレも相当天然?無自覚?だし。優しいんだよなー。でもその優しいのがたまに変な感じでやってくるから、オイオ

イつてなる。

- ・優しい頼りになるお兄ちゃん。

- ・気の利く子。エリカちゃんもだけど、頭いい。ちなみにあの二人つて付き合ってるの？

- ・これから頑張るうと思思います。

【晴光＝周について】

- ・猪突猛進馬鹿。

最後の詰めが甘い。

- ・明るく元気で誰かのために頑張るうとする人。馬鹿だ馬鹿だつて言つけど、いうほど馬鹿じやないのかも。たまに、もうちょっと頑張ればいいのにって思つときがある。

- ・明るくて優しい人。いつも元気で、ちょっとプレッシャーに弱い。

- ・明るく元気。誰からも愛される。

- ・背が高い。

【ファンについて】

- ・可愛い妹分。
- ・守りたい感じ。純粋。

- ・優しい子。意外にやううと思つたらことんやる行動派。

- ・ファンは、妹？かわいいなーと思つ。優しいんだよなアレ。パニ

くると止まないけど。

・可愛い子。純粋。

・これから頑張るうと思います。

- 【ステイール＝ケイリスクについて】
- ・第一印象は怪しい人。
 - ・弟と仲がいい。

天然。

・天然？ビックリする事をいきなり言いつ。

・お兄さんは面白い人。ちょっと変だけど。

・・・・・変な人？

・大雑把なのに変な拘りがあります。

- 【ビス＝ケイリスクについて】

・無表情。

何を考えているのかわからない。

・淡々とした人。

・小さい。何考えてんのかわからない。

・無表情でちょっと怖い。

・見た目母・中身父。母ほど無表情ではないので、結構分かりやす

い。律儀すぎ? もつ少し適当にやつてもいいのと思つくりに努力家。何事にも丁寧。度胸は据わつてゐる。

以上が、任務先にて新設第六部隊員全員に配られた冊子の一部の内容である。

顔合わせのすぐ後のこと。

第六部隊全員にアンケートが実施されたのだ。内容は【他隊員の印象について】。

担当者へのほぼ口頭での回答であり、もちろん義務的にこなす事務員のような黒縁眼鏡の担当者とは仕切り越しで、ほとんど顔を会わせることなく、匿名で、内容は本人含め他には一切漏らさない事は約束されていた。それがアンケートと言うものだらば。

が、

「何も初任務先でバラすことないじゃねえかよあのクソ馬鹿上司いいいいいい」

一息に空に向かつて叫び、さめざめと抱えた膝を涙で濡らす。

晴光は背中に向けられる視線に唇をかんで耐えた。「へー私のことそう思つてたんだ。ふうーん?」視線はそういうつていて主張するが、本人は冊子に目が釘付けで特に気にした様子も無いのが現状である。

「プライバシーも何もあつたもんじゃないわね。一応匿名だけど」

「一応匿名だけど、全文そつくりそのままだと言葉使いで誰が誰だかわかつちゃうよね」

「・・・・まさか任務内容にこんなのが紛れ込んでるなんて・・・・

「愉快犯だぜ絶対! !」

「・・・・・本当に『一応』匿名ですよね」

「(ビス涙目になつてゐる) こんなに感情表現豊かな子なのに・・・・

「

一番の被害者はこの兄弟だ。

プライベートで仲のいい他四人と違い、この二人はほぼ第一印象のみの言葉である。

「俺なんてほほ『怪しい』『天然』だもんねーアッハッハ
しかしビスにいたつては『無表情』『何を考えているのかわからぬ
い』、その上『怖い』。

「・・・・・これから頑張ります」

誰も聞いていないながらも、彼は尻すぼみの蚊のなくような声で誓
つた。

「ご協力感謝いたします」

代表のビスの言葉に、他五人も続けて頭を下げた。

襖で仕切られた部屋がどこまでも続いているのではと錯覚するよ
うな広間である。焚かれた香と畳の青い香りが爽やかに漂つている。

「そんないご丁寧に。いくらでも滞在していいくださいね」

高く一つに纏めた赤銅色の髪を肩から滑らせ、家主は三つ指をつい
て相手に釣られる様に頭を下げた。

「改めまして私、この妖異再教育学校学級長、学園長代理、雪女と

わたくし

申します

顔を上げ、漆黒の濡れた眼を細めて見せる。

「この度はようこそいらっしゃいました。生徒一同、誠心誠意の助
力を約束いたします」

薄墨の黒子（後書き）

作品紹介

『妖再教育処／大木 やすき』

妖怪コメディファンタジー小説。

時間と共に世界の隅の影へ追いやられた異形達。その衰退はその能力までにも及んでいた。

時代背景不明だが、教師の一人（唯一の人間側で実習担当）である幽靈が、セーラー服で人工色の髪の女子高生であること、彼女の言動から限りなく現代に近いと思われる。

雪女

赤銅色の長い髪に黒目がちの漆黒の眼の美人。学級長であり、土地提供者。一応家主。

半妖で力のコントロールが苦手だが、ここでは主席。人（男）の生氣をすう事を極端に嫌がる。約500歳。

死神

隻眼の少女。感情が極端に欠如しているため、自主性と協調性を育てるために送り込まれた。足は義足で、物体の束縛を受けないため壁を通り抜けられる。

宇宙人

留学生。螢光ピンクの髪に螢光緑の眼。カタコトでだいたい五月蠅い。

人魚

童女の姿をした教師。雪女の後見人。雪女を飾り付ける事に力を注

ぐ。

設定は『異世界管理局情報部』（ネタバレ注意）にむかって詳しく
加筆しています。

「まず、私たちは現代化による能力低下等の理由からそれぞれの一種族としての役割を果たせない、そんな妖モノ達を再教育する組織です。おわかりですね？」

「一応は。資料はありますので」

「それならご存知かもしませんが、この学園の近くに、異形だけが住む街があるんです。調査ならそこが最適でしょう。なにせ世界最大の妖モノの都ですから」

「す つつつごい美人。なにあれ、同じ人間？」

「人間ではないよ。雪女だから」

襖の前で顔を赤くする晴光にニールが突っ込んだ。
中では今だ、ビスが隊長として雪女と会議中である。
「話し聞いてたの？アンタ」

「ああいうのがよーえんつていうんだよな～」

「晴光くん・・・」

はしゃぐ晴光に女子陣から白い眼が向けられるが、気にせず締りの無い顔で晴光は続ける。

「お兄さんどう思います？」

「俺もうちょっと手が届くくらいの子がいいかな、美人過ぎてオーラに負けそう」

「ニールは？」

「ええ僕！？・・・うーん」

「何本気で悩んでんのよアンタらは」

後ろの襖がからりと開いて、咳く声が割り込んだ。

「何やつてるんですか」

ひらひら揺れる袂を抑えながらエリカは溜息をついた。
ここで6人が着ているのは着物である。例の如く現地調達のそれは、
学園の妖達が用意したものだ。それぞれ適当なものを選んで纏つ
ている。

辺りには、動物の体に同じような着物を不恰好に着ているものや、
霞のような何か、道具がひとりでに軋む音を立てながら歩いている
ものさえが、二足歩行に特化していない体をぐねぐねと動かして歩
いていた。。

「人間の格好した人はいないんですね」
気持ち悪い、とはあえて言わない。

「人に化けるのは技術と集中力と体力がいるんで日常生活ではしま
せんね。学園では一番最初に徹底的に練習して常時するように義務
付けられてますが」

慣れると動きやすいですし便利ですよ、と言つのは波打つ重い灰色
の髪の童女だ。黒く塗りつぶされた瞳で見上げる彼女は、教師の一
人、人魚である。

「私のように、元から人型だったり、変化が得意な狐とか猫とかの
種ならラッキーなんですけれど、中にはなかなか つていう子
もいます。そういう子ほど、コツを掴めば上手くいくのですけれ
ど。まあ、自転車のようなものですね」ふう、と彼女は頬に手を当
ててため息をついた。

「でも・・・失礼ですけれど、私にはあまり人に埋没できるよう
には思えないんですけど・・・霧囲気が違いますよね」

霧囲気といつても、言葉で説明しがたい違和感のようなものだ。

「あら。お気づきになつて？貴女もしかして、こちら側の方かしら」

「半分くらいは。魔女の生まれなんです」

「あら。あらあらあらあら！……」

ぱつ、と人魚の頬が染まつた。熱を抑えるように頬に再び手が宛がわれる。

「こちらで魔女は貴重種です！まあ・・・・・何百年ぶりかしら・・・魔女なんて。なるほど人間にしてはいい魂だと思つてましたの！」まあとつても綺麗！！

ヒクリと全員の顔が引きつる。

スイッチが入つたかのように、彼女は浅く息を吐き出しながら捲し立てた。

「『本』の皆さまもさすが貴重種中の貴重種だけあってとつても！そちらの御兄弟は混血ですわねつ！…あらでも何か

「俺完璧ムシられてるよな？」晴光が自分を指す。

「あらあ

「

「どうされたなんですか？」

ビスが首をかしげた。その顔を人魚はじつと身じろぎもせずに凝視する。

「白い髪は混血の証・・・・・・いえ、ちょっとじめんあそばせ…」長い爪の手がビスの腕を掴む。そのまま鼻先が付くほど顔を近づけ、癖の強い右目を隠す前髪をもがくビスを押さえつけて捲つた。

「やつぱり

「…！」

「あつ

「ちょっと！…！」

ステイールが人魚を突き飛ばし、庇つよつてビスの前に立つ。

「隊長！？」

往来で、ビスは膝から崩れ落ちるように地に伏せた。

「ビスッ！」

見えたのは

「御用は何か」

凛とした声が座敷に響いた。「参られよ」

「お気づきになられましたか」

黒い浴衣の子供である。裾からにかけて色抜きしてある着物の袖から、細い手首が露出し、肩にかかるぬばたまの頭には不釣合いな大きいキャスケットが被さっていた。そして顔には

「犬の面が何の様か」

「報告を、と思いまして」

赤く隈取りした白い笑ったように見える顔の下で、漏れるような笑いを含んだ声が聞こえる。

「お気づきになられましたか」面はもつ一度言つた。

「何を」

「あの一人」「一人?」

「今日きなさつた兄弟ですよ、」その下で、面を被つた子供はうつそりと笑う。

「あれは『片翼』の縁者でしじう?」

雪女の肩が強張つた。

「何を・・・・・」

「あれは最後のつがいの子供です

「何?」

「忘れては居ませんよね? 珠姫?」

刹那、

腕が振るわれた。先は嘲笑を浮かべるあの犬の顔である。赤銅色の髪が後を引く。「何故その名を知っている」

氷の刃がその細い首に宛がわれた。

「冷たいなあ・・・・では何と呼べと言つのですか?・・・・昭珠郎とでも?」

「黙れ。その名を呼ぶな。首が飛ぶぞ」

「人生の無職にはなりたくありませんのでね。雪女さん」

「よし。顔を」

「それは『勘弁を』

自然にそれぞれが身を引いた。一足ほど離れて向かい合つ。雪女の手からも武器は消えた。

静かに犬は膝をつく。

「絶対にお忘れになりませんよ!」。そして必ず守つて貰ださるよう

「う

先ほど雪女がしたように、犬の面は指を突いて頭を下げた。

「お願いいたします。より正しい筋書きを紡ぐために」

「あたしは いえ、俺は、とある方の替わりとして、筋書きを正しく導くように今此処に参上いたしました。これは俺が此処にいるための義務。彼女の場所に居る俺が、俺として居るためにどうしてもやらなければならない。」

すべての後は、俺のことは忘れてくださいって結構です」

「・・・・・まるで死に行くようだね」

少し悩んでから、雪女は思った事をそのまま口に出した。雰囲気で、子供が微笑むのが分かる。

「別にそういうつもりじゃアねーですよ。俺は回りをつけ、お膳立てをしてやるだけですから」

「何がために？」
「シアワセ幸福のために」

「なんてことをしてくれたんだアンタは 」
ファンは、この人の目が隠れていてよかつたと心から思った。
学園に運び込まれた第六部隊隊長は青白い顔で、今現在目の前で治療を受けている。

その兄であるステイールは名前の通り

鋼の刃を思わせる、普

段のはしゃいだ子供のような雰囲気を一掃した様子で、人魚を上から見下していた。

「・・・・心より謝罪いたします。その・・・・我を失つてしまいまして・・・・」

人魚も青い顔でうろうろと視線を彷徨わせる。

「でもまさか・・・・いえ」

「何だよ？」

今の彼なら、本当に視線で人を殺せそうだ。

「いいえ・・・・まさか、そんな・・・・えっと、制御が出来ていないと私は思いましたの。・・・・不羨かもしませんが、貴方のその眼のもの、それも制御なのかしら？」

これ見よがしなわざとらしい大きな溜息に、ファンをはじめ、他隊員の肩までが大きく跳ねた。「本当に不羨な質問だ。ああそうだよ。これは俺等の本の『血』を制御するものだ。それが何か？」

「い、いえ・・・・」

ちらりと彼女はスティールの斜め後ろに待機している隊員に視線を送る。

無理だ。

眼が合つてしまつたファンはふるふると何度も首を振つた。晴光も青い顔で顎を引く。

彼女が何を仕出かしてしまつたのかは分からぬが、彼の激怒振りに助けるその気も起きない。

「なら聞くけど、アンタは何年生きてる？　女性に年を聞くのは云々っていうのは聞かないよ、アンタは何歳？」

「え、ええ・・・・」

うつすら口元に笑みを浮かべて見せた彼に、人魚が一步、後退した。壁に手の平が届いた。

「な、七百年ほど・・・・」

「もつと細く」

「数えて七百五十と八ほどです！」

「 アンタは本当何てことをしてくれたんだ・・・」

吐く息と共に、スティールはその場に膝をつく。

のろのろと彼は頭を抱えた。

「 ッヒに、ビスに万が一があつたら父さん達に何ていえば・・・

・・

その声は確かに水を含んでいた。

「そんなん言わんでも大丈夫ですよ。ただの過労と精神疲労です。気にせんときイナ」

ビスを診ていた男が振り返り言った。異常なほど色素の薄く、糸のような細い眼の男である。

「いやア～魔女の薬は効きまんな」

「化学療法がありますからね」

「そちらさんも、お手伝い有難うござりますウ」

「い、いえ・・・・」

二ルが控えめに首を振った。顔色が優れないのは、ファン同じくあの光景の方に意識が向いていたからだろうと思つ。

「ではウチはこれにて。寝起きをたたき起されたんでねエ、こちとら夜行性やつちゅうのに」

いいつつ腰を上げる彼は、よくよく見れば着崩れた夜着のままで短い髪も跳ねている。寝癖さえも絵になるのは、此処の学園の人物達が当然揃いも揃つて人からかけ離れているからだ。ファンは大きく開いた服から見える白い胸に、慌てて眼をそらした。

「あら」ピクリ、僅かに聞こえるその音に、彼の耳が動く。

「はあ・・・・」

スタイルルと人魚、二人の特大の安堵の溜息が図らずも重なる。人魚は素早く口を閉じたが、スタイルルは弟の傍らに寄り沿つていて一挙一動を見守る事に忙しい。心配する兄と床につく弟の図に人魚は薄い眉を下げるが、バタバタと大きな音を立てて段々近づいてくる足音に表情を再び硬くした。

すっぴーん

勢い良く跳上がる様に障子が開け放たれる。

「なんて」としゃがつたこのクソババアが

!!

！」

人魚は今度は仁王立ちでその秀麗な顔を憤怒で染め上げた雪女に見下ろされる事となつた。

「テメエ、なんつづもそれだけは、それだけは止めてくれと、私は毎回毎回毎回毎回・・・・・なんでそうなんだ！？我慢・忍耐・無関心！？そういう事態に陥つたらこの三力条を心に刻めと！？いつたよなア！？ああん！？」

「・・・・・」

「それともストレスで布団と親友になるくらい義理子に頭下げされば気が済むと！？！ハツ」

立ち上がると雪女はすらりと背が高かつた。巻き舌と濁音を最大利用してそのハスキーナ声で創り上げた言葉の槍で人魚をメッタ刺しにする。正座で小さくなつて、上から浴びせられる言葉に耐えるだけの彼女に、逃げ道は無いに等しい。「返事はア！？」「ハイごめんなさい！」

しかし先ほどのステイールとの冷戦にくらべればほどかましと言えるだろう。迫力に圧倒はされるも、恐怖は無い。調子に乗つて叱られる母としつかりものの子の姿なのだから。

「あーちょお、もオそれくらいに雪女もしどいたりイヤ。さつきまでそこのオーライちゃんに殺氣ビンビン当たられとつてんで」

「ヨソはヨソー！ウチはウチ！？」お母さんのようなことを言つて雪女は拳を固める。

「ヨソ様に怒られたのならウチでもきみとしないと駄目ー！大体、この三百年間見て来て、狐はコレに甘すぎるー！旧知でいくら可愛がつても見た目がコレでも、コレは養子をとれるほど年の年でぶ

つちやけ婆といつても差し支えない年なんだからていうかアンタが
もつときちゃんと教育してきたらこなことには
「

L

「……『怒られた』んやなくて『殺氣あつた』とひしんで?」

五回へりこねおとへりだるわッ...」

大體

「ちょっと五月蠅いんだけど」

ステイールのそれは、まさに鶴の一聲だつた。

「えー・・・『ホン。すんません

「雪ちゃん、素が出る」

「すいません。お見苦しいところをお見せしてしまって
そそくさと下座に居直つて雪女はわざとらしく言葉を濁す。

「えー・・・あの、はい。先ほどの事はお気になさらず」

狐が親指で笑みを浮かべる雪女を差してにやりと笑つて言つた。

「元ヤンやねんこの子」

「じゃあかしい抜くぞクソジジ　　えー、あー・・・すいません」

雪女は大きく深呼吸し、もう一度だけ誤魔化すよつに咳払いしてす
つ、と顔を上げる。

凛と背を伸ばして真剣な眼をする彼女は、先ほどの様子を忘れるほどで、あまりに別人に見えた。

「続けての無礼をお許しください。気がつかなかつたこちらにも非
がありますが　　そこのお二人は、かたよく片翼の一族の血を引いた方で
すね」

「片翼？」

ステイールは首をかしげ、眉を寄せた。

「なにそれ」

「“眼”をお持ちでしょつ。金色の、光の波紋を描く瞳。総てを見
通す“眼”。貴方のお母様もお持ちになりませんか」

ステイールの指が、布の刺繡を辿つた。「この眼は父から受け継い
だものだ」

「お父上から?」

次は雪女が首をかしげた。

「それは

「片翼は女傑一族ですから男が田を継ぐことは稀ですよ。それがご兄弟にも引き継がれているという事は、ひとえにお母様の本の血のおかげでしょう。ですけれど、神の血を引くといわれる片翼の血はとても強いものですから、増幅剤である半分の本の血は」

「人魚」

咎めるように声を発し、雪女は僅かに身を乗り出す。

「いいえ。これだけは言わせていただきますわよ。あなた方、力の制御が出来ていませんね？わたし私の知識に間違いが無ければ、体もお強いほうではないでしょう。下手をすれば生死にかかるくらい」

「生死？」

小さくニールが呟いた。

「そこまで酷くはありませんよ」

「ビスッ！！おま」半身を起こしたビスは片手で兄を制すると、布団の上に正座をし、人魚に向き直った。

「父は自身の力のことは熟知していました。亡くなる何年も前から息子の力のことを理解し、人体の研究者である母と共に対処法を考え、徹底して叩き込み、その方法を用意してから死にました。今までこうして戦闘部隊に所属してこれたのですから問題はありません。今回は度重なる事に疲労していただけです」

一気に言い切ったビスは問いかけるように静かに人魚を、雪女を見つめた。

弟が起き上がつたことで冷静を取り戻したスティールが同じように二人を見る。人魚の肩がびくりと跳ねた。

「初対面の貴方に心配してもらつたのは有難いよ。礼を言つけどね」「でもそれでは」「…………母さん」

雪女が人魚に声をかけた。拗ねたように唇を尖らせて人魚は黙り込む。

雪女はにっこりと笑いかけた。

「私が参りましたのは、この義理母の事を謝罪するためと、片翼の一族であるかの確認、そしてその場合の此処での対処を考えるためです」

「対処？」

「ええ。あなた方が片翼という特殊な存在である以上

「

雪女の笑みが深くなつた。

「(イ)兄弟を軟禁します」

「え、でも」

「でも、じゃありませんよ隊長さん。存じ上げないようですが、人でありながら神の力を持つという片翼は以外に有名な一族で、知る人ぞ知るといふんでしょうが。それに選ばれれば大変な加護を得る事ができます。貴方、往来で倒れましたでしょ？」

「調査、」

「捕まつて骨までしゃぶられ、出汁まで摑られます。文字通り何もかもを力を得るために飼い殺しにされて搾り取られるつつ拳句に権力者への献上品もしくは取引の道具。・・・見目も可憐らしいですから慰みもののお人形にもされるやも」

晴光がエリカの傍まで這つて行つて袖を引いた。

「ちょ、慰みモノつて？」

「の×××で つてことよ」

「ちょッ エリカッ」

そんな率直な！ニルが小声で叫ぶように言つ。

「・・・うわお」

晴光は赤い頬を押さえた。

ビスは食い下がる。

「ですが、自分は隊長を任命された身です。その責任が」

「あなた方は本当に片翼のことをまるで知らない。いいですか、片翼とは人を惑わす人型の異能の部類に振り分けられます。極論で言えば代表として淫魔、セイレーンなどの人魚の一族もその血を汲んでいます。男を誘い生氣を食らつ、私達雪女の一族もそうです。災厄あるいは加護という極端な力を持ち、超貴重な絶滅危惧種、人に

交わり、纖細ながら、数世代その特性を受け継ぐことが出来る古来の祖の血。食らえば不老不死と力を約束される面では『本』の一族にも最も近いはず！

バンッ

雪女は置が跳ねるほど拳を叩きつけた。もう笑みは浮かんでいない。

「『』自身の状況がお分かりですかッ！？』

「…………」

ビスは熱気に押され、やや仰け反りながら唇を結ぶ。ややつて、ビスは背後からこちらの様子を窺っている自身の部下を振り返った。さつと、それぞれの顔を流し見た。

「…………すみません」

数秒の沈黙の後の言葉に、ちらりと四人は目を見合わせる。
「後はよろしくお願ひします」

俺は舗装もされていない砂色（まんまだ）の道をふらふらと別に何かぶら下がつていいわけではない。断じて。ようするに歩き回っていた。別に徘徊とかうん、そんな不審者的な、ヘタしたら変質者的なアレじゃない。客観的に見たらどうかはまったくもつてわからんが、いやだつて俺から見れば全部主観になっちゃうし、とかもうなんかもうめんどくさくなってきた。

ようするに俺は不審者じゃない。くくら黒い着物にお面姿でふらふらしてようが違う。

真の不審者もとい変質者というものは某ほつぷすてつぶな少年週刊誌連載の某狩人漫画に出てくるアレとかコレとかいう方だと俺は信じている。ショタでマゾでロリでサドでストーカーつてもうあれは変質者の神だ。富先生愛してる。貴方こそ神。あれ、いやでも作者さんが神ならその子供である某変質者はなんだろう。え、神の子は神？ あなるほど。ゼウスとその子供たち的なね、あなるほどね。ていうか最高神つて女遊び激しいよね。何も鳥になつてまで女追いかけて孕ませなくてもいいじゃんね。あほじやね、そんなだからアントの子ろくでもないのばっかりなんだよ。どいつもこいつも神話になつちゃつてもう社会現象どころじゃない。

いつのまにやら最高神のイケイケぶりについての考察になつてたりなんかしていたが、ていうか謎だ。

わからん。人間の思考つて凄い。つーか俺の脳がすげえパネエ。

俺ここまでくると実は天才じゃね？ くらいは思えてきたり。わんだほー俺さいこーモモタロ にも負けないかもよひゅーひゅー

・・・・・嗚呼、ツツコミが無いってなんて辛い。

なんで人は人の心が分からぬんだろう・・・・・ちょ、そこの人

俺にガン飛ばすんなら俺の後ろの方にしてくださいよ。馬鹿じゃね、
ターゲットロックオン？げつちゅーってか、俺自分で壱のりのもなん
だけど、俺百害なくて一億害くらいはキヤツチャーターミシード真
ん中でカーブ描きながら投げられる自信あるぜ凄くね。

俺はアンタにキヨウミなんてこれっぽっちもありませんよー見てる
のはアナタの頭の後ろってかアナタは存在しないもの的な感じで見
てるんですよー存在すらも俺は認知してないんですよー・・・・・
みたいな感じで睨んでみる。

いやーハツハツハツ。

勝った。（ガツツポーズ）

しかしなんだろ？、この達成感の無さ。ガツツポーズしてみてから
言つのもなんだ、俺アホの子みたい。

『変人』みたいな目で見られるのはアレ、ちょっと嬉しいかもヽだ
が、可哀想な人を見る眼で見られるのは侵害、違う心外だ。

日本語つて奥が深い。

言葉つて難しい。

つーかこれもある意味異文化コミュニケーション？

別に俺はいつも常時こんなことを考えて歩いてるわけではない。
今回はたまたまである。

『たまたま』そういう気分で。あれ、連呼すると俺さらに危ない感じ？

いや、うん。ちゃんと主張とこつか、やらなきゃいけないこ
とというか、ちゃんとあるんだからね、うん。

とりあえず俺は見つけた。

いわゆる、『趣向』違つ『主旨』、もしくは『やらなきゃいけないこと』、もしくは『理由』、もしくは『目的』。

ていうかここまで1292文字とか恐ろしい事になつてんだけだ。あ、1323文字に増えた。

ターゲットロックオン！

めんどくさい事この上ないけど頑張りましょう。うん俺偉いよ。ちなみに『雑森』って聞いて某卵で切り札なツンデレ小学生と、某青春年の差失恋な死神副隊長と、どっちが頭に浮かぶかってあれだよね、『桃』って言つつもりが『あむ』って言つちゃうんだよねアレ。もはや条件反射だよね。

あれ、ここまで俺の読書ジャンル丸分かりじゃね。まじかよおい個人情報流出しまくりじゃねーか。まあいいけど。

ちなみに今まで1545文字である。俺何気に凄くねーですか、てんちよー。

「良かつたの？ファンちゃん置いてきて」

慣れない草履とその中に入り込む小石に苦戦しながらエリカは前を歩く晴光に声をかけた。

欧米人であるエリカに比べて、この履物に親しみのある彼は、むしろ着物のあわせの方を気にしながら足を進める。

「良かつたも何も、本人がそう言つてるし別に」

「そう」

「うん・・・まあ」

（口数が少ないな）

ニルはそれを一步離れた処から観察する。一人らしくない。というか、『普段の二人の関係らしくない』といったところか。

何かあれば蹴りが飛び、凶器が飛び出し絶叫し、（何か違う・・・？）首を傾げつつも、だいたいは合っているとは思う。そういう関係だ。（ボケとツツ「ハハ、うんこれだ）

つまりはそういう関係。腐れ縁とも言つ。

当時、晴光はエリカの三年あとに入ってきた研修生。局内で唯一の同い年ということで何かと一緒にになる事、もしくはされる事が多かつた。それから晴光が異例の一年で天才として研修を終えて、第五部隊から第四部隊に転属されてファンが加わってからも続く関係だ。

（三年）

自分達子供の一年は大人の四年に匹敵するほど濃く長いと言つたのは誰だったか。

それが真実なら、大人で言つ12年間一緒に居た事になる。

（・・・・長いな）

途方も無い。何せ、年齢の半分以上、3分の2あるかもしない。

ニルとエリカの6年間なら18年間だ。エリカや晴光の国ならほぼ

成人、本の国なら、13で成人、一応は一人前と認められるから、結婚していてもおかしくは無い。どちらにしろ、子供が成熟するには十分な時間ではないか。

そしてそれだけ同じ関係を維持するのは大変な事じゃないのか。

（意外に凄い？）

凄いのだろう、たぶん。

しかし今のこの状況は、その関係を壊すものだろうかと考える。

（まあ、僕もあんな事ファンちゃんが言つとは思わなかつたけど）

「後はお願ひします」

そう『隊長』が言つた後、真っ赤な顔で律儀にも手を上げて「わたしも残ります」と彼女はそう言つた。

ファンが医療の知識があり、身体強化を得意とする『本』であるから、それに誰も異論は無かつた。

驚いたのは、彼女が避けていた『禁忌』の兄弟の眼を見て、しっかりと澱みなくそいつた事だ。

それで晴光とエリカが何故こうなるのかは分からぬが、たぶん、恐らく、これは後退ではない。むしろ前進。

『いい変化』なのだろう。

内気で気が弱い彼女が、初めて、文字通り自ら手を上げたのだから。

結果・壊れない。（きっと）

「・・・良かつたんですか？」

沈黙を破るよしに、『隊長』が言った。

「え、えっと・・・」

ファンは少し思考を巡らし、振り返らなこまか、ややあつて頷く。
「だ、だいじょうぶです」

壁を向いてファンは言つた。

（ああもうー）

思わずファンは田の前の壁を殴りつけたくなつた。

（ だつて仕方ないじやない）

やつぱり田の前に居ると、認識してしまつと、ビリして話せないのだ。

もし言葉が出たとしてそれが形になるかどうかさえもわからない。
どもる、もしくは言葉に不自然に詰まる。その後の気まずい沈黙さ
え眼に浮かぶ。

（ああもう本当に嫌ー）

何が嫌つて、こんな自分が。

（ ・・・絶対変に思われてる）

だつてあの本の方の人の押し殺した笑いが背後で漏れている。
でもこれが最善の策だと、これも嫌といつほど自覚しているのだ。
これはファンの過去の経験談である。

「良かつたんですか」

今度は溜息交じりの声が届いた。

（ああやつぱり呆れられてる）

分かつていても、分かつてはいても、実際に認識してしまつとビリ

していつも落ち込むのか。

「大丈夫です」

今度は即答する。

「……いえ、えつと」

今度はあちらが言葉に詰まる番だった。

「あの、『自分達』と『話しても大丈夫なのか』ってことです」

「大丈夫です。私、両親居ないので」

「……そつですか」

咄嗟に言つて、（……しまつたあ！？）物凄く、これ以上ないほど後悔した。

（何で！何で今！これ言つ必要性が！何処にあつたつていうの！？）壁に頭を打ち付けたい。

が、出来もしないので考えるだけ無駄で（だからなんでそんな無駄な事を私はやつちゃうの！？）（ああもう、なんて馬鹿！どうしようもないばかなんだよ私！）

「……すみません。不躾で」

「（謝る必要なんて！）いいえつ！」

（だからなんでここにこんな感じでしか言葉が出ないの私！何で力んでるの私！…）

「『』めんなさ、いえ、すいません……」

（本当にこちらが『すいません』だ）

なんてどうしようもない。

ファンは肩を落とし、ここは眼を合わせて誠心誠意謝罪しないといけないと、ゆっくりと、それこそ本当にゆっくりと、前を向いた。

「私……えつと。……すいません」

恐る恐るつむいた顔を上げる。

「こ、本当ここからこそ…・・・」

そこには正座で心なしか肩を落として小さくなつてこる『隊長』が

居た。（あれ）

（困つて、る？）

無表情なのは変わらないのだが。（・・・・あれ？）

ぶはッ

後ろに控えていたスティールの堪えが爆発した。

「君達傍から見ると物凄く面白いんだけど…？」

かつ、と顔が熱くなる。

（そんなに笑わなくともいいじゃない！）

（だつて、頑張らなあや、自分が出来る」ことをしなやがつて思つた
んだもん！）

無意識に音を立てないようにしている事に雪女 昭珠郎は障子に手をかけながら今、気がついた。裸足の足が畳を踏めば、壁を背にして畳に足を投げ出し、予想以上に寛いだ様子の犬面が目に入る。こちらを見止めるや、肌が粟立つ夜闇に響く衣擦れのような笑い（要するにとても怪しく不気味）で、明るい客間の空気を揺らすばかりの犬面の子供は本当に大変、怪しく、不気味。出来れば関わりあいたくないがしかし何故か関わってしまう者共の部類に分けられた。

「……先程、あの兄弟と色々話した」

「ほー……で、どうでした」

「何も知らなかつたよ。可哀想なくらい何も知らない子達だ」

「それについての感想は？」

「……可哀想だ、本当に」「犬面は無言で先を促した。

「……無知が罪だというのなら、あの子達は知らずうちに確實に罪を犯す。優しい子だからなおさら。その背に負つのに早すぎやしないか？あれは私とは違う。私にはお祖母様が居た。しかしあの二人は？あの二人はお祖母様のことも何も知らない。知らぬところが進み、知らぬところで巻き込まれ、そうしたら

「珠女さん、この俺が一つ助言をいたしましょう」

犬面は弄んでいたあやとりを仕舞つて居住まいを正し、昭珠郎に向き直つた。

「あなたは人の血が、お祖母様の血が流れていらつしやる。時は妖よりも早く、人よりも緩やかでしょうとも。ですがね、その子供の側から言わせて貰いますとね、大人が思つていらつしやるよりも、子供も色々考へてるんです。助力が無けりや、何とかするし、言つ

たでしょう貴方。

『貴方とは違う』んですよ。あの一人は『兄弟』です。二人居るんです。道が違えば正してくれるだろう人も居る。『余計なお世話』つていうんですよ、それは、

穴の奥の、黒々とした眼が弓形を描く。釣り上がった犬の赤い口の裏からさらに続いた。

「俺はまだ小娘ですからね。俺よりも長く生きているの人たちは余計にずっと俺より大人です」

犬面は僅かに俯いた。

仮面が子供の両の手にすべり落ちる。

「それにあの二人は無知じゃないですよ」

その頭には大きい帽子で、見下ろす珠女にはその顔はちらりとも見えなかつた。

「貴方が彼らに話してくれちゃつたりしちゃいましたからねえ

『筋書き』に無い事をまーあ色々と」

愚痴るように出た言葉に、雪女は小さくなつた。

「僕、あつひの店で話聞いてくれね」
エリカはその背を見送った。隣に立つ晴光も、それをまわつと見送る。

「晴光」

「…………ん? 何」

「言いたいことあんならハツキリ言つてみなさい」

（子供っぽいんだけど）

寂しいなあ、とは口には絶対に出れない。

こんな時、距離を感じるのは、やつぱり一人と年齢が違うからだからだらううか？

性別が違うから？

それとも『本』だから

（わからない）

一年前、自分はどうだつただらうか。

（…………わからない）

生まれてからずっと、自分は『本』だ。

（…………わかんないなあ）

それ以外に、なつたことなんて。

（エリカはエリカ）

（晴光は晴光）

（僕は僕）

「…………ファンちゃんはファンちゃん」

わかってる。

（寂しい）

口には出れない。

だつて、認識してしまつと、

「…………いや、うん、なんていうか」

「珍しいわね。アンタが歯切れが悪いの」

「オレどんなイメージ…………？」

「馬鹿」

あたりまえだらう、といつような顔で、エリカは晴光を一瞥した。

「それ以外でも何者でもない馬鹿よ」

「それでさらにキた…………」

サンバイザーを外して頭をかぐ。

「で？ わつわと話しなさいよ」

「…………う～～～～～ん」

そのまま搔き龜る。ややあつて頭を抱えてその場に座り込み、やがてぽつりと呟くよつに言つた。

「…………オレつて、やつぱり異端者イレガヨリ、なんだよな」

「ええそうね。私もそうだわ」

見方によつては、『どの世界にも適合する』といつ点で、本の二ルやファンちゃん達も、ケイリスク兄弟もそうだ。少なくとも自分達の周りには例外は無いと、エリカは思う。

「…………うん」

そこまで晴光は沈黙した。

何をそこまで悩んでいるのか。しかも、自分には言えないらしい事を。

久しぶりにこんな面倒な事態になつたと嘆息する。久しく人間関係のあれこれには遠ざかっていたと思っていたのに。この部隊に配属

されてからか。

（逃げられないもののかしら）あたりまえでしょ、と失笑する誰かが自分の中にいるのも事実だ。

しばらくして晴光は重い腰を上げ、背を伸ばした。眉を顰めているその顔は、彼には不釣合いである。

「何か疲れるよな・・・・・

「・・・・・そうね」

気付けば出てきたその言葉。重い、とは重いといつていつてをいつのかもしれない。

わっとそれは考えていた以上に

息をついてふと隣を見ると、髪が掛かるほど近くの赤い隈取の眼とぶつかった。

「何言つてんだ若いモンが

嘲笑を含んだ声で、白い顔は笑った。

咄嗟に大きく後ろに跳んだ。砂埃が舞い、少し咽た。

警戒よりも驚きが勝る。（いつのまにあんなに近くに…）

「おわー猫みたい」

はしゃぐ面の子供の後ろには、晴光が棒立ちになっていた。

「エリカ！」

「つ馬鹿！」

じわじわと状況を認識する。

（田の前には赤い隈取のお面の子供、晴光はあいつに捕まつた。能力は…）

「かつ壁が！エリカ！」に壁があるんだけど…」

ペたりペたり。ある一定の場所から見えない壁に、晴光の手の平が阻まれる。

（結界？）

「麗しいお嬢さん。そこで見ててくださいね」

面が笑う。

「ふざけんじやないわよ」

二郎が居ないので、剣はこの手に無い。出来るのは本当に簡単な魔法、もしくは常備のナイフでの肉弾戦。ナイフ自体は戦闘用ではないが魔法と併用すれば

「ちょッ、バカエリカ！」

「誰が馬鹿ですつて！？」

「違う！捕まつてるのは…」

後ろに引いた肘が阻まれる。

（『見ててくださいね』）

「…・・・・そういうこと」

エリカは口の端を吊り上げた。

「さて、とつ」

子供は壁を難なく通り抜けた。「ふう

「何なんだお前！」

がちり。合わせた歯が鳴る。

「あらヤル気満々

「つたりまあだろつ！」

晴光は跳躍した。地面すれすれを滑空するの近い。

握った拳を引く。

「そんな本も居ないくせにイー」子供はオイデオイデをするように片手をひらひら振つて見せる。

「居なくても出来んだよー！」

空気に火花が爆ぜた。

「オレは常時発動型だかんな！」

「・・・・・げ、まじで！？」

慌てた様に頭を下げる一発目を避ける。そのまま足払いをかけてくるが、不発。続けられた一発目は晴光に眼をそらさず、後ろに飛んで避けた。

この間約2秒。

「この子速いし俺肉体派じゃないのにー！」

円を描くようにひたすら後ろに飛んで逃げる。

「逃げんな！」

「逃げるわボケエーあつたま軽いだろオマエー！」

「逃げんなッ！」

米神を晴光の火を帯びる拳が横殴りに狙う。

「やあー。」弾かれた面が空を飛んだ。

「ハツ、顔が見えたな」

「貴方のその台詞、まるで当て馬の三下みたいだと俺は思つねー。」

子供の頃から違つ。

「あなたは、自分の見ている世界を、どう思っていますか
言い聞かすように区切られて言われた言葉に、晴光は眉をしかめた。
「……どうも思わねえよ」

「……もういいです。もういいですよ」

子供は落ちた面を拾う。頭の後ろに回して着けた。

「大人しくしてりやあいいのにね」

「……な、何なんだよ」

あらかさまに肩をすくめて見せる子供に、晴光が僅かに肩の力を抜いたのを、それは見逃さない。

「 つぐ 」

「 晴光ッ！」

「はいど真ん中入りイツ！」

二つ折りになつてその場で激しく咳き込む晴光に、近づき身を屈める。

「晴光！？晴光、ちょっと出しなさいこのチビー。」

「チビ上等。もうちよいから見てなさいよ」

エリカは唇を噛んだ。

（考えなさい、考えるの、大丈夫ダイジョウブ……）

「晴光は頑丈だもの。私が殴つても蹴つても次の日にはけろつとしてるし、」

（二ルはどこまで行つたのよー。）

「見れば見るほどアンタ足蹴にしたくなるソラしてますねエー！ はつは

「ゴホッ・・・・・んだよ、てめえ」

「対してあちら。見れば見るほどそつくりで、あの顔であんな顔されると物凄く居た堪れません。俺もう、何か凄く悪い事しちゃった気分になります」

(何の話だ)

流れる汗がキモチ悪い。

上目遣いにその顔を見ると、僅かに口の端をあげて見下げるその顔が見えた。その顔を自分の耳元に寄せ、呟くように囁く。

「もう一度だけ。あなたはこの世界を見て、どう思いますか

「・・・・・どつも思わない」

「この場合、俺は『この大馬鹿者が！』、とでも罵ればいいんでしょうかね。それともシンデレ風に『ばかあ！』とでも？」

「うぐ・・・・うつそー」

喉の辺りが酸っぱい。

「・・・・・貴方は馬鹿だ」

「んなこと、散々友達に言われてるから知つてんだよ

「・・・・・大ばか者だよ本当」

「・・・・・何で泣きそつになつてんだ」

「まだ貴方は分からない。後悔してから改めたつて、遅い時だつてあるのに。それがとても、」

「何だよ

下を向いて袂で顔をぬぐつ。墨色の布の色が変わった。

「いいえ、何も？ ただの俺からのアドバイスです」
気持ち悪い。

やけに小さい人差し指を立てて言った。

「イレギュラーも登場人物です。貴方はそれを認めなさい。

・・・・認めて、早く楽になりなさい」

両頬を手の平で包まる。

「肝に銘じなさい。我が同胞」

吐きそづなほど、くらくらした。

薄墨の墨子（後書き）

もしかすると、次の更新は遅くなるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8700f/>

IRREGULARS（旧2008年試作版）

2010年11月23日00時46分発行